

草 唐 葡 萄 式 ヤ シ リ ギ

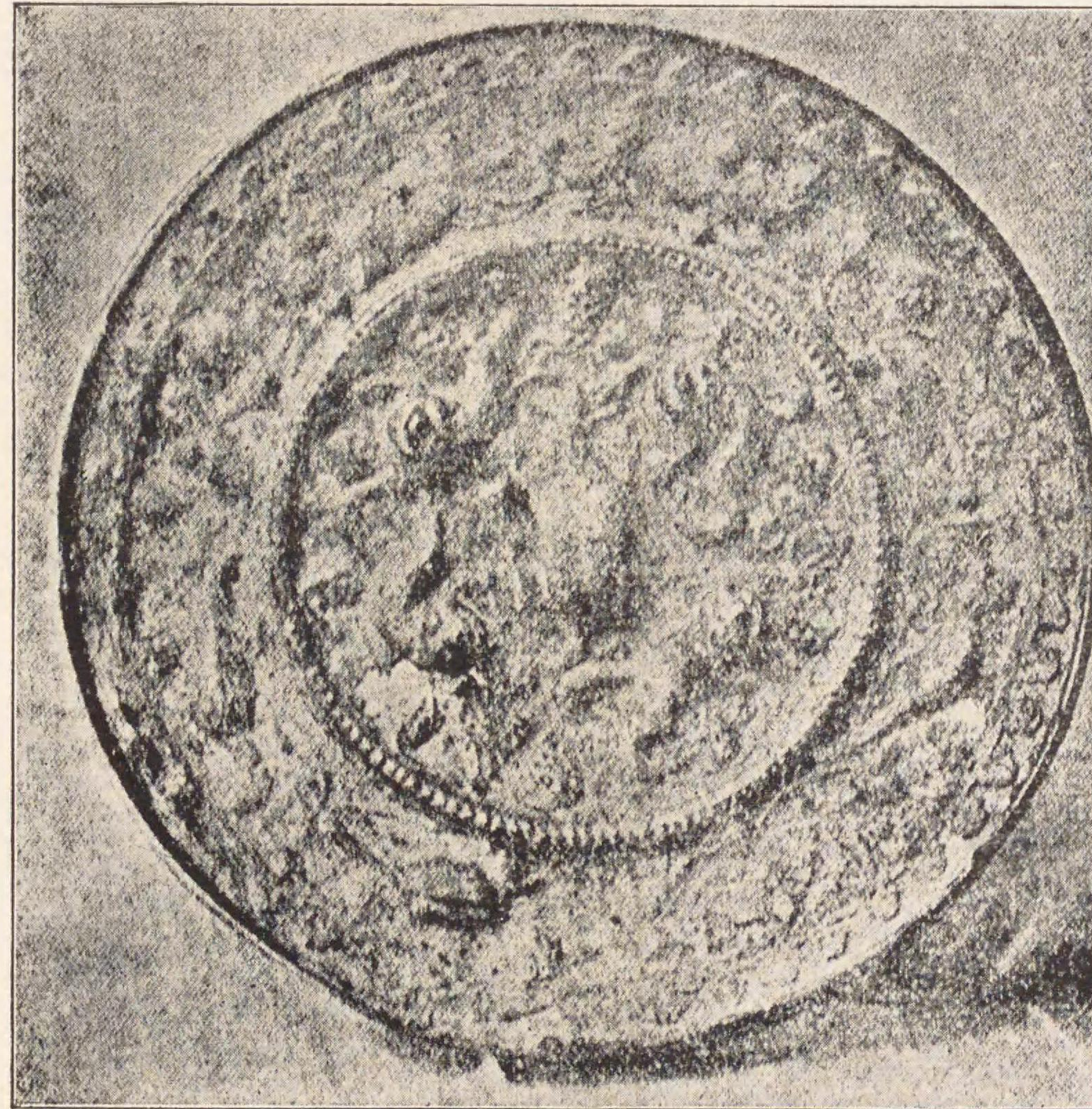
圖 三 第

様模陀密の子厨人夫橘

甲

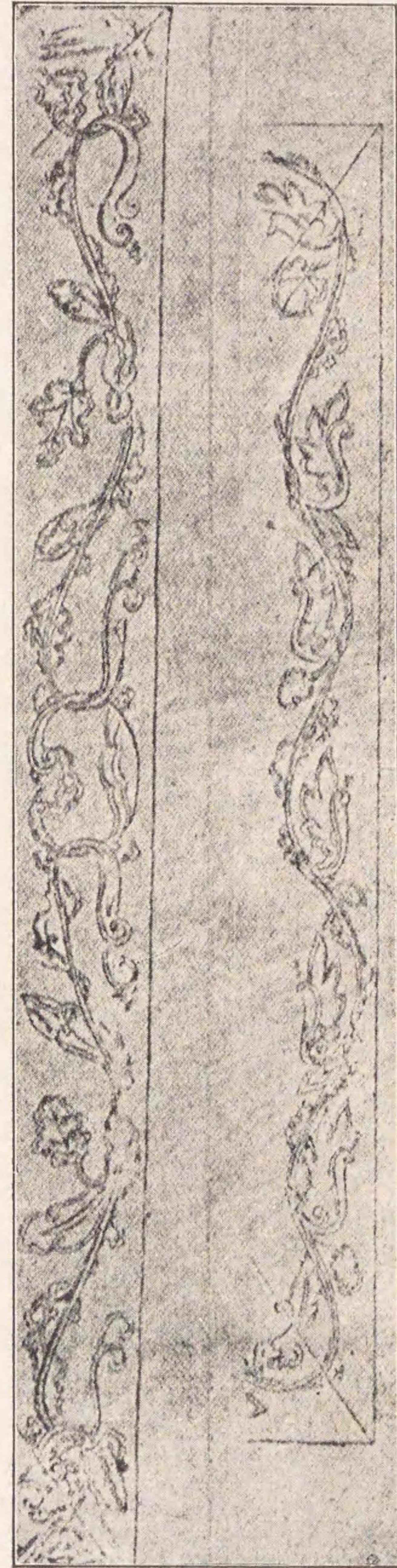
圖 二 第

鏡 銅 青 古 の ナ シ



(藏 所 館 物 博 室 帝 京 東)

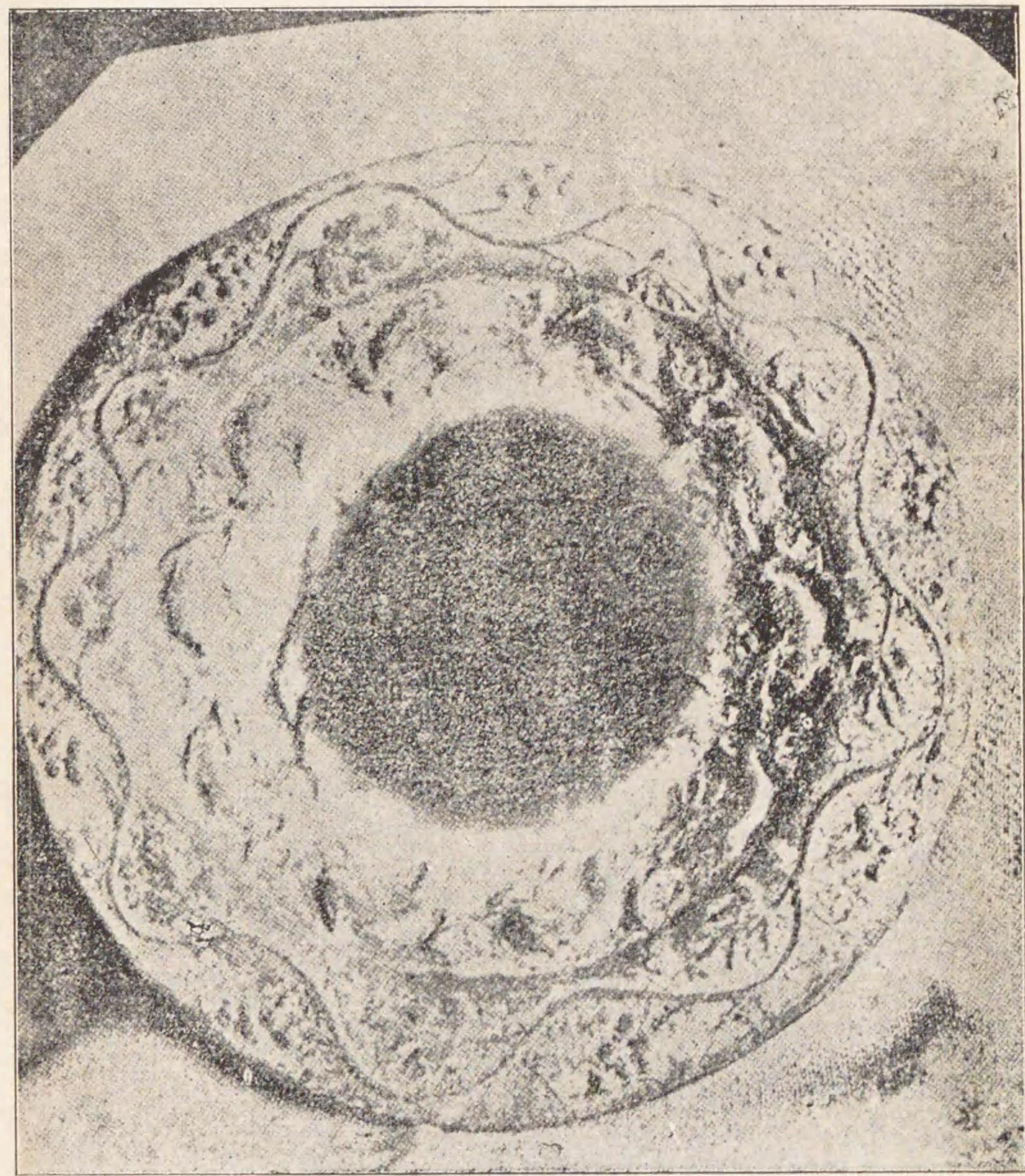
乙



(圖 八 十 四 第 圖 附 論 築 建 寺 隆 法)

圖 一 第

皿 瓦 古 の マ ー ロ



(藏 所 士 博 學 文 井 坪)

本では明ではありませんが、獅子であらうと思ふ理由があります。動物は元と何を示したのか是の標
又この文様は管にシナに止まりませんで、本邦までへもはいつて来て居ります。それは法隆寺

所藏の寶物の一つに橘夫人念持佛厨子と申すものがありました。名高き名物であります。橘夫
人と申すのは藤原不比等の夫人でありまして即ち光明皇后の母であります。この厨子の製作年代は
明らかにはわかりませぬが、その様式より推しますれば、推古と天平との中程にありまするもので
あります。この厨子の模様には色々のがあります。その中に葡萄唐草の一種類を發見致すのであ
る(第三圖)。このことに就きまして、伊東博士は左の如くに申して居ります。

模様ニハ數種アリ皆奔放自在ナル妙曲線ノ配合ニシテ明カニ其起原ノ印度西域及希臘ニアルヲ
示シタリ、而シテ其特ニ歎賞スベキモノハ即ハチ須彌座ノ上部ナル二重ノ「線形」ノ下部ニ施セ
ル唐草模様(四十八圖)之レナリ、其縱橫奔放ナル運筆ハ快絶ヲ極メ、其分布尤モ巧妙ナリ、其葉、
其幹、其實ハ吾人ヲシテ葡萄ノ變形ナルヲ想起セシム、之レ藥師寺ノ須彌壇ニ施セル葡萄唐草
ノ先驅ヲナスモノト謂フベク、其起源ハ未タ明ニ之ヲ追蹤シ得スト雖、要スルニ希臘印度ノ様式
ヲ具フルモノニシテ、彼ノ推古時代ノ古拙ヲ脱シテ却ツテ優麗ノ趣致ヲ存シ、明カニ彼ノ推古時
代ヨリ一段ノ進化ヲ致セルコトヲ觀察スヘシ、其唐草ノ左右同形ヲ缺キ意ニ任セ筆ニ從テ之ヲ描
キ而テ能ク分布ヲ誤ラサルニ至リテハ即ハチ吾人ノ尤モ驚歎スル所ナリ、

密陀文様の葡萄唐草は松山鏡のより一層形式に流れて居ります。第一圖のローマ瓦皿の唐草は純
粹のギリシア式、唐時代、葡萄鏡のは寧ろペルシア式と申すべく、密陀文様のはシナ式と呼んで

宜しからうと存じます。すべて文様は年代が下るだけにそれだけ崩れて形式に流れるものでありまして、葡萄唐草の場合に於きましても矢張り左様であります。ローマ瓦皿の寸法は直径一二、七センチメートル高さ二センチメートルであります。密陀文様の長さは甲、一メートル乙、一、二二メートルであります。

文様の例はこれ一つにして置きまして、今度は品物の例をあげませう。オランダ領のインドネシア諸島の中に、皆ではありませんが、殊に極く小さい沖の島々に餘程面白い古物が傳はつて居りまして、土地の人民は之を國有品と心得まして傳國の寶物と致して居るのである。従つて神聖の品物で、不斷供物を捧げまして神として之を祀つて居るのです。この類の品物の中で、最も著しいのは青銅製の太鼓でありまして、それに次ぎましては、同じく青銅製の銅鑼カサであります、尙その他にも不思議な器物が大分ございましてオランダの考古學者あたりが、頻りに工夫を凝らして調査致して居りますが、何分未だよくその傳來原産地等のがよくわからぬのであるです。

この青銅製の太鼓がなせ非常な面白いものであるかといふに、この品物は獨りインドネシア諸島の中に發見せらるゝのみならず、シアムの内地におきましても、朝廷におきましても、現に實用品として今日使つて居るのであるし、又歴史上からして考へて見ますならば、シナの湖南、貴州、廣東、廣西の諸省一帯の地に行はれて居りましたので、尙それより南、今のトンキン即ち當時の交趾

の地方におきましても、實用に用ひられて居つたことは歴史本に歴々あらはれて居ることである。どういふ品物かといひまするに、我等の知つて居る所ではシナの方の書籍に出て居りまする最も精密の記述は、南宋の周去非が、乾道年間に廣西省につとめて居りました時分に實物を觀察しまして書いて置きましたことであります、即ち左の如く申して居るです。

廣西土中銅鼓、耕者屢得之、其製正圓而平其面曲其腰、狀若烘籃、又類宣座、面有五蟾、分據其上、蟾皆累蹲、一大一小相負也、周圍款識、其圓紋爲古錢、其方紋如織篔、或爲人形、或如琰璧、或尖如浮屠如玉林、或斜如豕牙如鹿耳、各以其環成章、合其衆紋、大類細畫圓陣之形、工巧微密、可以玩好、銅鼓大者闊七尺小者三尺、所在神祠佛寺皆有之、州縣用以爲更點、交趾嘗私買以歸、復埋於山、未知其何義也、……亦有極小銅鼓方二尺許者、極可愛玩、類爲士夫搜求無遺矣、

(大脱カ)

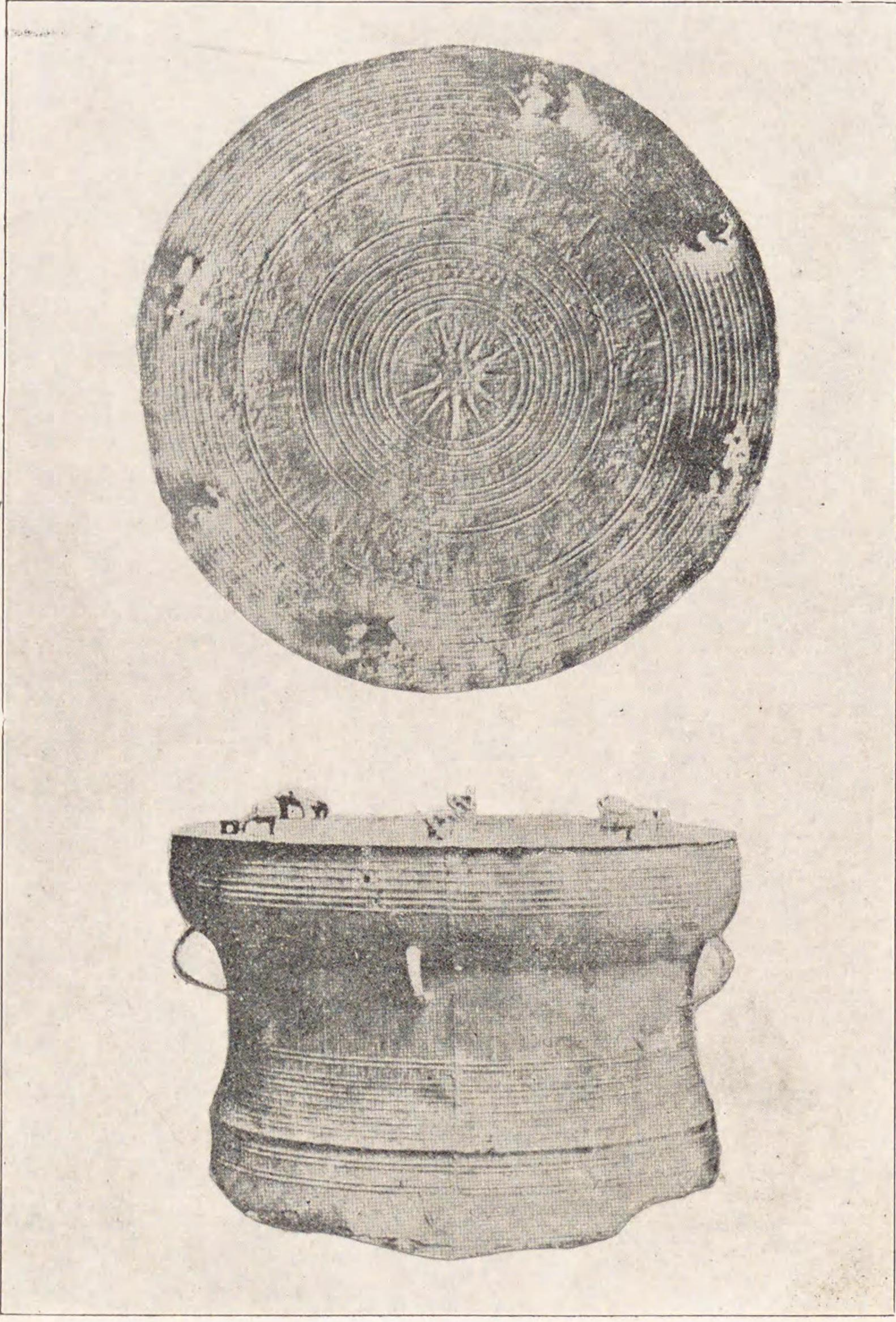
シアムの内地に現にありまする品物は、土地の名前でマホラックと申すさうで、シアムの部落に於て用ひて居りまするのもやはり青銅製で、クロング・クフ即ち蝦蟇太鼓と申すさうであります、厚さは四分の一インチ即ち我が曲尺の二分位大小は面々のこのみ價格次第で、出來のよいのとわるのによつて、代價にはいろ／＼高下がありますが、一番やすい品でも五十チカル位しますし、宜いものになると五百チカルも致します。チカルといふのは今日の銀相場では先づ六十錢くらゐのものを見て宜しうございませうで、この割合で換算しますれば三十圓から三百圓ぐらゐの品物となるのです。

又シヤンの部落より西の方に當りまして、やはり同一の種族に屬しまするカレンといふのが居りますが、このカレンの部落のものも、やはりこの銅鼓を貴重致して居りまして、大小出来不出来、いろいろございませうが、極く粗末のでも三十ルピーの價がありまして、極めて精巧の品でありましたれば千ルピーも致すのです。ルピーの相場は年々あがつてゆきますが、假りに一ルピーを五十錢として計算しますれば、十五圓より五百圓のねうちとなるのであるのです。

又マライ諸島の島々に、澤山ではございませませんが、あちらこちらに發見致しますのがありまして、その中今日までわかつて居る所で最も出来のよろしいのはサライエル島に傳はつて居ります品であります。このサライエルといふのはセレベスの南海岸を隔てまして、沖にある極く小さい島で、粗末な地圖に載つて居ない位の島であるのです。かやうなものが残つて居るのが殆んど奇態に思はれるくらゐの場所であるのです。このサライエルの青銅太鼓は鼓面の直径一・二六メートルで、その目方は十三貫目程であります。その外フロレス、スムバワ、ロッチ、レッチ、アロール、クルなどの諸島にも類品があります。

かやうに方々にあるのでありますが、全體の形式は何れも皆一樣なんで、周去非が書いて置きまする當時廣西省の土の中から出ました品物と、様式におきましては皆同じです。即ち大體に於て申すならば、圓筒状で、かた一方の方が塞がつて居りまして、他の方があいて居るのであります、即ち

第一圖



南シナ島發見之古銅鼓 (9/100)

(ドレスデン博物館所藏)

底がないのであります。このあいて居る方は少しすぼまつて居ります。で、底のある方よりあいて居る方へ向ひまして、少し狭くなる薄金の筒なんです。この底と申して然るべき所は則ち太鼓の面でありまして、こゝを叩くので、懸けたり昇いだりする爲に耳が附けてあるのです。この鼓面の真中邊は通常少し凹んで居りまして、通常圓い形のものから太陽の光線のやうに線が何本も鼓面の縁へ向けて迸り出て居る姿の紋があります。その他に尙この太鼓にはいろ／＼様々の修飾が施してありますので、その修飾品も多くは浮文様であるのです。出まする地方によりまして、この文様の種類は少々變りまするが、廣西省邊に出まする品は周去非が委しく書いて置く通り、種々様々の文様があつたものと見えまする（第一圖）。尙その他の報告によりまして、あるひは鎧武者が附けてありましたり、あるひは花や鳥、樹や魚、獸の類が附けてありましたり、極く稀なる場合におきましては龍、鶴などの附けてあるものもありますし、又現にわかつて居る所では唯一品より原物の傳はつて居ないので、雲雷の二字が古篆で彫つてあるのがある。しかしかういふ龍とか鶴とか篆字などがありまするのは除外例でありまして、通常は外の文様があります。

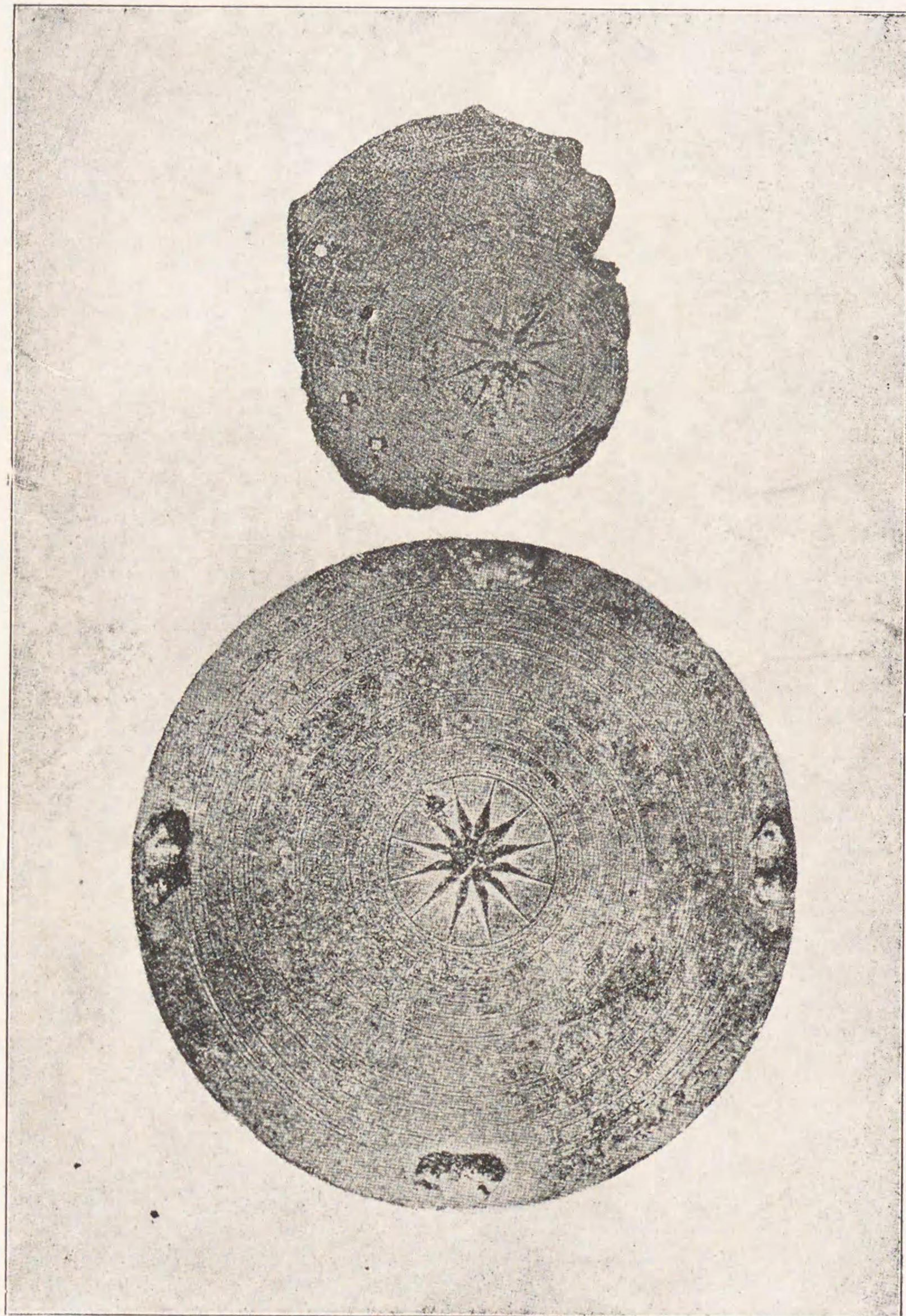
このいろ／＼様々の文様のありまする中で、特に奇怪なのは種々様々の動物なのであります。又その動物の中でも、殊に學者のあたまたまを痛めるのは蟾でありまする。周去非も已にこのことは申しまするので、青銅太鼓を見ますれば、十中八九までは蟾が附いて居るのです。何れも皆別に蟾を

鑄まして、あとから太鼓へ附けたもので、あるものは附いて居た蟾が落ちて足跡の残つて居るものもありません。蟾の数はきまつて居ません、多数の場合では四つでありますが、多くあるのはまだく澤山居ります。又周去非が申すやうに、互におんぶしたやうな恰好に列んで居るものもあり、又珍しい品では、太鼓の縁に幾つも群つてしがんで居るものもあります。蟾に次ぎまして不思議と思はれる文様は象、犀、孔雀、その他船、魚、棕櫚類の樹などであるのです（第二圖）。

とにかく何處の地方に發見せらるゝに拘はらず、この青銅鼓に附いて居ります飾の中で、最も奇怪で最も眼に立つのは蟾であるのです。このことが一向合點が參らるので、いろ／＼の研究者が説明をするのに甚だ困つて居る次第であるのです。この青銅太鼓のことをシナの書籍では、古い昔より即ち六朝の初より銅鼓と申して居つたのでありまして、常に南方の昔の言葉で申しますならば蠻の種族、六朝以後に屢々申す言葉では夷獠といふものと關聯して記事があります。種々の記事よりして見まするに、疑もなく蠻の種族の諸部落におきまして用ひて居りました固有物で、シナ人が製作したもので決してないのです、どの點から考へて見ましても、夷獠の製作品であります。

この夷獠は、今も貴州や雲南の邊には澤山に居住して居る筈でして、今は總稱と致しまして苗子と申します。これはシナの古典に名高いかの有苗の子孫でありまして、三千年以來、種族の名稱を

第二圖



(9/100) 鼓銅古之見發島バジャ

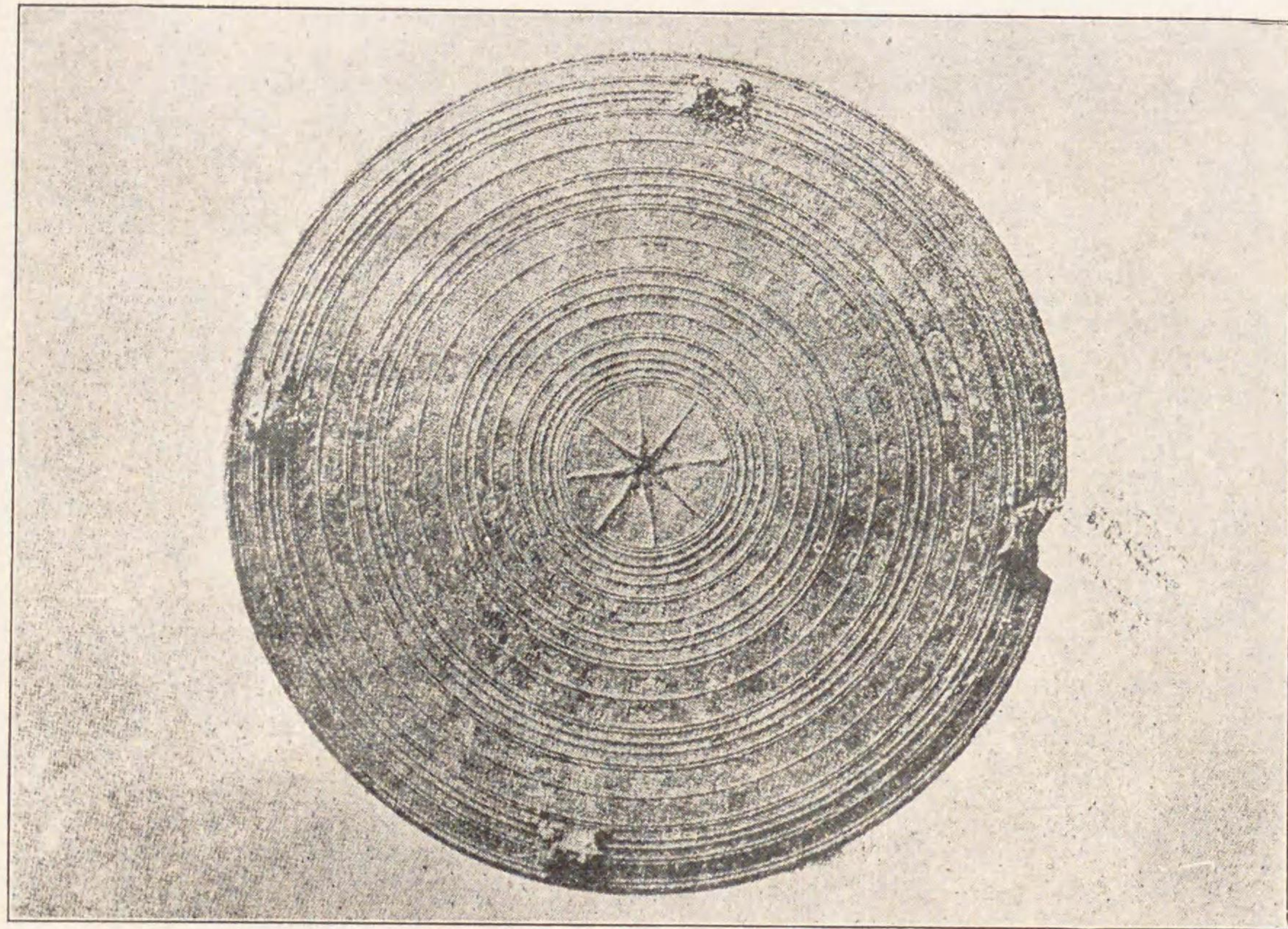
(ドレスデン博物館所藏)

變へませず、又種族も亡びないと申す有名なやつで、この有苗を伐り従へまして、シナ帝國を起すにつきましては、漢種族がざつと三千年かゝつたと申して宜しいのであります。今はもう謀反を起すといふやうな元氣はありませんが、今の清朝の初の頃には、あいらはまだ堂々と兵を擧げる元氣を持つて居たのです。本邦のアイヌは、私が見るところでは、もと東は天龍、西は越前岬邊を境として、その北一圓に住んで居たものと見えまして、非常な猖獗なやつでしたが、我等の祖先に追ひ詰められて、今は北海道に甚だ以て意氣地のないアイヌとなつてしまひましたが、これも我等の祖先を苦しめたのは筆紙につくし難いことで、武士の起つたのも、尙進んで云へば武士道の起つたのも、この結果なのであります。アイヌもまだ種族としては尙残つて居ますし、その言語さへも失ひませぬ、苗子もやはり左様で、中々以てアイヌどころでないので、人口も中々多いやうですし、その居住して居る地方も中々広いことで、今も尙固有の言葉をしゃべつて居るので、唯英氣だけが沮喪したといふだけのこと。今日もこのメアオツが現に銅鼓を實用に用ひて居ますかどうか、その邊は實地を踏査して見ませんければわかりませんが、二百年前までは確かに實用に用ひて居たことはわかつて居ます。

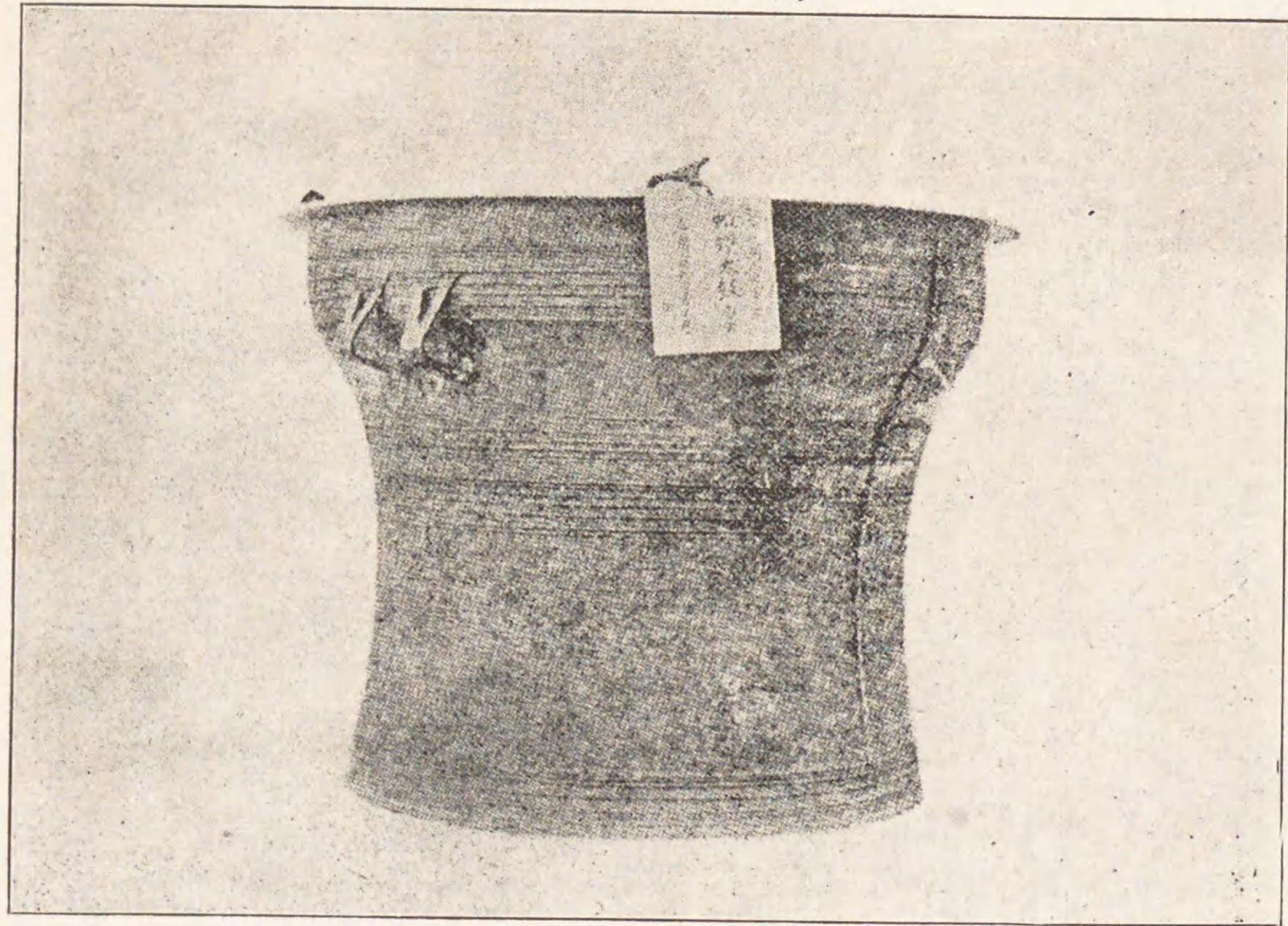
またシヤムの内地に居まするシアンやカレンは、このメアオツと類似の種族でありまして、何様その言語の研究は一向とゞいて居りませんが、はつきり何とも申上げることが出来ませんがとにかく廣

鼓 銅 シェン

(藏所館物博室帝京東)



(面 鼓)



(面 側)

い意味におきましては、苗子の部落と申して然るべきものかと思はれるのであります。それで又現に銅鼓を自らつくりましたて實用に用ひて居るのである。

我が帝國博物館に銅鼓の標本が一つあります(第三圖)。これはシヤムの皇族の寄贈品でありましてこのシヤムの現に鑄ましたものと存せられます。その大きさを見まするに、鼓面の直径二尺五分、高さ一尺五寸五分、底の直径一尺六寸ありまして、鼓面には浮彫の蟾が四つ、光線八本を放つ星形に同心の圓形を幾重にもめぐらせまして、その間に圖面に見ゆる通り、種々の花鳥魚類が彫つてあります。これは現在今日のはなしであります。

これに反しまして、マライ諸島の住民は、自ら銅鼓をつくつたと申す傳へがないのであります。然らば誰から輸入したかと尋ねましても答がないのであります。今日の土人は土の中から発見したと常に申すのです。何様ヂャバとかスマトラとかいふ邊でありますれば、インド文化が一時盛にはいつて居りまして、殊にヂャバにおきましては青銅の鑄物をつくる技術は随分進んで居つたことですから、銅鼓をつくつたことなどは一向疑ふべきでないやうに見えます。又明末の張燮が聞き出した報告によりますればヂャバにおきまして盛に銅鼓を鑄たといふことで、マライ諸島中ではヂャバの銅鼓と申せば最も名物であつて、數十兩の價格であつたといふことですが、どこへゆきましたか、今日はヂャバの島におきまして銅鼓を発見することが非常に少いので、わかつて居る所では何に

もかにもつまらん標本が三四枚あるばかりであります、名作でも何でもありません極く粗末な安物としか思はれぬ品が三四枚あるばかりであります。それゆゑに張燮の聞き出しました報告は、果して實を得て居るかどうか、こゝ一番研究を要する話なのであります。若し張燮が正しいとするならば、チアバの銅鼓が、どうして消えてしまったのであるかその邊のことはとくと穿鑿しなければならず、もし實際チアバに品物が非常に拂底で、おまけにその品が極々下等なものといふことを假定すれば、どこからか輸入したといふ説になるのです。何にしても銅鼓は出来のよいものなれば莫大の價格で賣買したものでありますから、つぶして地金としてからにポルトガル人やオランダ人やらがヨーロッパへ持つていつたといふことは想像できません、あたまからあひますまい。

サライエルとかロッチとかその他まだ他にもいくらもございます沖の小さな離れ島にありますが銅鼓に至りましては、無論土人が自ら製作したことは思ひもよらんので、これらはもとより輸入したことは明である。殊にサライエルに傳はつて居る品は稀代の名物でありまして、土地に於ては神と崇められ傳國の寶物でありまして、オランダ政府は三千グルデン、ざつと二千五百圓ほどの價格で賣らぬかと申したのに、土地のものは賣らなないのであります。サライエル島にあります品ほどの名物は、銅鼓が澤山に集つて居ますドレスデンの土俗學博物館にさへも類品がございせんのです。これなどもどこから持つて來たのですか、餘程研究を要する次第であるのです。

又ボルネオの住民で、ダヤクと申せば極めて有名な野蠻種族であります。これが龍の模様のあります青銅銅鑼カラカネを持つて居ります。龍はシナ固有の裝飾でありまして、自餘の國には嘗て發見しません模様であります。又あいらが自ら青銅を鑄ましてからに、銅鑼をつくるなどいふ技藝がありべきでありませぬ。無論どこかゝらの輸入品でありませうが、これも一番研究を要するのであります。これにつきまして張燮が聞き出して書いて居ることがありますので、多少の参考になると思ひますから、こゝに引きませう。處は文郎馬神と申すので、ボルネオ南方の今のバンセルマシンであります、その記事の中にかやうなことが書いてあるのです。

入山深處有村、名鳥籠里彈、其人盡生尾、見人輒掩面、羞澁欲走、然地饒沙金、夷人携貨往市之、擊小銅鼓爲號、貨列地中、主者退丈許深山、人乃前視貨、當意者置金子貨之側、主者遙語、欲售則持貨去、不售則懷其金蹣跚歸矣、隣境又有買哇柔、每夜半盜斬人頭以金裝之、故夜必嚴更以待。こゝにいふ小銅鼓は恐らく實際にダヤクの間に發見します青銅製の銅鑼ではなからうかと想像が出来る。ボルネオの島にはこれまで銅鼓を發見したことはないのであります。

本邦におきましては銅鼓などが勿論發見せらるべき筈がないので、又實際土の中から出ましたといふことも曾て承はりませぬ。たまさか三四枚ありますものも、履歴は大抵わかつて居りますが、何れも皆外國傳來品で若林勝邦氏に據りますれば一つは徳川公爵家に、一つは羽後の國仙北郡大曲村

の小西家の所藏で、高さ九寸二分、鼓面の直徑一尺七寸九分ありまして、慶應三年に羽後の國の海岸へ漂着したと申すこと、又一つは轟氏と申す人の所藏であるさうです。尙子爵大給恒氏も一枚持つて居られるさうで、明治十六年に古銅鼓考といふ題で非賣品の論文を御著述になつて居るさうです。若林氏の紹介によりますれば、かういふ御説がその中に出て居るさうです。

余近獲銅鼓、前面徑一尺六寸八分、施輪廓十一、邊側傍高九寸四分、施輪廓十四、邊廓間畫紋每處異様、鑄法極精緻、銅色黯澹、襯水銀色、點赤綠斑、古色鬱然、試叩之、革聲也……思、西南蠻夷久有銅鼓、由馬援孔明獲之其名始顯、故後世謂此鼓之類統名爲漢銅鼓乎。……

又子爵は左の如く申されます。

古、銅鼓、在我邦者、其一公爵徳川家藏、其二子爵清岡家藏、此鼓四隅有蛙、余得觀之、其三寛政年間豊前守從五位堀田正毅藏、觀其圖與余之家藏形相似而非也、不知堀田氏今猶有之否、其四岡内氏藏、其五、六、二商人所藏云、余未及觀之、蓋此鼓之類形質年代大概相同、皆二三年前齋來于我邦者、想應千餘年前南蠻製之、非馬援孔明所造也、而古鑑拘傳説、夫乾隆帝古今之英主、編纂官亦一代之博識、豈不之知而爲然乎、蓋尊中國而諱蠻夷耳。

明治戊戌暮秋

龜 崖 識

大給子爵は本邦におきまして銅鼓のことには最もあかるい方でありますが、そのしらべられた

結果は、上に引きました子爵の文に書いてある通りのことである。何様まことにわからん性質の道具でありまして、いろ／＼人があたまを悩まして居るのもつともであります。

ヨーロッパにおきましても銅鼓の調査にかゝりましたのは近年のことでございます。このことにつきましても説を出しました人もまことに尠うございます。ヒルト氏は千八百九十六年に諸蕃志の海南の條の譯註を著されまして、本文に銅鼓といふことが出て居りますので、自然銅鼓に就いて説を出す必要がありまして少々考案を出されましたが、西清古鑑の説を鵜呑にされて書いてありますので、一向新説も何もないのであります。又オランダのファン、ヘエフェル氏も實物に基いて説を立てられたことがありますが、この人は唯實物だけでシナの書籍を一向しらべられなかつたものから、とんだ臆測杜撰の説となりまして惜しいことには引用するね、うちもない次第であります。そこでオランダのライデン大學の教授ホロート氏が、從來に無い精密なる古銅鼓考を始めて出されまして、その説はまだく定説とは参りませんが、とにかく從來人の考へませなんだことを、とにかく説き出されたのであります。學界に裨益すること甚だ大でありますので、先年私翻譯して、處々に自分の増補をも添へましたりして、史學雜誌に出しておきました。就いて御覽を願ふ。考古界の第一編第二號第四號第六號の三冊に、上に引きました大給子爵や若林勝邦氏や八木榮三郎氏の考案が出て居ります。これも併せて御一讀を願ひたいのである。

しかし銅鼓の用途に就きましては、格別不審を打つに及ばないのでありまして、シナの古い書籍によりましても、又シアンやカレンやタイ即ちシヤム人やらの今日實際用ひて居ります有様によりましても、尙亦マライ諸島の沖の島々にあります品を、土人が如何様に用ひて居るといふことより考へて見ましても、大抵考案は附くのであります。

簡單に申上げませうならば、數多の人間を呼び集むる爲めに、まづ之を叩きます、殊に戦時に軍隊を募集する爲めに叩きますので、とりも直さず陣太鼓であります、これが先づ第一の用途であります。

次には神やら鬼神やらを祭りますときに擔かぎ廻りまして叩きましたので、多分祭の行列に使つたのでありませう、即ち祭享用の樂器であります、これが第二の用途であります。

次ぎましては神社に懸け置きまして、祀禱致しまする者が叩く爲に具へてあります、又病氣のありました時分などに、固より文化の程度の低い人民のことと致しまして、藥を飲むなどいふことは存じませんから、御祈禱を致します、その時分に叩きます、即ち祈禱用、又神の注意を請ふための樂器でありまして、先づ以て鰐口の類でありますか、これが第三の用途であります。

次ぎましては公けの儀式、その他すべて盛なる祭典のあります時分に叩く樂器であります、先づ儀式用樂器と申して宜ようございませうか、これが第四の用途であります。

次ぎましては時刻を報告しする爲め日の出没を報じする爲めの道具ともなりますで、まづ申さば時の鐘の種類でありませうか、これが第五の用途でありませう。

最後に、又傳國の寶でありまして、國家の運命もこの品の存否によつてかゝり、従つて國民が非常に之を鄭重に致しまして、神様同様の取扱を致すと申すこと、簡單なる言葉を以て申さうならば、所謂神器の類でありませうか、これが第六の用途でありませう。

銅鼓の用途は大凡この六箇條で盡きて居ります。かくの如く銅鼓の使用方法是大凡わかつて居りますが、いかんとも合點の參らんのは銅鼓の特有裝飾と申して宜しい蟾かへろであります。

この蟾かへろが銅鼓に對しまして重大なる關係があると思はれることは、シヤンの部落におきまして之を蝦蟇太鼓と申して居ること、又蟾の數が多いだけねうちが張ると申すことなど、明らかに關係の重いことを示すと思はれます。ヨーロッパにありする品は、十中の八九まで蟾が附いて居るので、圖面は確たしかかどうか甚だ當てにならないが、西清古鑑に出て居ります銅鼓の圖も、とにかく半分は蟾が附いて居ます。本邦に現存して居る品には、蟾の附いて居るのは二枚より無いらしい、おまけにそれも僅かに四つしか附いて居ません。上に申上げた使ひ途だけでは何分蟾の説明が附かのであるです。そこでこのことを苦しみまして、ホロト氏が近頃斬新の説を出されたのであります。ホロト氏の考はいづれ史學雜誌を御讀みになればよく御わかりになることですが、先づ搔かいつまんで

申さうならば、銅鼓の重なる使ひ途の一つは雨乞の時分に叩くのではなかつたらうかといふことなので、いかさま一應御もつとも申さねばならぬのであります。しかし氏も甚だ躊躇される通り、シナの書籍にもシヤム内地の諸部落のものといふことにも、マライ諸島の土人の申すことによりまして、雨乞の時分に叩くのが最も大切の使ひ途であるが故に蟾を附けて置くのであるといふことは頓とんと出て來るのでございます。現に銅鼓を使つて居るものが、左様な説明を頓とんと致さんのである。そこでホロト氏頗る困られて、たとひ雨乞の時に使ふ爲めにあらずとするも、蟾は即ち幸福を意味して居りはせんかといふ説を出して居られます。蟾は雨を降らす動物であるといふことで、雨を下す神として之を崇めました太古のインド人の習慣もありするし、又雨を降らせる道具と致しまして蟾を使ひました太古のシナ人の習慣もございするからして、雨乞用の太鼓と致しまして銅鼓に蟾を附けて置きますならば、甚だもつともな理窟があると見えるのであります。しかし確實なる證據があがつて來ませんから困るので、己むことを得ず、蟾は一の形象シムボムであつて、取りも直さず、幸福を意味するといはれますのです。

蟾が幸福を意味すると申すことは、蟾が降らします雨は、即ち幸福を意味致します。例へば漢語で天の恵めぐみのことを「雨澤」と申します、この漢語の出ましたもとの思想を考へて見ますれば、雨は即ち恵めぐみといふことを意味して居らなければなりません。その他にも雨を恵のシノニムとして使ひ

ました例は、捜せば随分出て来やうと思はれまする、かの其角の「田をみめぐりの神ならば」の發句によりまして、本邦人でさへ、雨と恵とは多少聯想を附けて居つたものと云つても宜いかと思はれる。畢竟する所が、農民の習慣と致しまして、その依頼するところは専ら雨にあるので、適當の時に都合よく雨が降つてくれますれば、富裕を得られまするので、これがはづれますれば貧困に陥りまするのでありますからして、雨即ち恵といふ考を出したのは當然のことと存じまする。さすればこの雨を來たすといふ蟾が、恵のシムボルとなつたも無理ならぬことと思はれまする。勿論これは臆測の説で、一の想像説には過ぎないですが、ともかくも漢銅鼓の蟾の説明として出ました、これが唯一の説なのであります。

かくの如くシナの南方よりインドシナを経ましてインドネシア諸島の東端に至りますまで廣がつて居りまする銅鼓はいづれどこかに本來の産地がありまして、それより方々へひろがつたものでありませう、又それより技術を傳播致したものでありませう。この銅鼓の原産地を尋ねることが甚だ困難でございます。インドネシア諸島は十中の八九までは恐らく原産地ではありますまいし、インドシナのシアンは現に銅鼓をつくつて居ますけれども、いづれどこからかこの技術を傳へたものであらうと思はれるのであつて、銅鼓の形式裝飾の意匠などを段々に古くたづねて遡つてゆきまするといふと、どうもシナの廣東廣西の二省の地あたりから出たものでないかと思はれるのである。

さすれば六朝の初の所謂夷獠が本來の專賣者でありましたので、この特産物を鑄ますことは、彼等が太古の時代より持ち傳へて居りましたことと思はれるのであります。さうしますると、次に起つて參る問題は、マライ諸島邊へ參つて居る銅鼓は、直ちに廣東廣西の海岸から船積みにして參つたのであらうか、あるひは又シヤムの内地を経まして今所謂カムボヂアの海岸邊からでも船に積んで參つたのでありませうか、こゝら邊を研究しませんければならぬので、とりも直さず古代に於けるシナ南方インドネシア諸島との間に行はれて居りました通商の線路の研究と相成ります。若しこの研究が何とかしてつきまするならば、今のカントンが貿易港として、いつ頃から成り立つて居つたものであるか、その聚散しました貿易品は何であつたらうか、又いづこの商人が重にカントンの港へ出は、いり致したのであらうか、又シナ（支那）^{古音チナ}と申す國名がいつ頃より行はれて居つたのであらうか、又誰が附けたのであらうかなどいふことも段々手繰つて研究のつく筈なのであります。

私が今こゝで鳥渡考へるところでは、チナと申す名稱は唐の代におきましては即ちカントンのことであつて、南洋諸島の商人が用ひて居りました言葉ですが、恐らく太古より左様申したのではなからうかと思ふのです。カントンの最も古い名前は番禺であります、これはたしかかどうかは知りませんが、カントンの市街内に番山禺山といふ二つの山があつたので、山の名から採つたのであ

らうといふ説なんでありませう、どんなもんですか、しかしこれも御受け合ひは出来ぬのであります、あるひはもつと意味のある名かも知れません。又古い名前で南海とも申しますが、これはシナの南の海に臨んで居るから申した名前、申す迄もなくシナ人の命名であります。いづれにしても、たしかにわかつて居る所ではカントンが貿易港として立つて居りましたのはまづ三國の吳のときでありまして、六朝の初めには無論立派な開港場であります。集つて居る商人は南洋からインドへかけての諸國の商人であります。しかしカントンが貿易港として成り立ちましたのは三國の吳の時ではございませう、もつと古いでせう、馬援が今の廣西省の地を占領致しましたときよりも、恐らくもつと古いのでせう。言葉を換へて申せば、この地方が未だ充分シナの領土と化して居らんときの話で、従つてシナの史料に、委しい事情が上つて居らん時なんでありませう。これは想像説でありますが、とにかくインドネシア諸島の銅鼓の傳來が甚だ不明でありますので、段々に推測を下しまして、かくの如き想像を出すのであるのです。

これは一つの古器物を史料として、極めて不明の時代の穿鑿を致しませうと心得まする時の一例であります。

第六 系 譜 學

系譜學は、極く手短かな言葉で申すならば、所謂系圖の學問でありまして、いづくの國にも甚だ古くより開けて居りまして、史學のあります以上は相並んで立つて居つたものでありまして、例へば本邦の古事記の如きは大體よりして申すならば、皇室の御系譜を目的として述べたものであります、又ペルシアなりエジプトなりの古い碑銘を見ましても、往々にして系譜が書いてあります。何様歴史上の事實は申迄もなく、一般國民の仕事であるのですけれども、前に申す通りに、國民一般がガヤ／＼相談を致した所で、實際何等の仕事も出来るものでなし、これには必らず一同を統べ率うる所の人がいりますので、あるひは國民一同が意見を立てまして、この人にその執行方を依頼することもありませうし、あるひはその人が己れの意見を立てまして、國民一般に相談をかけまして、一同の承諾を経て之を執行致しますることもあります。とにかく國民一般を締めくゝる所の地位にあるので、非常な著しい責任の重い大切な役目でありますので、古い歴史に於ては國民一同の行動がかくの如き地位にある人の一個人の事業なるかの如く記憶され易いことなのであります。極く古い所になりまして、國民の記憶がもはや達し得ぬ所になりますと、かくの如き人物は遂に變じて神様となつてしまふのである。よしや神様になつてしまふ太古の時代は申さずとも、それより遙か後のはつきりわかつた時代に於ても、かゝる地位にある人は、何か格別の力量があつて、面々共よりは數等すぐれたる人才なるかの如く思ふので、それが傳はり傳はつて、遂に

かの英雄崇拜の有様となるのであります。さすればこの所謂英雄崇拜は人間の天性に基くと申しても殆んど誤の無い位の一般の性質のものであつて、何れの國におきましても、尠くともある時代には存在致して居つたのであります。

現今のフランス人は共和主義で、一個人の自主自由を盛に主張しますが、それにも拘はらずナポレオン一世のことをいひますれば、殆んどフランスの國家同様の如くに崇めて居ります。又自由平等自主自尊の主義を以て世界に鳴つて居るアメリカ合衆國の人民でも、ウォシントンといへば特別に有難い人物になつて居りまして、他の歴代の大統領よりも數等以上に尊崇を致して居る、従つてウォシントンの子孫といへば一種特別階級の人間でもあるかの如くに思つて居ります。

かやうな次第であるのですからして、かういふ一つの國民なり、あるひは一つの地方の團體なり、あるひは一部落の人數なりなどを率ゐまして、一同をして仕事をさせた所の人は、よく記憶せられて居るのみならず、又その子孫の人々も、御蔭を以てよく記憶されるのでありまして、記憶するに就きましては何がしの子とか、なにがしの孫とか、たゞしは甥であるとか、従兄弟であるとかいふ關係を自然覺えて居りますること、このために畢竟系譜といふものはあらはれて參るのであります。

そこで自然系譜の取扱ひまする所の材料は、一個人に限ることでありまして、團體や國民ではご

ざいませぬ。しかしその一個人を單獨に考へるのではありませんで、その人の肉體の由つて來る所又その人の肉體がいかなる他の肉體を生殖するのであるかの邊を研究しますので、煎じ詰めて見れば、個人の生殖力が發展する有様を研究するわけになります。もつとも一個人と申しても、醫學に於て人間の肉體を標本として並べて置くのと違ひまして、飯も食へば考へもする、居眠りもすれば働らきもする、腦もあれば血もあります所の、生きて居る一個人を研究するのでありまして、自然その人がどういふ思想の人である、どういふ舉動の人である、どういふ働きぶりの人であるなどいふことが研究に伴ふて參るので、これがとりも直さず系譜學が史學に貢獻する所以なのであります。唯一個人が何年何月何日何時に、どこどこに於てなにがしを兩親として生れ、何年何月何日何時どこどこに於て何々の原因によつてなくなつたといふことだけを申したのでは學術に貢獻する所は甚だ少ないのである。一の家におきまして、代々その家の人が家風を相續し家の思想を執り行なひまして、社會に立つて居ることを證明致しまするときに、系譜學が尠からぬ益を興へることな

んであります。以上申すところは系譜學の大意でありますが、これは中々面倒な學問でございまして、ヨーロッパにおきましても丁寧に研究してくれまする人は、まことに尠なうございまして、正確なる系譜學とも申すべきものは、やうやくこの近年以來にあらはれましたことでありまして、申すまでもな

く、普通の系圖やら系譜やらでありますならば、數千年の以前よりございませうが、學術的に系圖と系譜とを研究致しまして、之を一の科學として立てやうといふ考へを起して、この方針で研究し始めたのが、この近年以來であると申すのであります。随ひまして今日の所では、系譜學は一の科學であるとは、先づ斷言致しにくいので、これも段々先へ進みましたならば、この域に達するでござりませう、まづ今のところでは、研究中と心得ておいて宜しうございませう。

こゝに系譜學を一の科學として研究しやうとするに就きまして、非常なる困難のありますのは一の家におきまして、その家の人々の繁殖致しましたる所の手續が、いづれの場合に於ても必らず明瞭であるといふ工合に參らるのであります。手近い話が、子が無くて弟が准養子となつて家督を嗣ぎまする、系圖に委しく書いて置かぬと、後世父子か兄弟かわからぬことになる、これは多くの例があります、又子が相續したか、孫が相續したのか、わからんことになる、甚しきに至れば餘所よそから養子にきたのか、さうでないかの邊もわからんことになる。近世になると法律が備はつて居つて、この邊のことの疑ひは萬々無い筈なんです、それでも公けの届は必らずしも當てあになりませぬ、氏名の詐稱、年齢の詐稱、等親の詐稱などは何れの國へゆきましても往々あり勝ちのことであるのです。それ故に非常に精密に系譜學の研究を遂げやうといふことは、随分困難な仕事であるのです。とにかく系譜學が史學に貢献すること頗る大きいといふことは、何人も早くより認めて居る

ことでありまして、今更我等がこゝにその利益をならべる必要はありませんが、系圖は先づ三通りあります、家督繼承の順序分家建設の次第を明にする爲に作ります圖、生殖力發展の有様稟性遺傳の程度を露はす爲に作ります圖、等親の關係を確にする爲に作ります圖の三通りであるのです。東洋におきましてはこの第三の系圖はあまり發達して居りませんが、西洋の系圖は元と等親の關係を確にして財産争の時分に判定を下す鐵案と致します爲に作り始めたものであります。

系譜學が史學に補助を與へてくれますことは、鳥渡考へて見てもわかります通り、先づ一の國家の代表者の、世々受け繼いで代表して來ましたる手續を教へてくれます。國家の代表者は即ち帝王なり君侯なりでありまして、豪族の場合でありますならば當主でありますが、何れもその治めて居る所の國又は家を代表致しまするもので、主として外部へ對して著しくあらはれるものである、言葉を換へて見れば、表面の普通に申す言葉で申すならば、外交上とか政治上とかの關係におきまして著しくあらはれて參ります。

それで相續の順序が至極調つて居りまして、その間に不規則のことが多くございませぬのは、とりも直さずその治めて居る國が常に泰平無事によく治つて居るか、さもなくば國家の代表者たる所の帝王乃至君侯の手に實權が無くて、唯名前ばかりに据つて居られるか、どちらか一つなのであります。短かい年代の間でありますれば、代表者の繼承が至極順序正しく參つて居りまするのは國

家のよく治つて居る證據であると見ることが出来ますが、もしこれが數百年うちつゞきまして尙至極順序よく受け繼いでであると云ふと、國君に實權があつたかどうか疑問が起つて參るので、多くの場合におきましては實權は臣下の手にあつて、君侯は虚器を擁して居つたのであるといふことになりまゝする。又かやうな場合でありましても數百年うちつゞいて臣下のものが實權を握つて居ると申す定、實權を握つて居るものゝ家は、必らず治亂を免れませんかして、屢々變動のある筈なんであります。で、實權所有者の家に變動がある度毎にその上に蒞んで居られる君侯の家の方にも幾分か影響を及ぼす筈であつて、このことは歴史に徴して明らかであります。

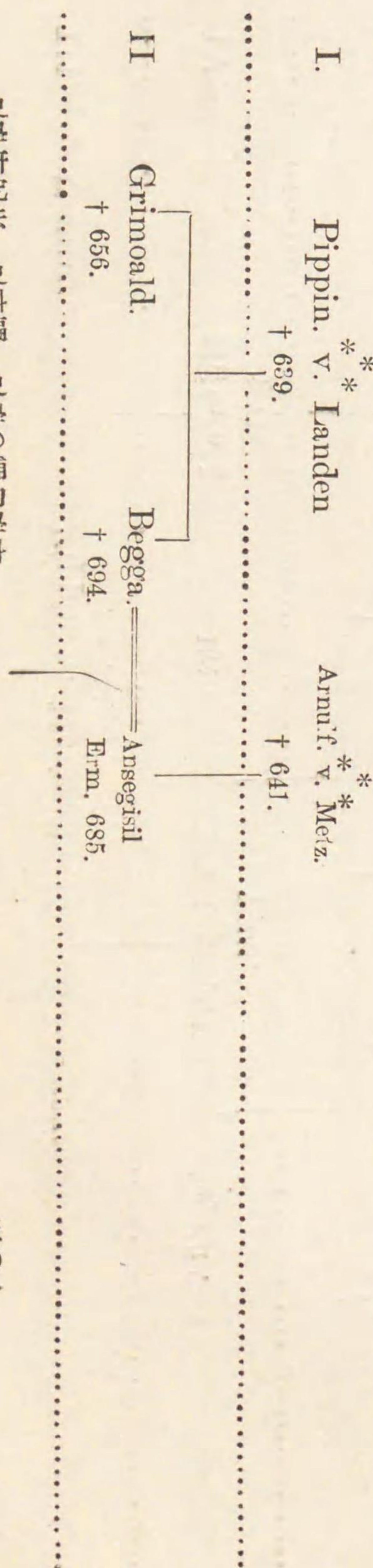
右の次第でありますから、帝王國君の繼承の順序と申すものは、とりも直さず國家の治亂君家の盛衰に對します一つの反應劑と相成ります。この意味におきまして、系譜は中々面白いよりどころとなることがあるのであります。又いくつも國家が並び立つて居る場合でありますと、これらの諸國家の代表者の間に互に姻親の關係を生じますので、婦人の血統の上よりして、餘程面白い國家の重事を惹起して參ります。ヨーロッパあたりの諸國には、この例が澤山ございまして、所謂萬國史の教科書を読んで見ましても直ぐわかることでもあります。かやうな次第でありますで、已にドイツのヒッブネルは二百年前に豫めこのことに氣が附きまして、頗る精密な系圖を纂修致しました。ヒッブネルの諸家系圖は、今日に至りましても系圖と致しましては少しも其のねうち

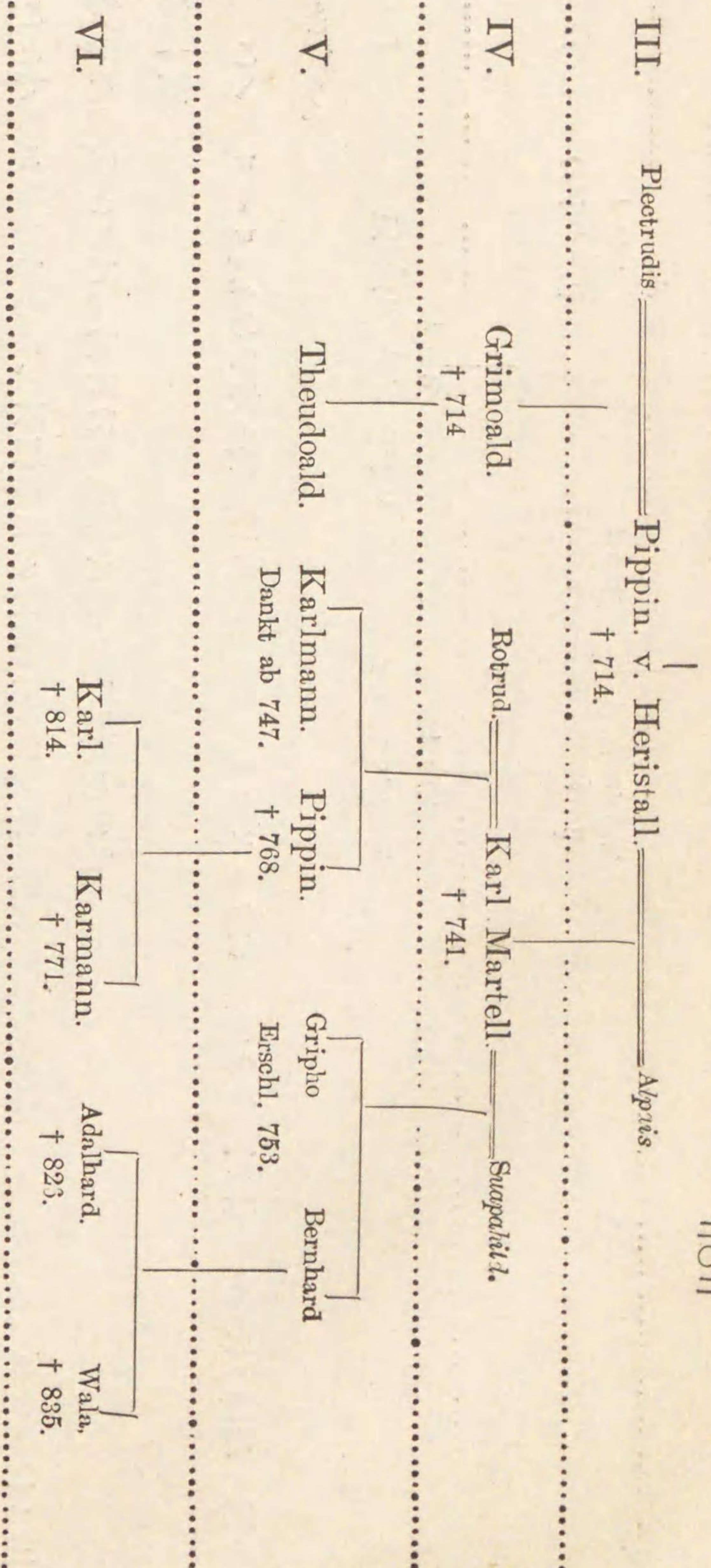
を墮しませぬ。又ゲッチンゲン大學の所謂歴史派法律家の大立物でありましたピッテルもヒッブネルの系圖によりまして、大に悟つた所がありましたと見えて君位繼承の順序、姻戚の關係など申すことに重きを置きまして政治史の講義を致したことであります。

上に申す所は必らずしもヨーロッパの諸國のみならず、本邦、朝鮮、シナにおきましても勿論史家が眼を放しますることの出来ません重大の關係でありまして、飽くまで精密に研究するねうちのすることであるのですのに、不思議にも從來は人があまり眼を附けんであります。されば二つ三つ實例を擧げまして、重大たる所以を明らかに致しませう。

第一例。

こゝにローロッパの中世史に於て有名なるカロリング朝の先祖の系圖を擧げまして説明を試みませう。





この系圖はカロロ大帝の先祖、ランデンの住人ビビンより大帝までの分でありまして、一見して、餘程不規則な家督繼承であります。メロウインガ朝におきましてマヨル・ドムスが始めて大にのびまして、本邦の官名に相當するものを求めますならば、先づ將軍職と内覽とを兼ねたものとなりましたが、この家におきまして始めてこの重職に「あび」ましたので、その先祖はビビンでありましたが、何様當時はこの職を世襲するといふわけでもなく又ビビンの代にはこの職はま

だかたまつて居りませんでしたから、直ぐに困難が起つて來ましたので、ビビンが死にますると、二代目のグリモアルドはよせばよいに廢立を行ひまして、自分の子を位に即けて、天下を篡奪しやうと試みましたので、勿論誰も仰いで命に従ひませず、父子共に誅せられまして、折角ビビンの起しかけた家も、その爲めに潰れてしまひさうな有様でありましたが、幸にしてリモアルドの妹のベガがメツツ家へ片附いて居りましたので、このメツツ家に於て生れました血續きの人が、代つてビビンの業を引き受けることとなりました、これがヘリスタルの住人ビビンであります。

このヘリスタルの住人ビビンは豪傑で、豪族等も歸服致して居つたことでありましたから、家を維持したのみならず、かの重職を世襲の實況と致しまして、生前に嫡孫を東部の將軍職に据えまして、自らフランク公と號し禪讓を受けかねまじき勢でありました。さう致しますると、今度はこの人が亡くなります、家督人は八ヶ月前に死にまして、子供である嫡孫が直ちに祖父を承けるといふ有様で又ぞろ家の大厄難が起つて參つたのであります。さうすると僥倖にも妾腹の子カロロといふのがありまして、これが父の稟性を受け繼いで居りましてゐらかつたので、諸將がこれに歸服致しまして、又家督を繼ぐことになつたのであります。このカロロは彼のサラケン人の入寇を撃退しました有名の武將で、そのためにマルテル(槌の義)の稱號を得たのであります。

如きに至りますると、その血の分析をして見ますれば、北條氏以外の血は、僅かに六分しかありませぬ、即ち九割以上は北條氏の血であるのであります。

かやうな血縁を持つてありまする足利家でありまするからして、北條家に代つて天下の實權を握らうといふ野心を夙く家時の代より出したと申すことは一向不思議でないので、傳へに據りますれば、家時は八幡大菩薩に祈りまして、三代の中に天下を取らしめ給へといふ願で、腹を切つたと申すことなので、勿論この話は當てにはならんが、とにかく夙に天下の實權を握つて然るべき地位にあつた家であるといふことは明瞭であります。北條家が盛んな間は足利氏は、源家の諸大名を結び附ける連絡點に過ぎなだでありませうが、北條家が衰へますれば、自然代つて政權を握るべき家なんでありまする。これは足利氏のことですが、新田氏に至ると左様でないのであります。

新田の氏祖は義家の孫でありまして、足利家の先祖の兄である。然るところが新田の氏祖義重は子供多おほでございまして、その子孫がいろ／＼の家に分かれて居りまするが、しかし長樂寺新田系圖に據りますれば家督人となりましたのは嫡長子ではございませぬ。嫡長子太郎義俊は却つて里見となつて居りまする、又山名の如きは庶長子太郎三郎義範の後でありまする、却つて本家を相續致しましたのは三郎經義でありましたので、徳川氏の氏祖義季も次郎であつたのは鳥渡意外

に思はれます。されば義貞の先祖は、順はづれに本家を相續致しましたもので、先づこれがさいさきよくございませぬ、それから後には格別の順はづれはございませぬが、不幸にも當時の權門勢家と姻戚の關係を成しませんので、いつまでも社會に沈淪致して居つたのでありまする。

これで新田足利兩家の一方は雄飛し、一方は沈淪しました手續きがよくわかるのであります。尙このことについては史學雜誌第四編第四十二號に出て居りまする平出鏗二郎氏の『鎌倉時代に於ける新田氏と足利氏』と題する論文を御覽になることを願ひます。

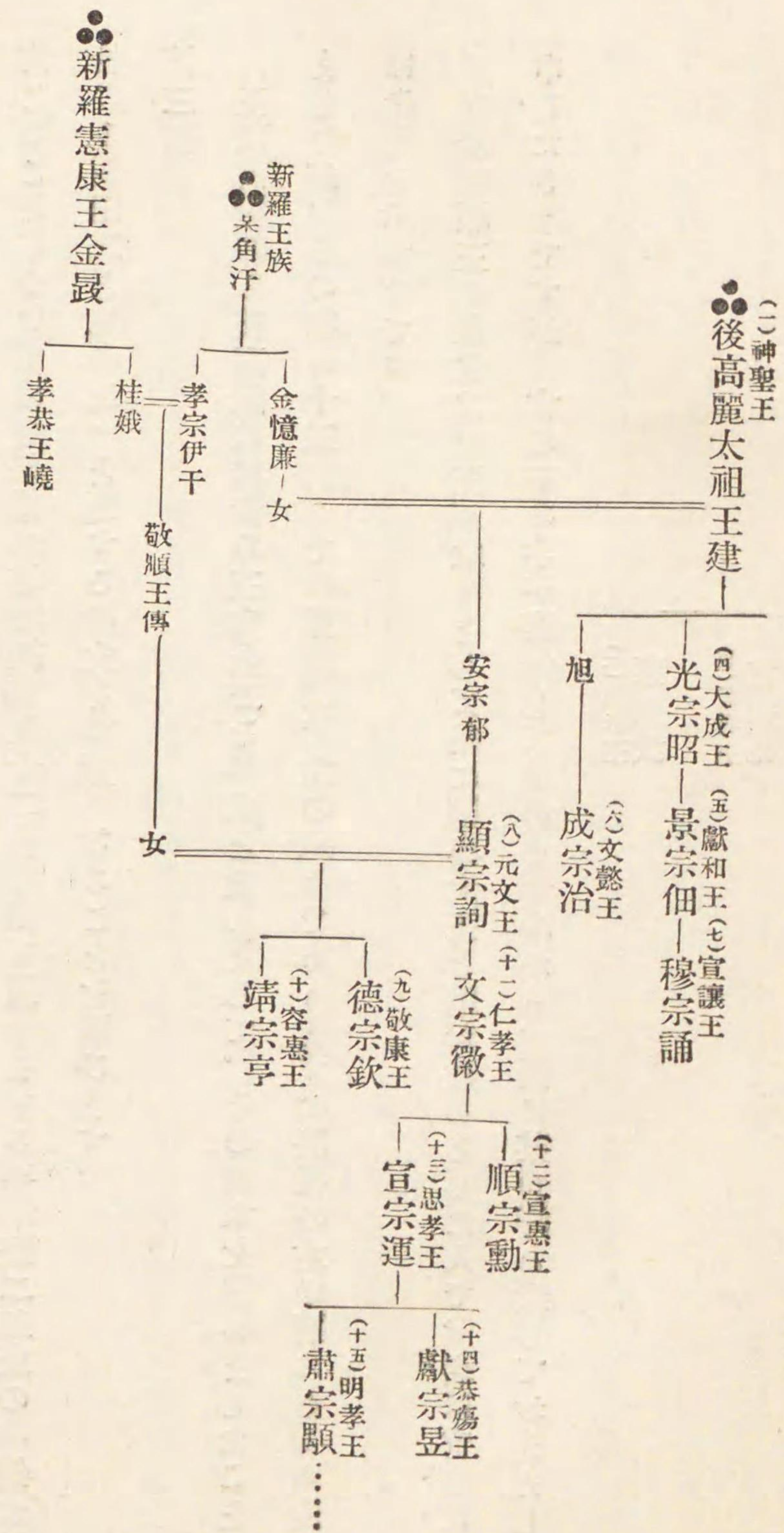
第三例。

王氏高麗即ち後高麗は新羅の王室金氏を外戚と致しまして、その國家を固めましたことでありましたが、その初め十五代までの系圖は、左の通りであります。歴代の右の肩にある圈内の數字は代數を示すのです。

新羅敬順王の祖父は、王が立ちまして後に懿興大王と追封致しました人で、名は官なに角汗なと申したさうですが、官の下の字が磨滅して讀めませんから、假に某角汗と致しておきました。

(一) 義恭王
— 惠宗 武

(二) 文明王
— 定宗 堯

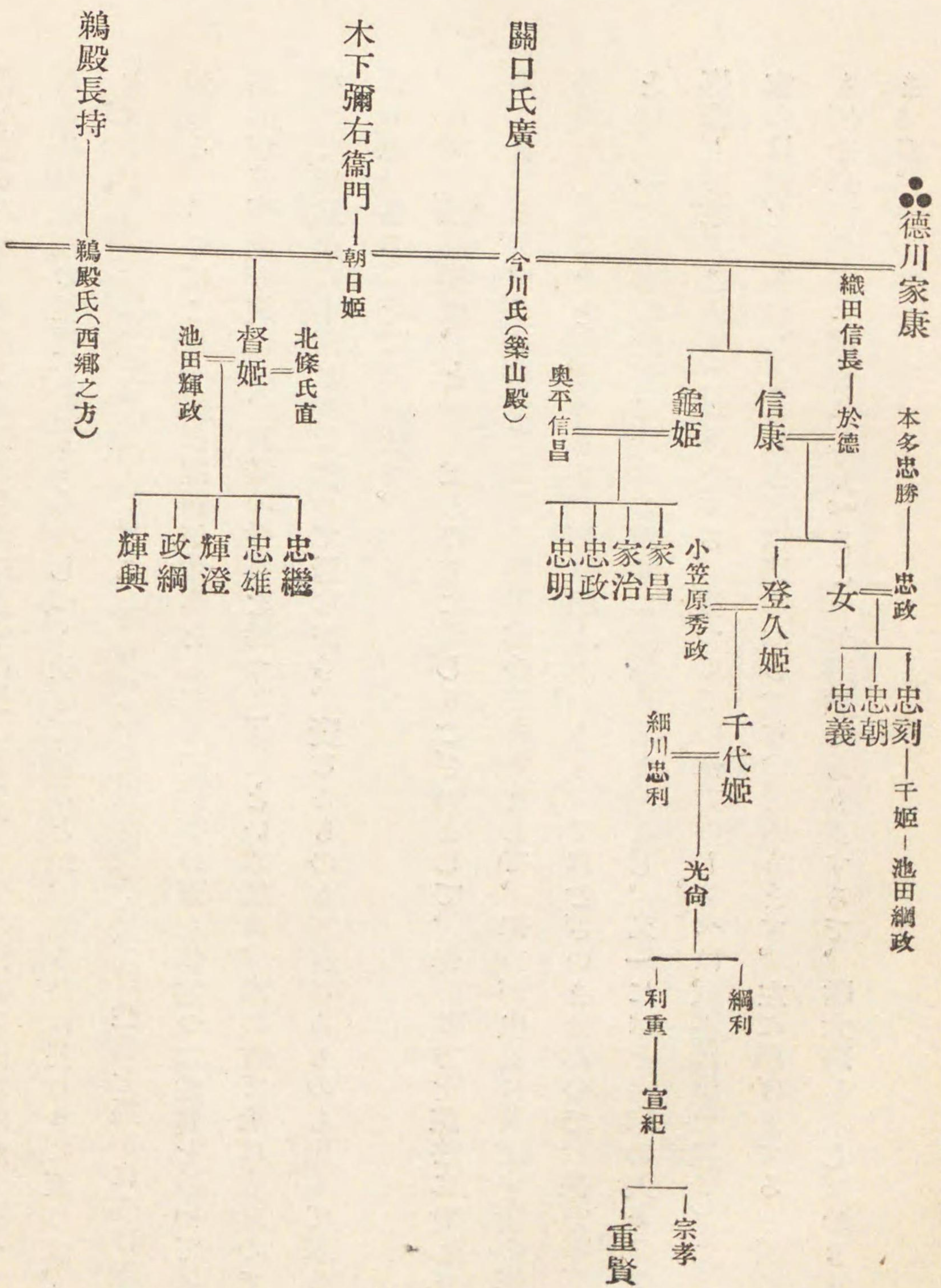
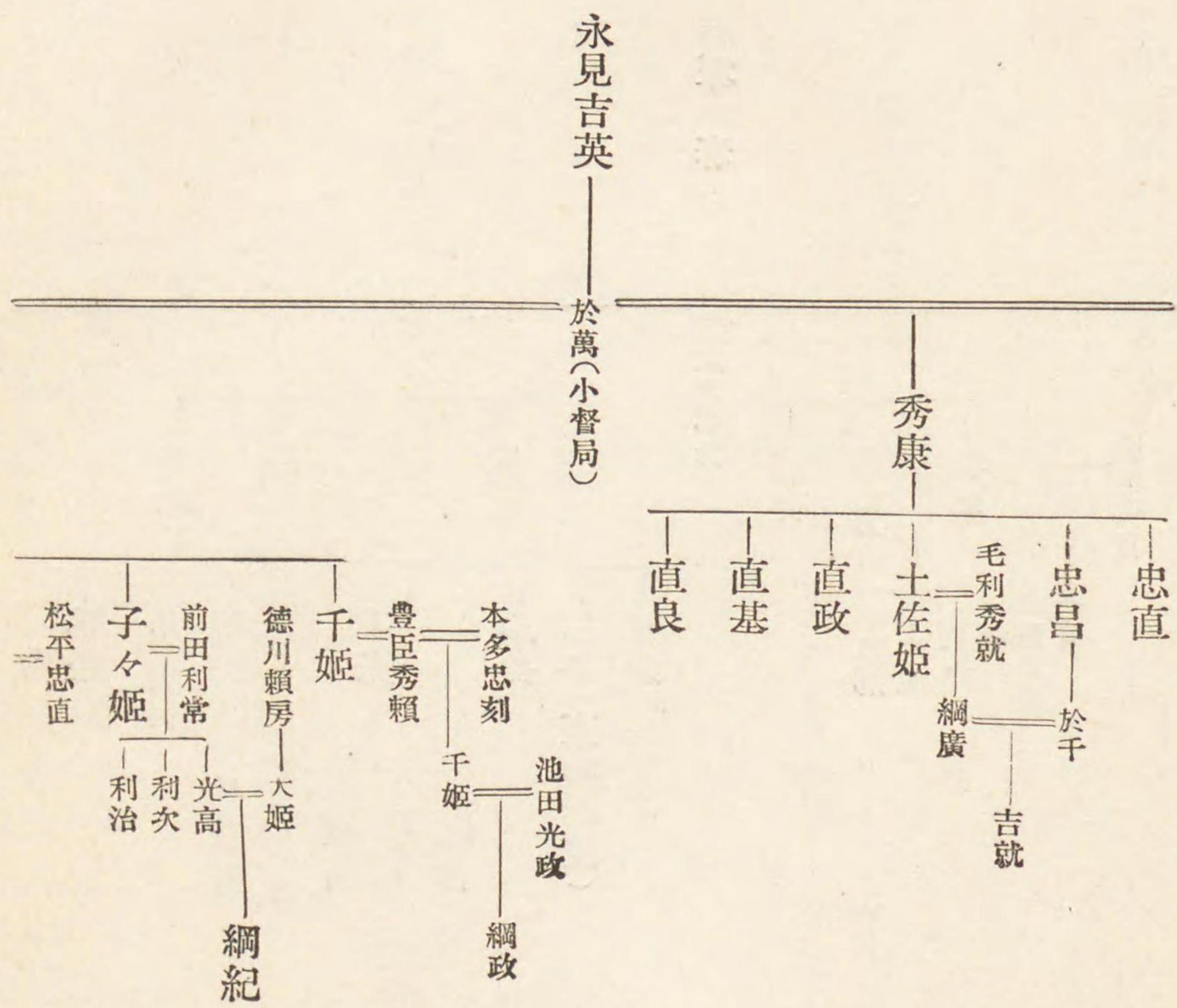


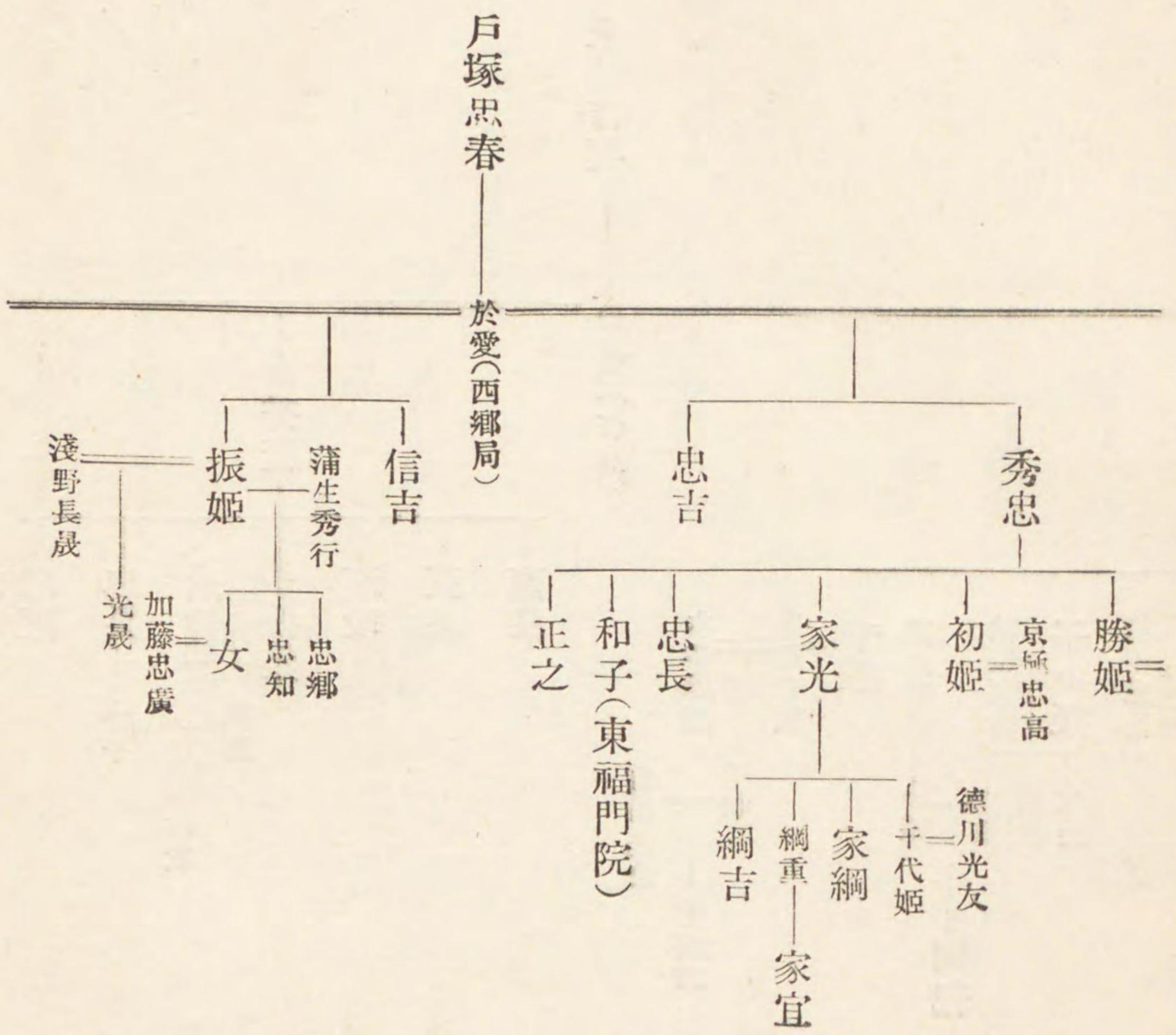
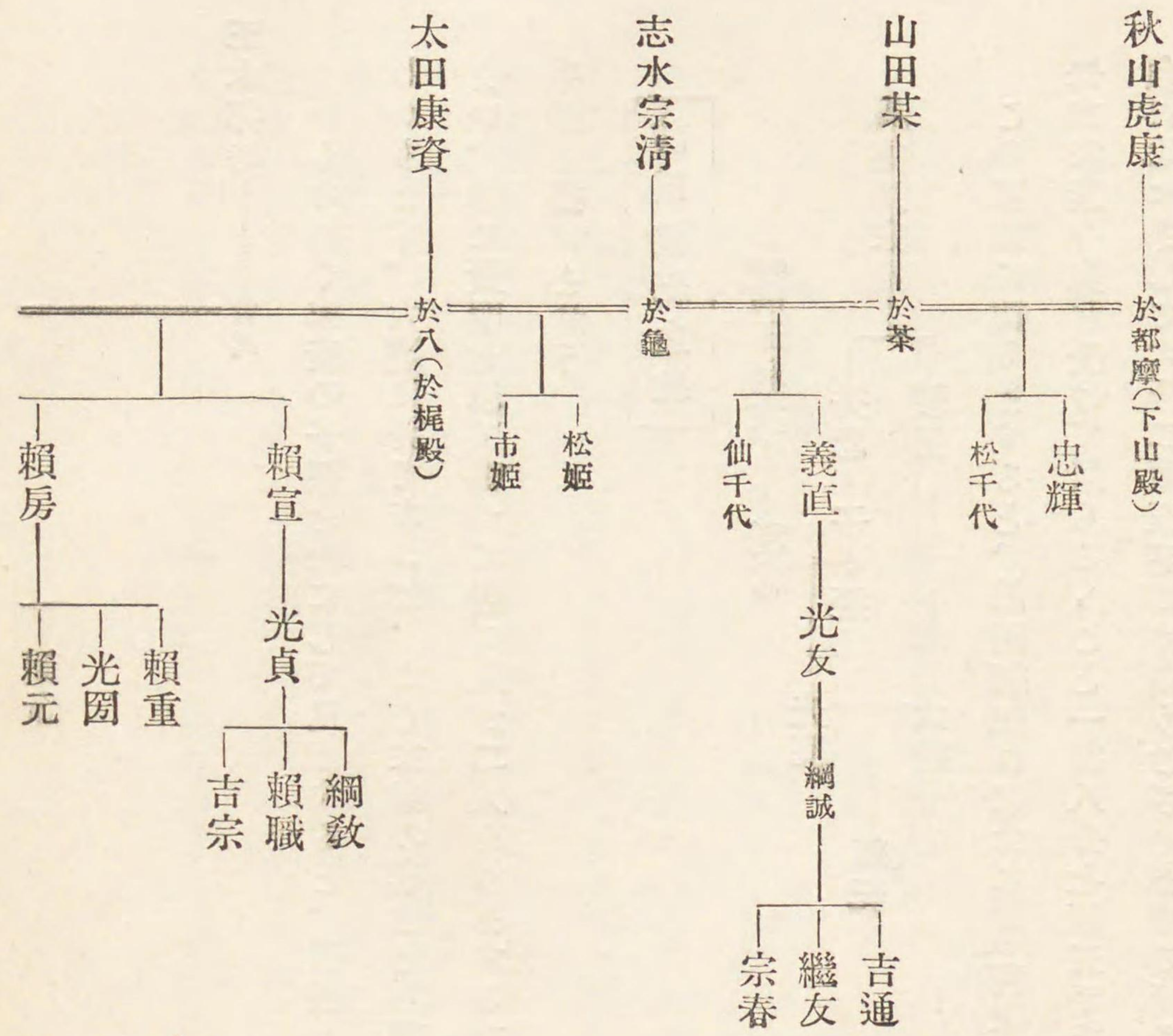
第四例。

次に一個人の生殖力をあらはして、同時に性質を遺傳しする有様をも示します系圖の一例を御眼にかけませう。この性質を遺傳すると申すことは、決して親の性質を子供が悉く受け継ぐと申すことではございませんので、あるひは父の性質を多分に受けまして、母の性質を少し受

けて居るとか、あるひは母の性質を多分に受けまして、父の性質を僅かばかり加へて居るとか、あるひは兩親の性質を兩方から少しづつ、受けて居るとか、あるひは甚しきに至れば、兩親の性質をまるっきり受けて居ないのがある、即ち祖父とか曾祖父とかの性質を遙かに受け継いで居るのである。さればこそ一組の兩親が生みましたる子供等が面々皆違つた性質を持つて居ます。諸兄弟が皆毫釐も違はず、同様の性質を持つて居たといふ例は、未だ曾て承はらんであります。従つて諸兄弟の中同じ親を持つて居ながら、賢なるものも不肖なるものも出来て來るので、誰も自ら思ひ當ることではありません。

本邦の系圖類は、とかく父方の方に委しうございまして、母方の方を疎略に致しますることとあります。これは以ての外の心得違ひでありまして、母方が血統に及ぼす所の影響を一切度外視致したと相成ります。腹は固よりかりものではございせんので、母方の影響と申すことは、一には家の社會に於ける地位に關係致しまするし、又一にはその家の人々の性質にも大に影響して來ることとござります。従つてこの母方のしらは、餘程精密に致しませんといふと、家の真相をあらはしました系圖は出来ぬわけなのであります。左に挙げます一例におきまして、も何分母方の方を精密にしらべることが困難でありますので、唯大略を示しておきますに過ぎませぬ。



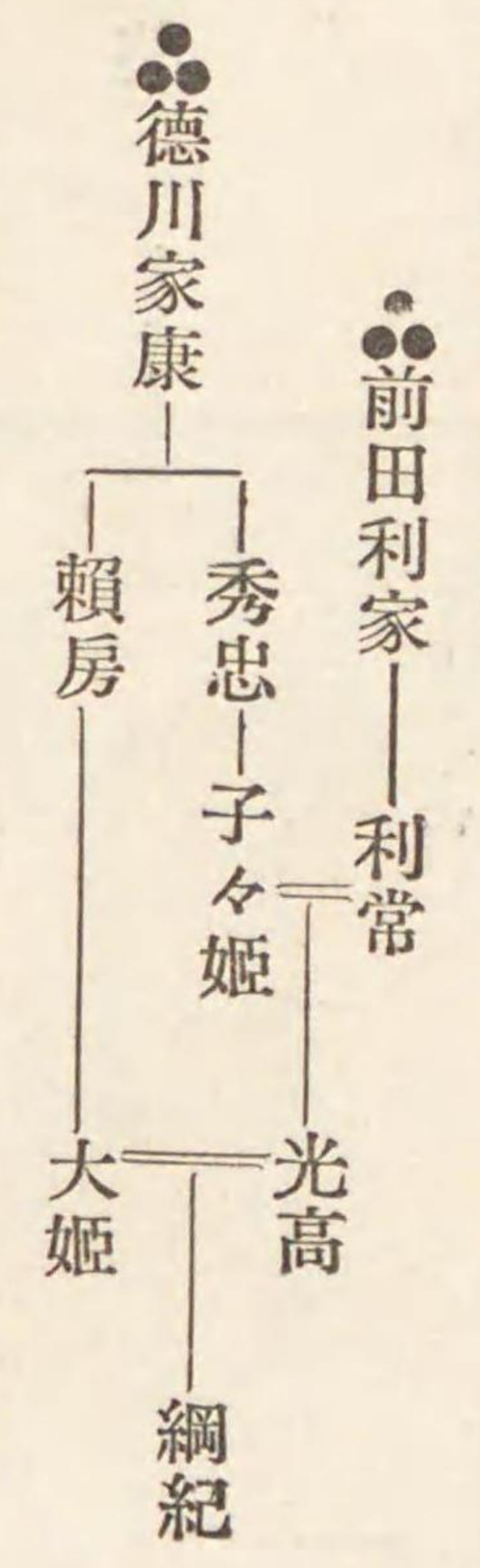


一 賴隆

正木邦時——於萬

かくの如く家康の子孫を表にして見ますと、子孫の多き中に、著しい愚物が甚だ少ないことがわかります。大體に於て申さば、よく家康の稟性を相續致して居るものと認めなければなりません。殊に賢明を以て鳴つて居る人が二人ありますので、こゝに附録と致しまして、この兩人の系圖を掲げませう。

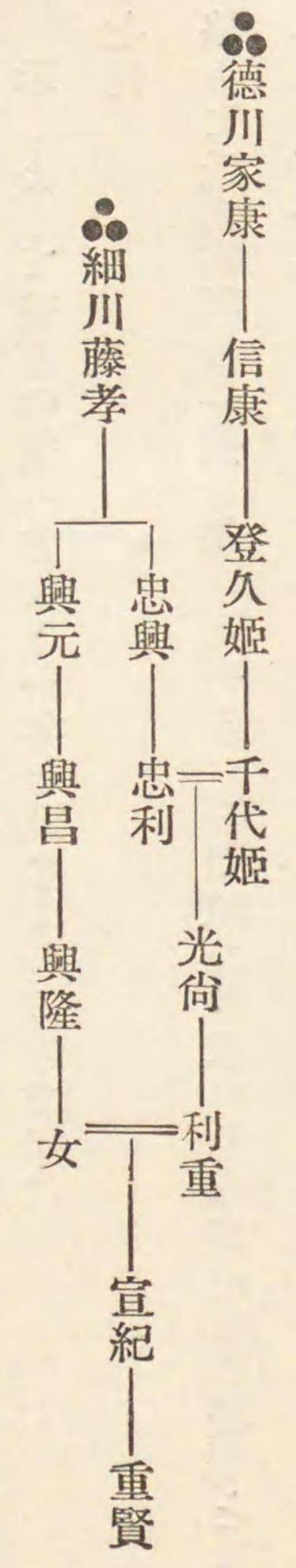
前田綱紀血統



この系圖に據りますと、前田綱紀は、父方即ち利家の血を受けて居られること一割二分五厘、母方家康の血を受けて居らるゝこと一割八分七厘五毛でありまして、即ち家康の血の方が利家の血に比べまして六分二厘五毛だけ多うございます。されば綱紀は利家の方よりも、むしろ家康

の稟性の方を多くうけ繼いで居られるものと見ねはなりません。次には細川重賢であります。

細川重賢血統



この系圖によりますと、重賢の脈に流れて居る家康の血の分量は七厘八毛でありまして、藤孝の方の血は三分一厘二毛であります。この兩先祖の血の分量が非常に少いのは、重賢が兩先祖を距りますること、大分世數を経て居りまする爲めで、一世毎に血の分量が半減致しまするからして、かくの如くなるのであります。しかしながら兩先祖の血の割合を觀まするに、家康の血と藤孝の血とは一と四との比例になつて居りますして、重賢の脈にあります藤孝の血は、家康より受けましたる者より四倍だけ多いのであります。即ち重賢は家康の稟性を受け繼いで居られると申すより、むしろ藤孝の稟性を相續して居られることであると見なければなりません。第五例。

更にヨーロッパ近世史より一適例を挙げませう、是れは合衆國のウッツ醫學博士が著述で、

Mental and Moral Heredity in Royalty と題する書に出てる實例でありまして、顯著なる明君、賢后、名將方の遺傳系圖であります、人名の頭に二様の數字がありますが、皆其能力評點で、孰れも滿點を十點とし、通常人を五點と致して前數は事 點即ち才、後數は德行點即ち徳の評價が付けてあります。

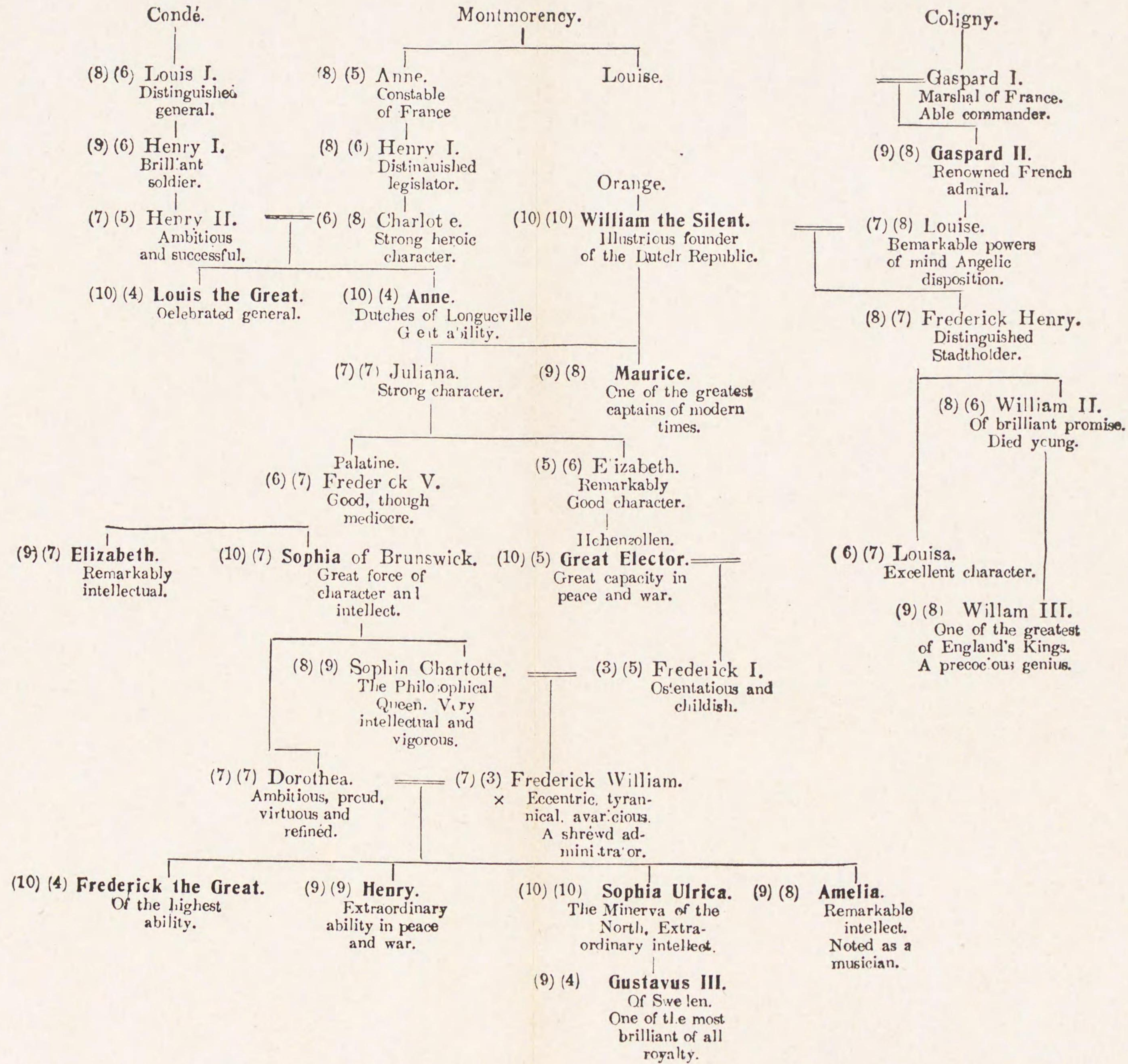
第六例。

次に等親の關係と相續法とを示して居りまする系圖の一例を掲げませう、即ちローマの帝室ケーザルの家の系圖であります。人名の下にありまする略語の中 obit. (obitus) は「歿」「逝」、aetas は「壽」「享年」、vir は夫、ux. (uxor) は妻の義であります。又 IMP. とありますのはインペラートルの略で、皇帝の義であります。數字に負數の符號しるしがついて居るのは星學の書方で、紀元前の年代を示しまして普通の數へ方より一年を減じてあるのです。

第七例。

終りに氏名詐稱の一例を擧げませう。近頃源氏本家の系圖が史家の疑問となつて居りまする、若し果して一部の史家が申される如く、源家の系圖に間違ひがあるものと見まするものならば、源家の本家は、取りも直さず氏名を詐稱致したことゝ相成ります。源氏本家の系圖としまして、普通に信用せられて居りまするものは、左の如きものであります。

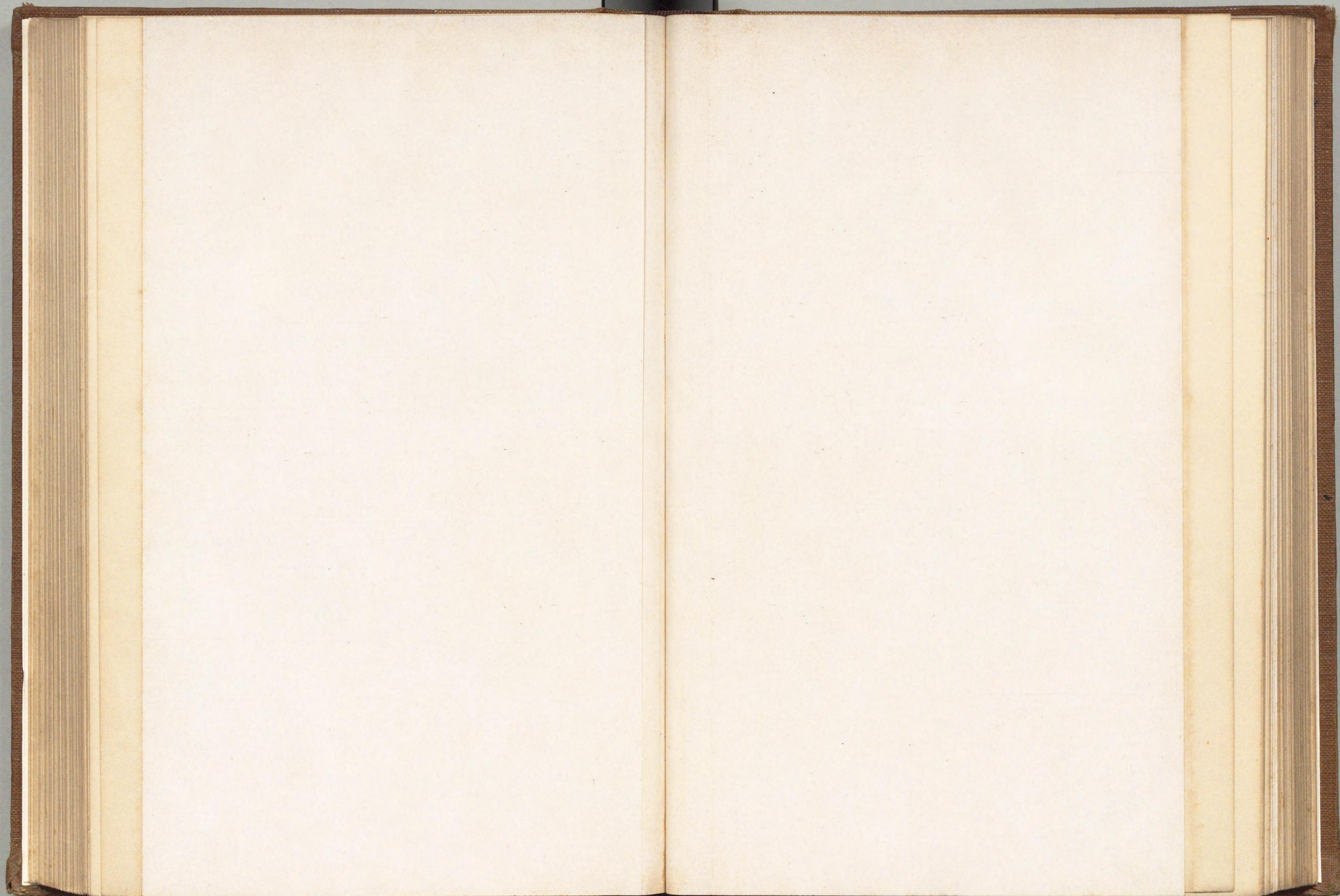
A GREAT GROUP OF GENIUSES.

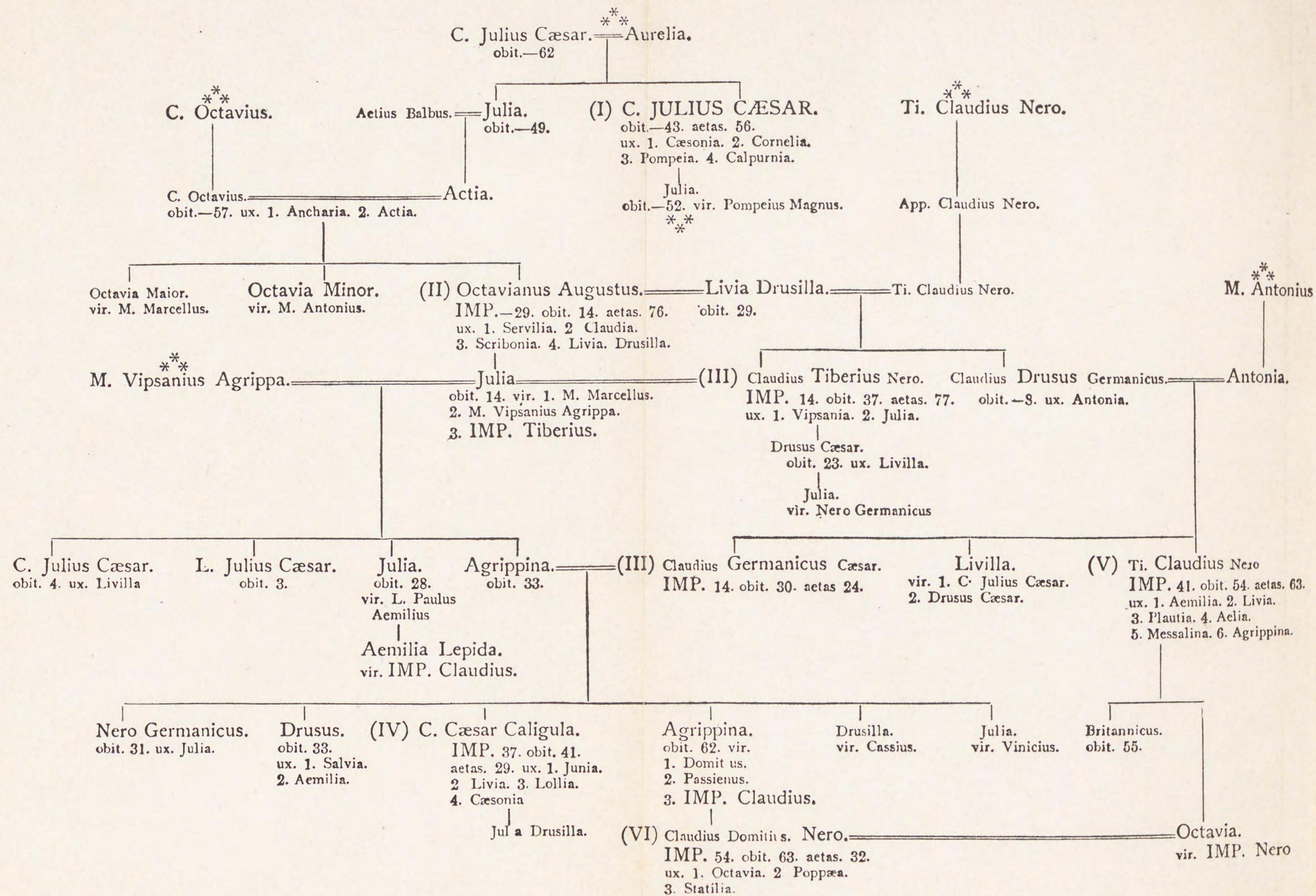


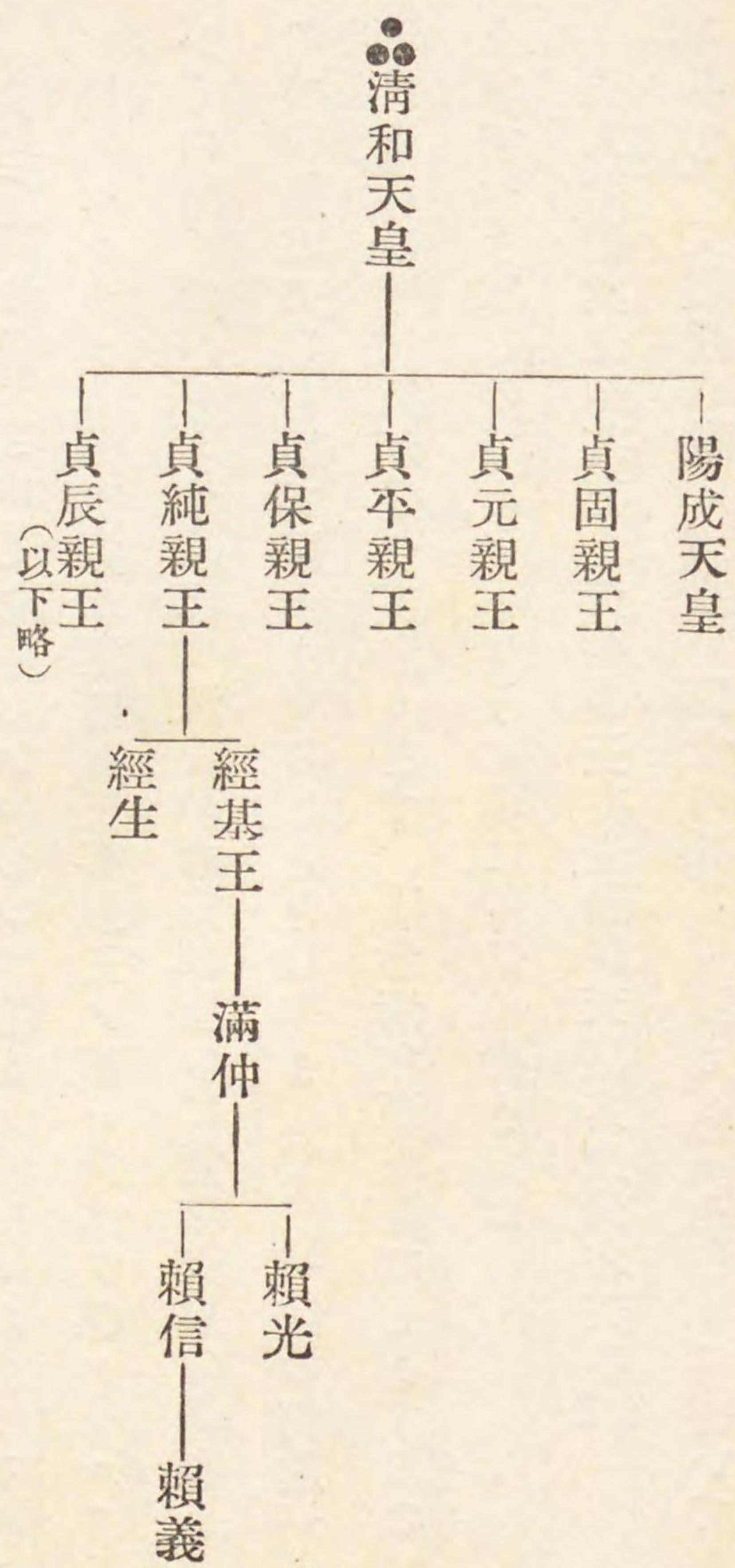
「壽」享年「Vire」は夫、ux. (uxor) は妻の義であります。又 IMP. とありますのはインペレーター略で、皇帝の義であります。数字に負数の符號がついて居るのは星學の書方で、紀元前の年代を示しまして普通の數へ方より一年を減じてあるのです。

第七例。

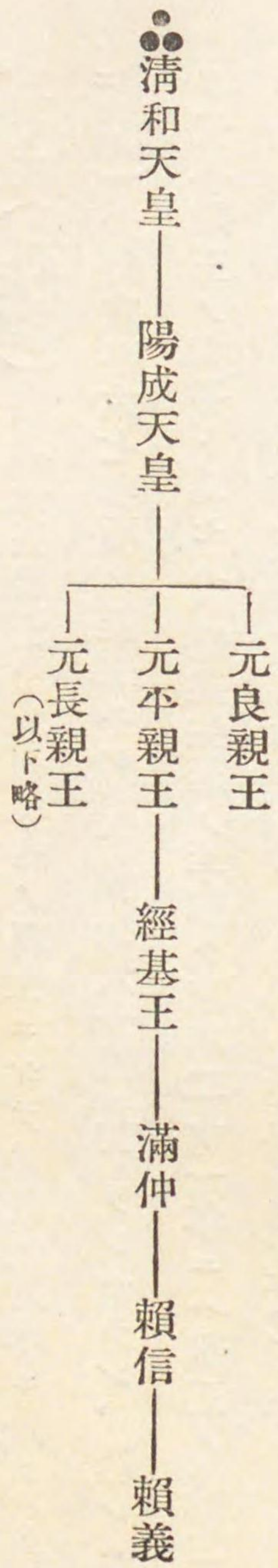
終りに氏名詐稱の一例を挙げませう。近頃源氏本家の系圖が史家の疑問となつて居ります。若し果して一部の史家が申される如く、源家の系圖に間違ひがあるものと見ますものならば、源家の本家は、取りも直さず氏名を詐稱致したと、相成ります。源氏本家の系圖としまして、普通に信用せられて居りますのは、左の如きものであります。







かやうな系圖でありますが、近頃議論のありますのは、經基王は貞純親王の御子でないといふことなのであります、却つて陽成天皇の御血統であると申すのです。即ち左の如き系圖と相成ることなのです。



これにつきまして、星野博士は左の如く申して居られます。

元平親王ノ享年、古書所見ナケレモ、御兄元良親王ハ寛平二年ノ誕生ニシテ、天慶六年ニ薨シ、年五十四(日本紀略)御弟元長親王ハ延喜元年ノ誕生ニシテ、貞元九年ニ薨シ、年七十六ナレハ(大日本史)大略寛平六七年頃ノ誕生ニシテ、享年六十四ナリシナラン、然レハ告文ニ從ヒ、經基(引源)ヲ元平親王ノ御子ト爲セハ、經基生誕ノ年即チ延喜二十一年ニハ親王ノ御年二十七八歳ニシテ、父子ノ年齢相協フ、(若シ分脈一本經基四十五ノ文ニ據レハ其生誕延喜十七年)若シ貞純親王ノ御子ト爲スハ、一世ヲ繰上クルヲ以テ、中間自ラ空缺ノ年ヲ生シ、父子生相及ハサルノ乖謬ヲ免レス、尊卑分脈類從本紹運錄等ニ元平親王ノ下ニ源兼名(コレ紹運錄ニ據ル)ヲ係ケ、貞純親王ノ下ニ經基(經生ハ分脈ニ據ル)ヲ係クルモノハ、蓋源氏系圖ニ彼此ヲ交換シテ之ヲ記スルヲ、其マ、ニ纂錄セシナリ、飛鳥井本紹運錄元平親王ノ下ニ兼名ヲ係ケサルヲ是ト爲スヘシ

かくの如くでありますれば、源氏の本家は直ちに清和天皇の御孫より出て居るのではありませんので、陽成天皇を経て居りますることとなりまして、一世の相違がありますのみならず、同じ源氏とは申せ、家が違つて参ります、通常清和源氏と申しますのは即ち詐稱なので、陽成源氏と申すべき家なのでありませう。現に頼信の代までは

先人新發其先經基其先元平親王其先陽成天皇其先清和天皇告

と申し、又頼信は陽成天皇の四世の孫なりなど、明々白々に書いてあります、先づ陽成源氏に

相違ないやうであります、何故に詐稱致して清和源氏としましたのか、どうも合點が参りませんが、私の想像致す所では、義家あたりの時代に清和源氏とした方が都合が宜いとかいふやうに考へまして、私に稱へ始めたことでないかと疑ふのであります。固より信ずるには足らんこととすけれども、義家は遺言致しまして、

我七代の孫に吾生かはりて天下を取べし雜太平記

と申されたといふことが、足利家に傳はつて居つたさうであります。このことは今川貞世の説であります、無下に馬鹿にするわけには参りませんから、足利家にはさやうな傳説があつたといふことだけは信せられます。即ち足利家の野心を示して居るものであるとすけれども、やはり義家時代にも、多少の野心があつたと思ふても無理ではあるまいと信せられます。

源氏本家の氏名詐稱は、かやうなわけであつたですが、その他有名な家で氏名詐稱は珍らしからぬことで、十分穿鑿をすれば、歴々證據が擧つて來るでせう。先に擧げましたカロリンガ朝祖先の系圖なども、昔は随分委しく書き立てましたものでありまして、その系統をメロビンガ朝より引いて居りましたことでしたが、これは疑ひもなく氏名の詐稱で、この節の史家は誰も信ずるものがありませんから上には省いて置いたのであります。又奥州の安倍氏羽州の清原氏なども、私は氏名の詐稱であると思ふて居るのです。この兩家は、種々の事情より考へて見ますに、ど

うもアイヌ酋長の家でありまして、安倍とか清原とかいふ姓を家の都合によりまして自儘に稱へたことであらうと疑ふて居るのであります。己れの部落内におきまして勢力を振ふだけならば、アイヌ酋長に朝廷より賜はりました姓氏を名乗りまして差閥ございませぬが、奥六郡の地を據有して天下の大將軍であるかの如く威張つて居らうといふに、これでは都合が悪いので、奥羽地方に聞えて居ります安倍とか清原とかいふ姓を詐稱致したと見るのは史學の推論としましては牽強附會の説ではないのであります。

第七 古泉學

古泉は東洋におきましては史料と致しまして非常の效力を顯しませんから、昔より史家があまり参考に致しません例であります。西洋の方では左様でございますので、中々侮るべからざる應援を史學に與へてくれることがあるのです。それはいかなる場合であるかと申すと、先づ日記やら古文書やらが澤山ありますならば、他にいろいろの補助學科を連れてくる必要はございせんのであります。かやうに申分まうぶんの無い史料の備はつて居ります場合は多くないのであります。とかく史料はがら欠け勝がらのものなることを史家は皆覺悟して居なければならぬのです。そこでやむことを得ず、いろいろの補助學科に應援を頼むのですが、古泉學もその例で、日記もなし古文書もなし、何

分にも困り切つた場合に、史學より相談に參る學科となつて居るのです。

ヨーロッパの古泉はギリシア式のを最も完全と致します。ギリシア式の古泉には、必らず貨幣を出しました所の君の肖像、國の徽章、王の尊號が備はつて居りまして、その上に尙好都合の場合には、現品を鑄ましたる年が擧つて居ります。又二人で位を共有して居りました時には、二人の肖像が鑄出してあります。數國を兼有して居りました時は、數國の徽章が彫つてあります。よしや又現に數國を據有致して居りませんが、據有する權利を持つて居ると主張して居る場合には、この權利を示します爲めに、その國々の徽章をも併せて鑄出しますることがございます。かやうな次第であります。古泉は取りも直さず年表の代りをつとめることがあり、又王室の系圖を示すことがあり、又國の領土の境域をあらはして居ることもあるのです。

たとへば中アジアのアフガニスタンより北インドへかけましたの地は、昔ギリシア血統の君主が占領して居つた國であります。この地方より當時の古泉を往々にして發見致します。これはかの所謂バクトリアの古泉北インドのギリシア王國の古泉であります。今申上げる式に協つて居りまして、その上に王が兼并致して居りました所の諸地方の徽章が打ち出してあります。又ペルシアのササン朝の古泉には、必らずこれを鑄ましたる年を打ち出す例でありまして、何がし王即位何年と打ち出してあります。それ故にササン朝歴代の古泉を悉く集めますれば、この朝の年表

となるのであります。しかしかやうな好適例は甚だ少いので、私の存じて居る所では、わづかにササン朝のゝみであります。

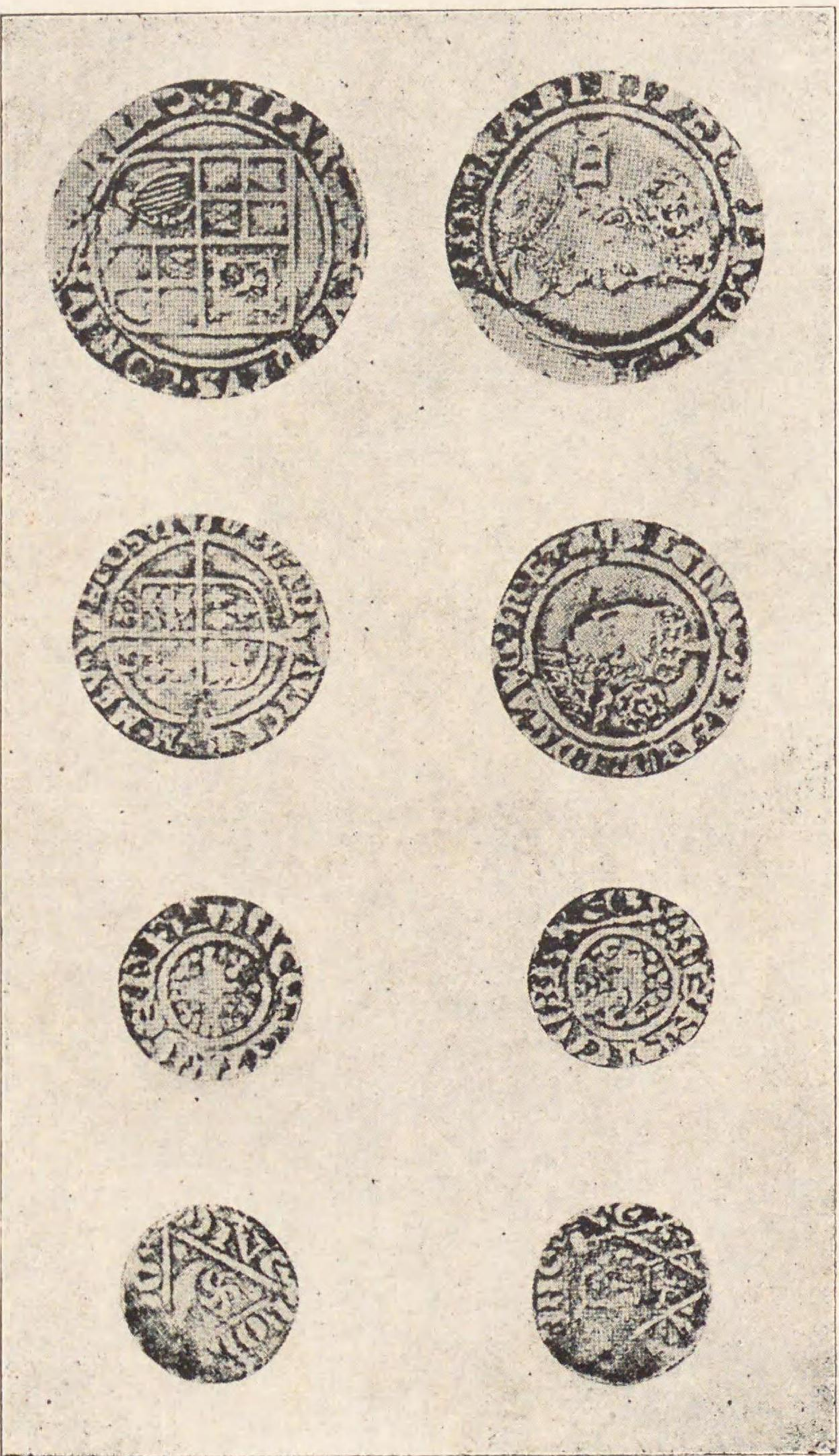
こゝに掲げますのはイギリスの古泉でありまして、かのマグナ・カルタを列侯より迫られて已むことを得ず血の涙で調印した有名のジョアン王の貨幣、どのヘンリか、はつきりわかりませんが、恐らくジョアンの次の代のヘンリ三世であるかと思はれるもの、尙その次のはエリザベタとジェームス一世であります。御覽の通りに、表面と裏面とにそれ〴〵有益なる所の史料を打ち出してあります。

第一はジョアン王の貨幣であります。表面は王が冠を戴きたる像で、^{まなこ}どんぐり眼に頸鬚を聳^{そび}やし、^{ほそがな}細顔のあまり風采のよくない人で、^{めぐり}めぐりにラテン文でジョアン王と打ち出してあります。裏面には三日月と星らしいものが打ち出してありまして、やはり周圍に銘があります。元はもう少し大きかったので縁^{ふち}を切り取りました痕がございます。とにかく甚だ薄い、極めて見すばらしい泉であります。質は銀で、現在の所では直徑一・七五センチメートル、重量一・三九グラムあります。

第二は上に申す通り、どのヘンリかわからんが、銘によりましてヘンリ王であります。表には髭鬚蓬々とし、毛は^{ちぢれ}ちぢれ上がり、^{おもなが}面長な顔ではあるのですが、大分肥満した姿に見えます。裏

泉古のスリギン

四 第 三 第 二 第 一 第



表

裏

面には十字架の間に四つ葉を打ち出してあります。表裏二面ともに縁にラテン文の銘が打ち出してございます。これも縁を一ミリメートルだけ削り取った形跡がございします。質は銀で、現在の所では直径一・八〇センチメートル、重量一・三九グラムあります。

第三はエリザベタの古泉であります。表面に王冠を戴けるエリザベタが打ち出してありまして、大分ふけて見えます。女皇の頭後にあります花は薔薇ばらでありまして、王室の徽章であります。縁かぢには例によりまして、ラテン文の銘があります。裏面は所謂回文であつて中央にイングランドの徽章たる豹と、フランスの徽章たる菖蒲あやめの花が打ち出してありまして、尙その他に數字で一五六九とあります。縁には例によりまして、ララン文の銘があります。女皇の服装はよく當時の盛装を示して居りますし、又殊に王室の徽章たる薔薇の花を示しましたのは、甚だ有益のことでありまして。裏面にあります年代の有益なることは申すに及ばず、尙フランスの徽章まで打ち出してあります。これは、女皇がフランスに君臨する権利あるを表明されたのであります。この古泉は質は銀で、直径は二・四五センチメートル、重量は二・七〇グラムありまして、少し削ったかと思はれますが、大體に於て完全でございします。

第四はジェームス一世でありまして、冠を戴き鎧を着られた王の肖像で、容貌の鮮やかに打ち出していること、實に巧妙の出来であります。この王は「ヨーロッパ第一の賢明なる愚物」といはれた

人で、その顔を見ますと、この評がいかにも當つて居らうと思はれます。王の頭後に、ローマ數字で十二と彫つてあります。まわりには例によりまして銘があります。裏面には大ブリテン國の徽章たる獅子、イングランドの徽章たる豹、アイルランドの徽章たる箆たてざ、フランスの徽章たるあやめの花が明瞭に見えます。他に尙ありますのが消えて居ります。めぐりには例によりまして銘があります。この品は厚さも厚し、少しも削つた痕が見えませんが、全く完全の標本であります。質は銀で直径は三・〇〇センチメートル、重量は五・三六グラムあります。この四つの標本の中で最も結構な品であるのです。

上に掲げました四つの標本で、ほど御了解になりませう通り、ギリシア式の古泉は、僅か一枚で種々の點に於て史料となるのであります。

第一に、古泉を鑄ました國の徽章がありますので、その徽章よりその國の來歴を推す便宜を得ることがあります。例へばあやめの花は本來ブルボン家の徽章でありますが、久しくフランスに君臨致して居りますので、實際フランスの國の徽章となつて居つたかと思はれます、即ち國の徽章は同時に君臨して居る所の王室を示して居ります。

第二に、必らず王の肖像がありますので、随つて王室を出しましたる種族を推すことが出來ます。

第三に、當時の服裝の一部分が必らず知れるわけでありまして、又住々に同時代の最も重せられた武器がわかることがあります。と申すのは肖像が往々何か武器を持つて居ることがあります、あるひは鎗であるとかあるひは太刀であるといふやうな武器であります。

第四には、王の尊號が必ず打ち出してありますから、國體が自然わかります、又尊號の言語によりまして、その國におきまして、いかやうなる言語を以て、朝廷の言葉、即ち國家の通用語と致して居つたかといふことがわかります。上の例におきましては、尊號の言語は悉くラテン語でありますので、種族の如何に拘はらず、イギリスにおきましては、當時ラテン語を以て政府の公用語と致して居つたことがわかるのである。又バルチアと申す國は、もとヒルカニア地方に興りましたもので、たしかなことはわかりませんが、先づカスピ海の東側に、當時居住して居りましたる北方蠻夷と、南方のペルシアより移住しましたるイラン種族とのまざりものであつたらしうござりまするが、とにかく朝廷におきましては、ギリシア語を以て通用語と致して居つたと申すことがわかりますのは、バルチア歴代の古泉に打つてありまする王の尊號が、ギリシア語であるので證せらるゝのであります。

第五には、古泉は必らず當代の技術を示すものでありまして、一般美術の盛なる世の中には、古泉の鑄方もやはり精妙でありまして、一般美術が衰へると共に古泉も亦粗末となります。されば

古泉は取り敢へず一般美術の盛衰如何を見まする反應劑となるのでありまして、文化の歴史を取り調べまする時分に、重大なる應援を與へてくれまする。

第六には、古泉と申せば必らず金銀銅の中でありまして、その他の金屬を泉として用ひた例があまりございませぬから、用ひてありまする所の金屬を見まして常時の工業の進歩致して居りまする所の程度を見ることが出來まする。このことは單に古泉の金屬を分析しまして、金なり銅なりどれだけよく精練してありまするか、見ますれば直ぐわかることであるのです。金や銀を精練することは、さほど進みまししたる技術を要しませんが、銅を精練致しまするには甚だ高度の技術を要しまする。化學の上より申して純粹の銅と申すものは、甚だ得難いのでありまして、とかく金とか砒素とかゞまざり、がちのものでありまする。然るに金もなければ砒素もなしと申すやうな純銅でありまするならば、當時其の國におきまして冶金術が盛に進んで居つたことがわかるのでありまする。又冶金術のみが進んですべての他の工藝が甚だ幼稚であるといふことは、あり得べきことではありませんから、古泉の質を研究致しますれば従つて當時の工藝の程度がわかる筈なのでありまする。

第七には、古泉の質は必らず當時の經濟事情と相伴ふものでありまして、經濟がゆたかでありまする時の古泉は、必らず質が純良で、經濟が紊れまするだけそれだけ古泉の質も落ちて參ります。近い例を申すならば、江戸時代の金銀貨を見まするに、慶長より元祿、寶永に至りまするまで、段々

々と質が落ちて參りまして、元祿の古金、寶永の古銀と申せば、その質の粗惡なるので以て鳴つて居りまする。又元祿時代は、幕府の財政の紊亂その極點に達した時であることは、經濟史に於て有名なる話でありまする。正徳享保に至りまして家繼吉宗二將軍の盡力で、質は又善くなりましたが何分經濟事情が許しませんので、二十二年の間しか我慢ができません、元文に至りまするといふと、又ぞろ大分わるくなりかけます。その他いくの國へ參りまして、いくの時代におきまして、古泉の質の如何といふことは、當時の財政が如何といふことの目標めじるしでありまする。

第八には、ある特別の場合を除きまするの外は、傳はつて居りまする所の古泉が多ければ、當時、鑄ました分量も多かつたらうし、又傳はつて居りまするものが少うございしますれば、初めよりして鑄ました量が少かつたのであらうと申す想像が附きます。この特別の場合と申上げたのは、たとへばある時代におきまして泉が非常にわるくて、あまり評判がわるいので次の時代におきまして政府がこらへ切れませんで、新しい泉を鑄まして、もとの泉を悉く引上げた場合であります。かやうな例は貨幣鑄造の歴史におきまして有り勝ちのことでありまして、江戸幕府の三寶銀四寶銀などはこの例でありまする、従つて研究者の注意すべき要點の一でありまする。

第九には、たとへば上にあげました標本に、エリザベタの千五百六十九年と打ち出してありまするし、ジェームス一世の千五百六十九年と打ち出してありまする。千五百六十九年とあるのは、勿論キ

リスト紀元でありまして、この銀錢をうちました年であるに違ひありません、この年にエリザベタが、どういふ相貌に見えたか、イギリスの工藝は、どれほどに進んで居つたのであるかと申すことは、この古泉が大分に教へてくれます。又ジェームス一世の十二とありますのは、疑ひもなく王の即位第十二年のことでありませうで、千六百十四年に當ります、この年にうちました泉でありませうで、この標本より當年の王の相貌、イギリスの經濟時情、工藝進歩の有様などを推すことが出来ます。

古泉の興へてくれまする利益は、此の如く廣大であります、古泉學者は、とにかくこの學の效力を甚だ廣大に申し觸らす傾向がございまして、一切歴史が亡びて居りまして、古泉さへ存すれば、その國の歴史が回復出来るかの如くに信じて居るやうであります。たとへば歴史の一向傳はりません、かの中アジアのソグディアナ國、バクトリア國、北インドのギリシア國、月氏國などの歴史が、古泉のみによつて回復されると信じて居る古泉家があるやうですが、これはあまりの我田引水説で、それほどまでの效力を古泉學があらはすことは出来ません。この人々が推論致しまする有様を鳥渡お話し申さうならば、大凡次に申すやうな方針に従ふて居るのです。

先づ古泉は、必らず一定の形式を持つて居るものである、然るに形式は必らず技術によつて成るものであります、然るところが技術は一朝一夕に、遽かに又勝手に新らしく發明せらるべきもの

でありませので、必らず先々の時代より傳來致して居る筈のものでありますから、相接近して居りまする時代の古泉は、勢形式をあまり違へぬ筈であります。もし形式が多少違つて居りまするならば、とりも直さず大分年代が隔つて居るといふことを示して居るのである。又形式が甚だ似て居りまして、而して、王の肖像が違つて居るといふのであります、この二枚の古泉を鑄ましたる王は、親子の關係で居るのであらう。あるひは表と裏に違つた肖像がうち出してあることがありますれば、かういふ場合には、恐らく兄弟同時に君臨して居つたのであらうなど、推論致します。

この場合におきまして、なるほどいかにも古泉家が申さるゝ通り、二つの古泉はあまり年代を隔つて居らるのでありませう、しかしながら二枚の古錢のあらはして居る所の肖像は、親子であるとの證據には少しもならんであります、兄弟であるかも知れませんが、叔姪の間柄であるかも知れません、祖孫の關係であるかも知れませんが、又表裏両面に違つた肖像が打ち出してあるからといつて、兄弟と見るなどいふも云ひ過ぎた話で、よしや同血統と見たところで、やはりこれも叔姪の間柄かも知れず、従兄弟の關係かも知れず、あるひは縁もゆかりもない他人かも知れません。尙又申すならば、同時に君臨して居つた證據には、ちつともありません、なせと申すに、泉の信用を得ません爲めに、殊更に舊貨幣の肖像を採用しまして、その裏面に己の肖像をうち出す王があるかも知れません。一の國を亡ぼして代つて取つたやうな君は、かやうなことをやりさうなものである、

纂奪者におきましては尙更のことである、月氏諸王の古泉の内にこの例があります。

又古泉家は古泉の示して居ります形式の異同技術の巧拙の程度を見まして、それより各々の古泉の間に隔つて居ります年代を何年と委しく定めますが、これも頗る覺束ない話でありまして、古泉家の眼力はいかに確かに致せ、これまで細かく異同巧拙の程度より年數を出せるといふことは、史家として疑はねばなりません。もつとも古泉家が常に申します古泉の質、量、技術に基きまして、その時代の經濟事情や工藝の有様を推測致しますることは、これは然るべき事と存するのであります。又古泉を發見致しまする地方は、その古泉をうちました本國と何等かの手續きによりまして、關係が附いて居つた、言ひ換へれば何等かの意味によつて交通があつたといふ證據になることは勿論でありませう。例へば甲州古金に西洋式の丸形貨幣があり、グラウビンデンの山間にマシリアの古貨幣を發見致しますのはとり敢へず交通のあつた證據となり、しかしどうかすると古泉家が、かやうな古泉を發見する國々は、悉くその古泉をこしらへまする本國の領分であると考へるやうですが、史家はこれを正しいと思はれるわけには參りません、甚だ無理な推論で、恐らくどの場合にも精密には當るまいと思はれます。要しまするに古泉を發見しまする地方とは交通があつたといふだけの證據には十分なりませう、しかしそれ以上のことは何とも申されません。

上に申上げたことをかいつまんで申しますれば、古泉は畢竟する所一つの國の歴史の大きな筋道を

を示すだけの効力はありませうが、歴代の王の王位繼承の手續きやら、領地の變遷やら、文化の盛衰やら百般のことにつきましての明細なる反應劑とは到底なりませぬ。月氏歴代の古泉を調べて見ますると古泉學の効力がはつきり判る筈であります。月氏の歴史がプリンセップ以來數多の學者の手に經て居ながら、今だに五里霧中にさまよつて居るのはとりもなほさず古泉學に對する不信任票決であるのです。

以上の所で補助學科を大分擧げまして、その必要なるわけを申上げましたが、申す迄もなく史學に於てはすべての科學を參考致すべき筈でありまして、どれかれと申して擇み立てを致しましては、それ／＼の學科が不平を懷くべき筈でありますけれども、入用であるからと申して諸學科を悉く擧げて説明致すにも及びますまいから、上に述べました七つの科學は、差し詰め最も緊要の補助學科であると認めまするで殊に出しましたのであります。若し必要が有りますれば、自餘の學科の中でいかなる科學なりとも入用次第應援に頼んで來る筈であります。

これまで申述べました所は悉く材料に關係致しますること、材料即ち史料の集めかた、又いかなる學科が史料を供給致しますか、その邊のことはほどこれでおわかりになつたらうと存じまするで、史料編は先づこれで終へたことと致しまして、次に考證編にうつります。

三 考證編

總論

二二二

こゝに考證編と申しましたのは通俗の言葉を用いたのでございまして、やかましく申しますならば批判編と申した方が宜しいのであります。凡そものを批判すると申すことは、一つのものを解剖し分析致しまして、その性質成分を檢定致しまして成ることならば、その品物の來歴、又用ひ方等までをも明らかにしたい目的を持つて居るものであります。通俗の言葉遣ひでは、批判と申すと何か悪口でも叩く様に考へられて居りますが、左様な次第では決してないので、殊に史學におきましては、毫釐も悪口を叩くなど申すことは致さんことでありまして、申さば褒貶も毀譽も致しません。唯事實ありのまゝを申すばかりですから、こゝに申上げる通り、一つの材料を解剖したり分析したり致しまして、性質なり成分なりを研究致しまして、その品の來歴應用法等を出來得るだけ定めたいと志すのであります。これは材料が集まりますれば、次に必らず施すべき手段でありまして、史學に限りませず、すべての科學におきましても同様のことで、先づ以て材料を集めまして、材料が集まりましたならば、次には批判せなければならぬのであります。批判を経ずして材料のまゝを直ぐ傳へ

ると申すことは學者の致すことではございせんのであります。

史學もやはりすべての科學の如くに自己専有の材料をもつて居りますので、この材料を出來る限り精密に解剖分析致しまして、自分の用に供せんければなりません。史料編におきましては、漠然と集めました材料が果して學術の目的に協かひまするか協かひませんか、その邊のことはきまつて居ませんので、況してや目的に協かつて居るにしまして、どれくらゐの程度まで協かつて居るかなどいふことは尙更以てきまつて居らぬのであります。その邊のことを篤と穿鑿致しするのが批判の目的であります、昔より用ひ來ります普通の言葉では、かやうなことを考證と申しますので、一般に解し易い様に、こゝでは考證と申上げるのである。

さて考證を始めまするに就いては、それ〴〵手續きがあります、正當の手續きを履みまして順序を追つて考證致しませんといふと、結果が明瞭にわかりません、即ち混雜を生ずる患がありますので、それ〴〵順を追つて申上げます。

考證編におきましては、一つの史料を證據物件と申します、即ち一つの事實に對する證據物でありますので、かやうに申すのであります。又かやうなる證據物件が與へまする所の結果を證據と申します。無證據の宣言は、史學に於ては斷然致しませんことで、史家が何か申述べますることは、必らず何か證據を具へて居ることであります。勿論證據にもそれ〴〵程度がありまして、程度は種々で

ござりまするが、とにかく何か證據がなければ、史學として口の開けるものではありません。それ故に證據物件と證據とは、殆んど史學の命脈でありまして、これがなくば史學は全く無いのであります。

そこで一の史料が、證據物件として役に立ちますかどうかと申す方の檢定は、之を外部の批判と申します。又證據物件が事實に對しまして、どれほどの程度の證據を與へますといふ方の檢定は、これを内部の批判と申します。

外部の批判

まづ外部の批判より初めまするが、何故にこれを外部の批判と特に申しまするかといふわけは、すべての物品の鑑定法の通りに史料もやはり先づ大體よりして見てかゝらんければならぬものであります。大體と申すならば、先づ外形であります、こゝに一の古文書がありますならば、これを鑑定致しまするには、先づこの古文書を取り上げましてその紙を見ます、次に墨色を見ます、次に筆意を見ます、次に書風を見ます、かくの如き類たぐひのことです。書いてありまする文章を讀むなど申すことは遙か後のことでもあります。建築物を見まするならば、先づ地勢を見ます、次に建築の様式

を見ます。次に用ひてありまする材料を見ます。一の書籍でありまするならば、先づ巻物であるか冊子であるかを見まして、次に紙を見ます、次に筆意を見ます、次に書風となつて來るでせう。萬事さういふ順序でありまして大ざっぱな所より段々細かく立ち入るのであります、かやうな大ざっぱな外側の鑑定を外部の批判と申すのであります。

あかいにせ物でありますならば、勿論この外部の批判だけでばるをだすのであります。巧に出來ましたにせ物では、中々かやうな大ざっぱな批判では馬脚をあらはしません。何にいたせ、かやうな次第でありまするで、外部批判の第一着手と致しましては眞贋の鑑定より始めなければなりません。

第一 贋造

眞物とは、いかやうなるものであるかといふことは、随分困難なことでありまして、定義を下すことは随分難いですが、とにかく我等の用ひまする意味では、

大凡眞物とは、その自から稱する品に相違なきものをいふと解釋致しまする。

贋物とは、いかなるものであるかといへば、所謂似て非なるもので、その自ら稱するものと違ふものでありまする。

この眞物が贗物かといふことを史料の一品毎に目をつけて、やつて見なければならんことでありまして、史家の研究手続きは實にうるさいものであるのです。これが古來より傳來致しました有名の史料でありまして、又露疑を容るべからざるものでありますならばそのまゝ通過させますが、少しでも傳來に曇りがあるとか、あるひは新しく發見致しました史料であるとかいふと、必らず綿密なる檢定を要するのであります。一口に申すならば、いかなる史料といへども、史家の眼を無試験で通過させることは出来ぬものであるといふ根本原則を立て、置いて宜しいのである。即ち上に申し上げますやうな、古來誰も疑はぬ確實なる品の如きは特典で以て無試験で通過するものでありまして、あまたの史料の中、全く特別取扱の品であるのです。

すべて史料と申すのは、兼々申上げる通り、すべての古物の謂でありますので、悉く確かな品ばかりが傳はつて居るといふことは、誰も主張致すものはない筈でありまして、何品に拘はらず、古いものを見なれた人は、誰でも古物には兎角贗物が多いといふことを善く承知致して居ることであるのです。書畫や骨董や刀劍類などは、殊に贗物の多いのを以て鳴つて居りますので、いかなる素人と雖も鑑定家に見せずに迂濶にこれらの品を買ひ入れませんが、不幸にも史料となりますと、多くは書類でありますので、世間の人は書書類骨董類刀劍類などの場合とは違ひまして悉く確實の品であるかの如く思ふやうに見えます。これは大の間違ひであります、書類もやはり書畫骨董刀劍などと同じく、

古來傳來の品であるのです、古來傳來の品には贗物が澤山あるにきまつて居るのです、どれが眞物であるかどれが贗物であるかといふことは、よくしらべなければ輕々しく信ずることは出来ぬ筈なんです。

くれぐれもこの事は明らかにして置きたいものでありまして、古文書であらうとも記録であらうとも、書畫骨董等と同じく注意して研究を積みませなければならんと申すことを記憶して置いて貰ひたいのです。古いこれらのものを信ずるには慎重な審査を経た上でなくてはならんと申すことは、唯以上に申上げたばかりではおわかりにならないかも知れませんから、鳥渡實例をあげまして御話を申しませう。

一、地理。

まづ眞贋の鑑定は最もたやすく出来ると通常人が思うて居りますのは地理であります。地理は世界の表面の一部分で年代を経るに随ひまして、極く少しづつではありますが、自然の變遷を免れぬものである。しかし歴史年代たる所の僅か五千年以來では、通常の場合におきましては、著しい變動を生ぜぬものでありますので、概して申さば古來の姿の儘で今日でも存して居る筈のものである、大地震が度々揺つたり、大洪水が度々出ましたりする處は例外であります。かやうの性質のものでありますので、地理の贗物といふものは殆んど出来にくい筈のものであります。

例へば山城の叡山は、傳教開基の所謂台嶺ではないと、かう申す議論は曾て承はつたことはなし、關ヶ原の古戦場は今も昔も異議者の出たことがないのであります。ヨーロッパにおきましても左様で、ロンドンの所謂シチーも、ワテルローの古戦場も、古來より今日まで異議者が出たことはございませぬ。かやうな大きい事實を證明致して居りまする地理となりますると、申上げる通り贋物は先づ以て出来ぬ筈である、又企てるものもございませぬ。

しかし小さい事實を證明しまする地理となりますると、澤山に贋物がございします。例へば藤原藤房の終焉地は、日本中に幾個いくつございしまするか、殆んど、ま、擧げきれん程ございします、獨り日本に澤山ございしますのみならず、一説によりますれば、シナにもある筈でございします。又これよりも尙年代が下つたことであるならば、石田三成の死處と申すものも二三個處あるやに承はる。まして古い遺趾、偉人の遺蹟などに至りますると、とかくに疑はしいのが多いものでありまして、はつきり檢定することは餘程困難なことであるのです。光源氏の須磨の遺蹟、奈良の猿澤の池のふちにある采女の衣掛柳などは云はずも致しても、これに類しました馬鹿馬鹿しい地理が随分信せられて居ることがございします。

かやうなことに立ち到りまするのも、畢竟する所その土地の面々が、何がな土地に由緒を附けて土地の名聲を揚げやうと力めまするからのごとで、申さば一種の愛郷心より出ますること、人情

もつとも申さんければなりません。しかし人情としてはいかにもつともでありまして、むきになつてまでかやうなことを主張されましたは甚だ困りまするので、この邊のことにつきまして史家がかれこれ彼此と異議を申して出まするときにはどうか虚心平氣になつて聞いて戴きたいものであります。近頃史蹟保存會とか申すものが出来て居るさうで、いろいろの史蹟を保存されると申すことですが、上に申しまするやうな感情をスッパリ除き去つて、學術的の冷眼を以て、シッカリ審査されまして、いかな冷酷な史家が参りましたも、虚心平氣で審査させて戴きたいものです。

ヨーロッパの例で申しませうならば、スウィスのかのウリ湖のほとりにありますウイルレム、テルの遺蹟、ベルン州の處々にあるロドルフ・フォン・エルラハの遺蹟などは、この類でありまして、土地のものは固く信じて居りますが、史家の眼より見ますれば明白なる贋物であります。本邦の史蹟などにもいかゞはしいものが随分ありませうで、とくと注意を加へんければならぬことであるます。

二、古器物。

地理に次ぎまして鑑定がたやすいかと人が鳥渡思ひますのは、先づ古器物でありませう。と申上げるのは、古器物には贋物の多いことは昔から人がよく心得て居りまするので、無下の田舎の俄紳士ならばいざ知らず、少しでも物事に氣を附けますものは、たやすく古器物をおいそれといつて眞

に受けるものでありませんので、必らず鑑定家に托しまして、それに鑑定をたのむ例であります。それゆゑに古器物には無数の贋物がありますに拘はらず、存外人が欺かれぬこととなつて居るのであります。

しかしながら實際の姿を見まするに、中々贋物を迂濶に持つて居る人が多いことでありまして甚だしきは見えもせぬ自分のへば鑑定で、自慢で持つて居る贋物さへもないでございませぬ。

これは昔の話であります、ヨーロッパのある大學に、何がしといふ非常な熱心な古生物學家がありまして、熱心な研究をして居られた所が、ある宜しからぬ學生がありまして、串戯に軟體動物や昆虫やらの、化石となつて容易に残らん筈のもの、想像化石を拵へまして、これを竊かにある場所埋めて置きました、さてその中の一品をわざと石屑交りのまゝある日先生の所へ携へて参りまして、云々の處におきまして、この品を發見致しました、大分珍しい品と思ひまするがいかゞなものでございませう、御鑑定を願ひたいと申しました。先生見て大に喜ばれて、これは驚いた、かういふ珍しい化石があらうとは少しも知らなんだ、實に千古未發の大發見である、早速堀りに往かうといふことで、堀りに往かれた。さうすると出ますること、出ますること、珍しい奇妙な化石が澤山出て來たのです。そこで先生非常に喜ばれて、そのことを委しく書いて圖を挿んで版におこして大自慢で世に發表されました。するとこのいたづらをした學生頗る困りまして、内々あるものゝい

たづらから出たものであるといふことを云ひ觸らしたのである、それを先生聞かれて非常に赤面せられて赤面の餘り折角苦心して拵へられたる自慢の書を悉く買ひ上げて焼き棄てられたことがあります。物事熱心のあまり、かやうなことがありまして、鑑定に長じて居る人も、かういふ品をつかんで途方もないものを信ずることもあります、よく注意してかゝりませんと、頗る危い境遇に陥ることがありませう。

世の中に有名な古人の彫刻物とか所藏品とかいふものが往々出るでありますけれども、それが眞物なることは十中の八九覺束ないので、それがために史家は通常古き器物を史料と致す時分には、頗る躊躇致す例であります。奈良あたりへ参りますれば、奈良朝の古器物を製造する製造場が出來て居るので、そこでこしらへたものは、いかにも巧みに出來て居るので、迂濶に買へるものでないのであります。イタリアのローマにもかういふ製造場がありまして、盛に古器物の模造をつくり出しまして、これを眞物と稱して賣り出して居ります、アテネ、エルサレム、スミルナ、アレppo、ダマスクあたりに参りまして左様ださうで模擬物を盛に製造致すと申すことです。

本邦の古墳發見の品物、例へば金環、銅環、曲玉、管玉などの類が、とかくに贋物が多いのでまことに困ります、その古物製造所はいつくにあるか知りませんが、随分名ある大家がみすゝの贋物をつかんで喜んで居られたことが從來度々ありましたが、あるひは今後とも、あるかも知れま

せん。

かういふ鹽梅に古物をつかむのは自分のすきな爲め、眼がくらみまして、こゝ一番研究を遂げて、品物の眞實を決定しやうといふ勇氣がないからであります。若し鑑定して果して良いとなると宜しいが、不幸にして贋物であつた時には非常に落膽しますからして、そのために勇氣を缺いで、よう鑑定させぬのであります。本邦古墳出の品物でありますならば、その眞物は澤山に類品が帝國大學の人類學の標本室やら、上野の帝室博物館やらなんか備へ附けてありますので、現品を持つて参りました、こゝいらあたりにあるたしかな品と比べて見まして、合へばそれでよいので、まことにわけもないことでもあります、又全く類品がないとならば、珍物でありますので、とくとその道の人に相談にかけるが宜しい。その道の人で従來かういふ類品を發見せぬ、これは極めて珍しい初めて見る品であるとなりますれば結構なことで、まことに學術界に新例を發見したことと相成るのであります。

神社佛閣などに備へ附けてあります所謂寶物などの品には、往々にいかゞはしく思はれる品が交つて居ることがございます。もつとも神社や佛閣などは、かういふ寶物を拜見する人々が必ずしも皆學者ではございませぬ、従つてその人々の満足を買へばそれだけでよいので、申さば必ずしも悉く眞物を備へ置く必要はないか知らんが、學術上より申せば、あまり當てにならない陳列館

と申さんければなりません。

三、古文書、古記録。

次ぎましては古文書古記録であります。これも以前は盲信者が多かつたであります。近頃は大分人が古文書古記録などのことをやかましくいふので、大分とにかくその道の人の鑑定を経へきものとわかつて來たらしいですが、中々まださうは弘くはゆかぬので、眞赤なにせ物をつかんで喜んで居らるゝ方々も多いことで、その多さは随分古器物のにせ物の多いに譲らぬのです。

殊に古文書と申すものは、家の履歴を示す證據物でありますので、とかくに人が欲しがるのであります。それにつけこみまして、古文書鑑定の商賣人が出て参りますので、澤山ににせ物をつくつて、あるひは、さういふ特に古文書をこのむある種類の人に賣り附けるとか、甚しきは依頼を受けて書くのもありますし、更に甚しきは、極めて地位のある人達が、己の家を彌が上にも尊くせん爲めに、又はお寺なら、寺領を得ん爲めに、あるひはその他の權利をたしかめませうと思ひまして、よく物事を心得て居る立派な人達が自から贋物をつくることがございます。

ヨーロッパの古文書には贋物が非常に多いのであります。古代に遡るほど甚しうございします。たとへば例を擧げて申さば、ヨーロッパに現存致して居りますメロウインガ朝の古文書は殆んど五割贋物でありまして、カロリンガ朝の初四代の間の古文書は、大凡一割五分が贋物であるといふ

ドイツ、フランスあたりの古文書家の鑑定であります。本邦の古代の古文書は、幸にして頗る正確でありまして、奈良朝古文書の贋物など申すものは、我等殆んど承はつたことはないのである。これはヨーロッパと趣が非常に變つて居ることである。もつともこれにはいろいろ來歴があつて今こゝに委しく申して居る暇はないが、詮する所メロウインガ朝の頃におきましては、然るべき社會上の理由があつてかゝる多くの贋物が出來たので、而してその贋物製造者は、何れも皆堂々たる人物であつたのであります。

本邦の古文書の贋作と申すことは、餘程後世に興りましたもので、まづ鎌倉以後でござりませうか、自然に興つて參つたもので、中にはあるひはヨーロッパの例に於て見まする如く立派な地位のものが、所存あつて自から贋物を製造したことがないとも申されませんが、多くの場合におきましては、さほどまで地位の無いや、からが自分の所領をたしかめむとか、本來己の領分でないのを己のものに致さうとかいふ泥棒料見より起る詐僞手段よりしたので、要するに小人のけちな心より起つたものであります。尙年代が下りまして、元祿前後の頃に非常に贋物が澤山出來た様であります。畢竟慶長より寛文の頃まで、まだ戰國殺伐の風がありまして、やうやくこの殺伐の風が幕府の縝密なる手段によりまして僅かに抑へられて、今度は變りまして學術が少し起つて參つて、書籍が重せられ出しましたので、その影響としてかやうな風が初まつたものかと思はれます。

又世の所謂茶人先生が、頻りに珍らしい人の書などを尊ばれまして、茶會の席には普通の品では役に立たず、何か非常に珍奇なものでなくばならんといふ考があつたからして、いろいろの贋物を造る機會を興へたものかと思はれます。この茶會の席の贋物といふものは、已に足利時代より起りましたことで、徳川時代よりのことではありませんが、凡そ珍奇なものであればよいといふことで、例へば張良の兵書とか、孔明の上表とかに類似の品を珍重致したのである。されば藤原鎌足であれ、弓削道鏡であれ、誰でも珍らしい人でさへあればよいので、本來眞贋のことをさうやかましく申すのでないであります。茶會は古器物古書畫の展覽會ではなくして、集つて樂むのでありますから、本來氣が附かずばそれでよいのです。又茶會の席では何でも、べつに輕薄に賞めればよいのである。しかしそれが贋物をつくる機會を興へて、盛に贋物製造者が興つて參るのであります。

それより致して又一般の書畫に及び、とかくに珍らしいものが欲しいので、その爲め有名な人の書といふものが澤山出來ました。清盛の書翰、頼朝の書翰、菅公の寫經など、いふものは澤山に物があつて、殆んど世にあるものを、舉げて皆贋物かと思はれます。平清盛の肉筆と考へますのは、嚴島に奉納いたした寫經の他に我等一品も知らないのである、無論清盛の書きました花押だけならございます、但し世間普通の信じて居る花押とは違ひます。頼朝の肉筆と申すものも九條家舊藏

の機密書類は確でありませうが、俗に頼朝の肉筆といふのは誰か左右の人の代筆である。菅公に肉筆がないといふことは保元平治の昔よりよくわかつて居る。楠木正成に至りましては随分肉筆が傳はつて居る筈で、二三品たしかと思ふものがありますが、しかし不思議なことには、この人の古文書には同一の文章でどちらが眞物でどちらが贋物か、容易に鑑定の出来ぬものが大分あるやうに承はつて居る、かゝる場合には眞物が一品あつて、あとは皆そのうつつしなものでありませう。極く近い人になりますと、徳川家康の肉筆と申すものは手許藏入年貢の受取狀くらゐである。高位尊貴の方々が諱を自署せらるゝことは特殊の場合に限りますから、か様の方々の肉筆を署名で確めやうと致すのは無理であります。

かやうな次第であるですからして、古文書などの實物を押へると申すことは、やはり然るべきその道の人に就いて鑑定を請はなければならぬことであります。唯紙が煤ばけて居るとか、書が無暗に力強くはねまわしてあるとかいふことで信用するわけには參らるのであります。記録におきましても同様のことでありまして何も猫も杓子も記録を書いたわけなし、無暗と何がし記録と云つてからに稱へました所で、果してさうかどうか、これも甚だ覺束ないことであります。又實際記録があるにしても、本人の肉筆があるひはうつつしか、その邊のことも驚と味はねばなりません。

こゝにいかに堂々たる大家の古文書といへども、必らずしも皆眞物ばかりでないと申すことの例

證を一つ申上げませう。それはヨーロッパのオーストリア家の重代文書の中でも、殊に重大なる書類のことでありませう。

オーストリア家と申すのは、申すまでもなくヨーロッパ諸國の諸帝室中でも、殊に門閥家の一つでありまして、家も甚だ古うございまするし、名譽の人物をも澤山出して居りまするし、又久しい間代々神聖ローマ帝國の皇帝の位に直られて居つたので、申さば世界有數の帝室であると認めてよいであります。さればこのオーストリア家に重代の古文書として傳はつて居りまするものは澤山ございまする中に、こゝにこの重代文書中の殊に重大なるものと申すのは、オーストリア家が神聖ローマ帝國の古へに於て、破格の取扱を受けて居りましたことでありませうが、その取扱を受けたる種子となつて居りまするもので、所謂オーストリア家の規模を定めましたる書類なのであります。かくの如き規模であればこそ、追ては神聖ローマ帝國の帝位にも直られたことでありませうし、又この家がヨーロッパ諸國の間におきまして大に敬はれましたのであります。然るところが、殆んど不思議にもこの破格の規模を定めて置きまする所の古文書は贋物なのであります。段々研究して見まするといふと、オーストリア家のある時代の君が、詐僞手段を以て贋作致したものであります。これは實に途方もないことで、殆んど以て驚入るの外はありませんが、事實左様であるから致し方がない。

今日では神聖ローマ帝國が亡びてから、ざつと百二十年も経ちまするし、この間史家の研究も頗る精密になつて來たのでありまするし、オーストリア家に於ても強いてこの贋作文書を庇ほうとも致しませんからして、今ではオーストリアの大學の講義におきましても、公然この書類の贋作たることを述べますのです。

このオーストリア文書の眞贋のことが學術界にやかましくなりましたのは、今より七十年前のこととでありまするが、いかにも古文書學を少しやつたものは誰も疑を容るべき筈の書類なのでありまするその仔細を左に申上げませう。

オーストリア家の破格の規模を定めましたる古文書は、同家に二通りあるのでありまする。假りにこれを甲の部類と乙の部類とに分けまするならば、甲部類は左の五通の特許状より成ります。

- 一、千五十八年十月四日附、皇帝ヘンリ四世の特許状。
- 二、千百五十六年九月十七日附、皇帝フレデリキ一世の特許状。
- 三、千二百二十八年八月廿四日附、皇帝ヘンリ六世の特許状。
- 四、千二百四十五年六月日附、皇帝フレデリキ二世の特許状。
- 五、千二百八十三年六月十一日附、皇帝ロドルフ一世の特許状。

以上五通であります。乙部類は同じく特許状でありまするが、僅かに二通だけであります。

- 一、千百五十六年九月十七日附、皇帝フレデリキ一世の特許状。

- 二、千二百四十五年六月日附、皇帝フレデリキ二世の特許状。

以上二通限りであります。

かくの通り歴代の皇帝より賜はりましたる特許状で破格の規模を定めてありまするものが二通りあるといふのは、おかしきことでありまして、いかにも合點の參らんことなのである。又次に氣を付けねばならんことは、甲部類の書類は、皆原書でありまするに、乙部類は二通ともうつしのみでありまする。そこで致し方がないから、甲部類がよいのか、たゞしは乙部類の方が宜しいのであらうか、どちらか甲乙の中で決定せなければならんこととなつてしまひます。

しかし甲部類の方は何れも皆原書でありまするで、烏渡この方がよいかと、一見した所では思はれるのである。とにかくにも精密に甲乙の古文書を研究せねばなりません、一通一通に精細に見まする所が、甲部類の第一號ヘンリ四世の特許状は、いかにもいかゞはしいものであるのです。そのいかゞはしいわけは、成程一應見た所では、書風と申し、文體と申し、いかにも十一世紀の原品であるかと思はれるやうでありまするが、よくしらべて見まするといふと、十一世紀の書風に固有なところの特色を聊か缺いて居る所がある、又當時朝廷に於て用ひましたる慣用の形式に背いて居る。これで先づ以て、いかんと定まらしますが、尙念のためにその文章を讀んで見ると實にひどい

ことが書いてあるのです。即ちオーストリア家は、曾てユリウス・ケーザル並びに皇帝ネロより賜はつておく所の特許状を持つて居つたと申すことで、その分は古くより贋文書と定まつて居ります。申す迄もなくローマのケーザルや、帝國の初めのネロの時代などにオーストリア家があらう筈が勿論無いのでありますからして、あたかも人が信せぬことはわかりきつたことである、そこでいかにも信せられんから、眞赤な似せ物でありますが、この眞赤な似せ物を麗々と、かの第一號に引用してあるのであります。皇帝ヘンリ四世は、この第一號に於てケーザル及びネロ帝よりオーストリア家へ賜はりましたる破格の規模を安堵仰せつけられた意味になつて居るのであります。それからその他まだいろいろの馬鹿げた限のことがこれに書いてありますが、一々申す迄のこととはございません。とにかく第一號の古文書は、贋作者におきまして、眞正のヘンリ四世の古文書をよく読み碎きまして、それに倣ひまして、ところ／＼自分の考案で都合のよいやうに改めて作つたものであります故に、文體といひ書風といひ、一見した所だけでは、いかにも眞物であるかの如く見ゆるのであります。

かくの如くに第一號のみはたやすく馬脚をあらはしましたが、さて次の問題はです、第一號のみが贋物であつたに致せ、他の甲部類の四通が従つて皆贋物であるとは決して申されませんから、尙根氣よく自餘の書類をも研究せんければなりません。と申すわけは、神聖ローマ帝國の朝廷におき

まして、かゝり贋物を眞にうけまして、おめ／＼と詐偽手段にかゝりまして安堵状を出されましたことが幾度もござりまするからして、自餘の四通は第一號によつて出でたものであると申した所で、必ずしも直ちに之を疑ふわけには参りません。神聖ローマ帝國の朝廷におきましては、古文書の詐偽を防ぎまする手續が、至つて備はつて居りませんことでありまして、所謂謀書、にせ繪旨の類は澤山にあつたのを、發見することが出来ないのであります。

どういふ致し方であつたかといふのに、一の家よりして先代が死にましたとか、あるひは皇帝の代がはりがありましたとかいふ度に、従前の所領なり、その他の特典なりを安堵仰せつけられるやうに願つて來ます。その時分には本書を證據物件として差出します、さうしますとかゝりの人々がこの本書を取り上げまして、どういふ審査を致しましたかといふに、大體に於て慣例に違ひませんければそれによしとしまするし、又この文書は曾て何がしが執筆したのであつたが、いかにもかの男の手跡によく似て居るくらゐのことが關の山で、時代の隔つたものになりますといふと、その時代の慣例すらも、かゝり員がよく心得て居りませす、況して筆をとりました男の手跡など申すことは尙更以て不心得のことでありまして、一通りよく出來たにせ物を出しますれば、かゝり員を欺くことは容易であつたのです。

右様の次第ですから、甲部類の第二號以下が、あるひは眞物かも知れんのであります。それ故

に先づ第二號より第五號に至りまする穿鑿をすることが必要なんであります。

そこで先づこの四通の外形を見まするに、何れも皆立派な紙に立派な書で書いてありまして、どうも不都合の點を發見せんやうなんである。で、この四通の向ふを張りまする乙部類の二通はいかゞといふに、何れも唯うつしのみである、本書は全くございませぬのである。甲部類の方は然らば本書の外にうつしがあるかとさがしまするに、うつしが一通もないのであります。即ち甲部類の四通は本書のみうつしなし、乙部類の二通はうつしのみ、本書なしといふのであります。

然るところが、この甲部類四通にうつしがないといふのが、いかにも以て不都合な話でありまして、この四通の年代たる所の十二三世紀あたりの慣例に、明らかに背いて居るのであります。何れの時代におきましても、家の重大の文書となりましますならば、本書は勿論丁寧に取り扱ひますが、その上に萬一紛失した場合に再び下げ下さるゝ時の證據と致しまして、うつしをとり置きまする筈なんでありまします。殊に十二三世紀以後になりましますと、ドイツの列侯がたが古文書を甚だ丁寧に取扱ひ初めまして、ひとり倉に大切に原書を保存致しておきまするばかりでなく、殊に文書控帳と申すものを拵らへまして、これに重大の文書類をば皆控へさして置いたことでありました。この習慣はわかりきつた人情なり社會の状態なりに基くものでありまして、誰のあたまにでも浮びさうなことであつて、もとは寺方の慣例でありましたのを、武家が眞似し初めたのであります。さ

うして見ると尠くとも第二號以下の甲部類の文書は、是非ともうつしがなくはならん筈のことでありましまするに、一向うつしがないとは奇怪至極である。乙部類の二通は如何と見まするに、十三世紀の諸文書控帳には、乙部類の二通のうつしは歴々と方々に載つて居りまして、現にオーストリア家の文書控帳にもうつしが載つて居りまする。甲部類の文書のうつしが出て参りますのは千三百六十年以後のことである、それより以前には曾てうつしがないのである。これは何故でせうな、古文書學を修めたものに云はするならば、乙部類こそは正しいものであらう、甲部類こそは疑はしいと申すべきものなんでありまする。

そこで甲部類の四通を丁寧に見始めるといふと、段々尻尾があらはれて來るのでありまする。先づ書風を見まするに、十四世紀の姿に見受けられまするで、十二世紀乃至十三世紀の書風とは受け取りがたいのである。又文體の形式所謂文例から見しても、不都合の點がありまする。尙念の爲めに書いてある所の事柄を見まするに、いかんとも不都合なことが歴々出て参りまする。

先づ第二號文書であるが、これに何が書いてあるかといふと、オーストリア領を割くことを許さぬことになつて居る。ドイツの列侯がたがその領分を諸子に分割せぬやうに致しましたことは大分後のことでありまして、まづ十三世紀の下半以降である、それより以前は一般の習慣としまして領地を分割しまして諸子を分封した例であつたのです。オーストリア家が此の如き後世の習慣を當時に於

て、已に發明致して皇帝より勅許さへをも賜はつたといふことは實際想像の附かぬことである。その他この文書に當時即ち千百五十六年神聖ローマ帝國の憲法に矛盾して居る所の事柄が澤山出て居ります。その中の最も甚しきものを一つ申すならば、オーストリア家の家督は代々長子に相續せしむる旨に古文書に書いてあります。けれども實際の話がオーストリア家におきまして、十四世紀に至りまするまで、長子が相續するなど申すことにはないのであります。その他いろいろのことがあるのは皆省くと致しました所で、之を要するに第二號文書に書いてあります事柄は、皆十四世紀の社會には適當することであるが、それ以前の時代には當て儀はまらぬことでありまする、又オーストリア家の歴史が、その明らかに當て儀まらぬことを證明致して居るのである。この理由によつて第二號文書を以て贋物と斷定致します。

さて第二號も贋物と致しましたが、第三號以下を贋物とは云へませぬ。その理由は上に申上げた。しかしながら第二號に書いてあります所の事柄は、十四世紀に至りまして初めて實際にあらはれることのみなのであります。これを第三號、第四號、第五號が何れも皆安堵せられて置くといふことは、ありうべからざることであるのである。一の時代の憲法に矛盾して居ることを、その時代の皇帝が安堵仰せ附けられる筈がない、一の時代の列侯がたの家格にないことを時の皇帝が發明せられて御許おゆるしにならう筈がない。されば第三號以下のものを一通一通丁寧にも丁寧にも審査致す

必要を發見致しませんから、引くるめて之を贋物であらうと假りにきめませう。

かうきめた上で、次の問題は、いつ頃誰が贋作したものであるかといふことを他の方面から決定しますれば、第三號以下の贋物たることは自然證明さるゝのであります。他の方面と申すのはどういふことかと申すに、甲部類の文書が示して居るところの大體の姿を見まするに、どう致してもこれは十四世紀の神聖ローマ帝國の事情に適當して居るものでありまして、かの皇帝カロロ四世の代に發布になりましたる有名のアウレア・ブルラ黄金印影を具へたる書類のことでありまして、殊に重大の書類に黄金の印影(ブルラ)を据ゑられました故にかく申すので、神聖ローマ帝國の憲法を確定致しました法律であります。の發表以後のドイツの事情に最もよくはまります。

そこで十四世紀中のオーストリア家の君で何か家の文書類をいぢつた人がありますまいか、捜して見まするに、これは千三百六十年七月十一日のことであるが、時のオーストリア家の君はロドルフ四世と申して仲々の野心家であつたのでありましたが、この日を以てウィーンの居城におきまして、學問のあります高官の僧侶がたを集められて甲部類の文書並びにその他若干の書類をうつさしめられたことがあります。さうして見まするといふと、この日より以前には甲部類の文書のうつつしは無かつたに相違ないのである。然るところが、これより少し前に、ロドルフ四世が、甲部類の文書に書いてありますオーストリア家の破格の規模を幾分か實地に適用せられたことがあります。たとへば千三百五十九年六月十八日附つのこの君の文書がありまして、その文書の印に、銘

と致しまして甲部類の文書の文言が引用してあります。さうしますれば、千三百五十九年の夏には已に甲部類の文書が存在して居つた筈である。そこでいよくこの部類の文書が千三百五十九年の夏頃に出たのであるまいかといふ假定で、アウレア・ブルラの規定と甲部類の文書が書いて置く破格の規模とを對照して見まするに、いかにも似たりや似たりや甚しきもので、アウレア・ブルラの規定があればこそこの破格の規模も出るのでありまして、もしアウレア・ブルラがなかつたならば、とても思ひつけさうな規模ではないのであります。

アウレア・ブルラは兩度に割きまして千三百五十六年一月十日と同年の十二月二十五日との二度に發布してありますから、甲部類の文書の贋作はこれより後のことであらうと思はれるのである。ロドルフ四世は皇帝カロロ四世の婿でありましたから、もし皇帝が嗣なくしてかくれられますならば、自然皇帝とならるべき順の人でありますし、しまするで、野心が仲々深かつたことであるですが不幸にも帝位を相續しまするわけには参りませんでしたのであつて、千三百五十八年にオーストリア家を相續されたときは、年甫めて十九で、野心に驅られていかなる短慮をも出し兼ねまじき年輩であつたといはねばなりません。かういふ風に疑がつてかゝりますると、千三百五十九年の夏即ち家督を相續致しまして、後一年餘の間、ひそかに甲部類の文書を贋作致させまして、一通り出来あがりましてので、これを堂々と世間へ披露しまする爲めに故らに學問のある高官の僧侶がたを集

めまして、頗る堂々とうつしをとらしたのである。

かやうにしてうつしを取りますれば、いかにもオーストリア家の實力と申し、皇帝の婿さんではあるし、内心にいかゞと思ふ人があるに致しても、公けには申しかぬるでせうで、どこからか、かやうなる重大の書類を引出し來られたことであらうと信せねばならんやうな風になつたのでありませう。それもロドルフ四世が温良謙讓の君子でありましたならば、かやうなひどいことをこの人に向つて申すのは不都合でありますけれども、實際この人は場合によりますれば、暴力も用ひ兼ねませんし、又詐欺をも働らき兼ねぬのでありまして、要するに己れの家の規模を掲げることでありますならば、いかやうなる手段をとるも憚らなんだ君でしたから、かくの通り甲部類の重大の書類を贋作したるの、この人であつて、その贋作の年代は、上に申した通り千三百五十八年から翌年の夏までの間であると申しても、猥りに古人に冤罪をきせるものとは考へられません。乙部類の二通の原書が傳はらんのは察するところ甲部類の贋作をした時分に、邪魔になるからして、乙部類のを、つぶしてしまつたのであらうと察せられます。

とにかく、かくの通りの、えらい詐偽手段を以て贋作しましたる書類が、オーストリア家破格の規模の基礎となつて居つて、代々の神聖ローマ帝が、確實の事實として之を認めて居られたと申すことは、いかにオーストリア家の實力が強くて、従つてその權勢が高かつたのであるかといふことを

説明致します。

上に述べました所は、大袈裟の古文書贋造の一例でありますが、記録にもやはり類似の贋作があります。簡單なる一例として、こゝに引かうと思ひますのは、楠正儀公事實書と申す小さな記録體のものがございまして、寛正元年の三月に楠正虎が子孫の爲めに書き残して置いたものであると申すことでありまして、先年大層有名になつたことがある。で、この記録を信じまして有難いものゝ様に思つて居る人が多少あるやうに見えますから、どういふものであるかといふことを鳥渡御話致しませう。

この記録の要領は、細川頼之が南方を貶しめ、楠木家を擧げ、咱はすに莫大の領地を以てしまして、首尾よく正儀を北朝に降らしめんとしました所が、正儀、家來一同の申すところに唯一人反對しまして、堅く義を守つて應じませなんだと申すことなので、その全文は次の様なことではありません。

楠正儀事實書一卷

山名赤松一手ニ成テ攝州ニ發向シ楠公コシラヘ置給タル城々ヲ攻ケル

頼之舟ニテ和泉ノ境ヘ上テ敵ノ後ヨリ河内ヘ發向セントシタリケレハ正儀公前後ノ敵ニ當ランコト叶ヒ難シトテ攝津ノ國ノ城々ヲ引テ河内ニカヘリ給ヒシ也對陣十月數度ノ軍有リ廣ナルカ故ニ不

記也去レハ彼對陣ノ時山名豆州密ニ使ヲ正儀公御陣尼崎ヘ遣シテ曲テ將軍ノ御方ヘ參候ラヘトテ書ヲ細々ト認メテ遣ハシケレハ正儀公御返事トテ申サセケルハ末世ニ至テ義ヲ重クシ私ノ一命ヲ輕クスル者ハ少ク豆州ノ類ハ多シ少キ義ノ金ヲ取テ多キ邪欲ノ土石ヲ捨テナント存シ候ト申テ狀ノ返事ハナシ一首ノ歌ヲ書セラレテ送ラレケル

冬サレト山名ノ里ノ夕風ニ梢ナヒカヌ嶺ノ楠

ト詠セタリケレハ豆州モ師義モ面目ナキコト思ヒシト也又右馬頭頼之四國ヨリ兵船ヲ揃ヘ和泉ノ境ニ渡ツテ直クニ河内ニ發向シ正儀公ヲ攻ルト聞ヘシ時京童ヤ讀タリケン

一方ニ吹モサタメヌ山風ヲ深ク頼ムナ細川ノフネ

カ様ニヨミタリケレハ山名父子扱テハ我度々將軍ヘ降參シツルコトハ天下ノ人嘲リケルヨト思ヒテ後悔スル爲躰也理成哉山名宮方ニテアリナハ九國ニ渡リ宗像ノ大宮司ハ討レヌト之然ハ九國ハ一扁ニ宮方ト成ヌル上大内介菊地暫時ニ亡スヘケレ此人傍近キ國々ヲ管領シテ居ヌルニ何ノ子細カハアルヘキニ頼之ノ謀ニ落テ惡名ヲ後代ニ殘シ候事コソ無念ナレ菊地カ將軍ノ宮ヲ供奉シ上京セント種々用意ケレヒ山名カ將軍方ニナリタルヲ聞力ヲ落シ込シトカヤ今ハ宮方ノ扶トナル人々ハ山陰山陽兩道ニハ石見ニテ三角澤カ一族安藝ニ熊谷長門ニ厚東四國ニハ伊與ニ土居得能計之九國ノ力計ニテハ大義ノ功難成ト思フ所アリ九國二島ノ内ニハ將軍ノ城一ツモナク成テミナ將軍

ノ宮ニ屬シ奉リシ之懸リケレハ菊地時ノ變ヲモ見ヨカシ又九國ヲモ能治テコソト申ケル
 仁木義長降參ノ分ハ頼之密ニ人ヲ伊勢長野ノ城ニ遣シ仁木ヲ語ヒテ申ケルハ御邊ノ事故將軍ノ御
 時ヨリ大忠ノミ有テ別テ不義ナキ所ニ畠山入道同名ニテ候フ相州等カ倭ニ依テ讒ヲ專トシ押テ計
 ヒ申ニ依テ將軍其比ハ未若ニ御在ス故ニ不意貴邊ヲ怨敵ト定メ給ヒケル處也今ニ於テハ將軍猶後
 悔ノ氣色深シ貴邊又何ソ數代ノ大忠ヲ捨テ今亡フヘキ楠方ノ敵軍ト一味シ逆心ノ名ヲ末代ニ殘無
 道ノ禍ヲ子孫ニ被傳事人タル者ノ恥ル所之予又貴邊ノ爲ニ是ヲ歎ク一切之此故ニ隱密ノ儀ヲ以テ
 御邊ニ知セ申之早使ヲ以テ御降參有ルヘキノ由將軍へ申サシメ給ヘ定テ御免ノ有ナント申ケレハ
 義長ハ數年土岐ニ被圍ケルニ國司亦義長ヲ實ノ味方ニ仕給ハサリケレハ弊ニ乘テ國ヲ奪ント仕給
 ケレハ別テ義長カ便成如何ハセント思フ所ニ右馬頭ノ方ヨリ此事知ラセケレハ大ニ喜ヒ都ヘ
 忍テ使ヲ上セ道朝禪門ニ屬テ申入ケレハ兼テ右馬頭將軍へ執シ申シタル事ナレハ即時ニ御教書ヲ
 給ヒケル仁木大ニ喜テ即時上京ノケリ如元伊勢一國ヲ給ルヘキ由補任セラレシ之幾程無フメ死タ
 リケルコソ哀之世人皆頼之ノ謀ト不知コソ不審ナレ賢ク隱サレタルニヤ頼之又正儀公ノ方へ顯要
 齋ト云遁世者ヲ以テ申ケルハサテ貴邊代々吉野殿ニ仕へ主從ノ禮義不亂君命重フシテ尸ヲ戰場ニ
 捨給ヒシ已ニ二代往昔ハ左様ノ臣モ有ナンヤ當代ニ於テハ和朝ノ其中ニ是ニ類セシ忠臣ヲ不聞故尊
 氏卿大ニ感シ給ヘルコソ多カリシ然ト雖臣君ノ不儀ヲ見テ退クハ異朝ニ類多キ處也當世ヲ見ルニ今

ノ公家ノ御政ニハ御運忽ニ開ケテ天下ヲ治給ン莫先以成カタシ貴邊其不器ノ君臣才勇武ノ譽レ有
 ニ依テ武家立所ニ勝事ヲ不得天下亂事數年也人民百姓等手足ヲ置ニ所ナク春秋苦テ安キ時ナキ
 唯是貴公ト將軍トニアリ無道ノ迷君ノ方人シ給テ天下ノ萬民ヲ苦メ給ハンハ豈仁政ニアランヤ然
 ハ是非ヲ悔テ武家合體ノ思ヲナシ水魚ノ交ヲシ給ハ大和河内和泉紀伊ノ外ニ淡路阿波讃岐ノ兩國
 ヲハ某去リ渡シ奉ルヘケレノ此由將軍へ申成候ヘシ是山名大内介武家ニナリシモ是ニテコソ候
 ラハメト申遣シタリケレハ和田ノ和州恩地勢州安馬高安志貴丹下等宗徒ノ人々下館ニ集テ此事如
 何有ヘキト之誠ニ大事ナレハ諸人口ヲ開テ兎角ト申ス者ナカリケルニ正儀公各ノ顔ヲ一々見給テ
 何モ物ヲハ不言シテ良暫ク泪ヲ流シ給ヒケル滿座驚キ思フ所ニ良有テ申サレケルハ各是聞給ヘ
 當家ノ運モ早已ニ末ニ成テ覺エ候物ヲ其故ハ某シ今各ヲ請シテ此事ヲ評正シケル事ハイヤシクモ
 武家ニ降參シ一家ヲ榮ントニハ非ス使ノ罪過ヲモ定メ頼之カ方へ返事ノ趣ヲモ評正セン爲之然ニ
 各何ノ仰モナキハ心ノ中ノ御事コソ知ラマホシケレ武家ヨリ數ケ國ヲ與ント申シ來リケレハ京
 都降參又家ヲモ保テカシト思食ノ色顯レタリ各其氣色ノ有ンニハ向後軍ノコソモ叶難キモノニヤ某
 ハ父カ遺言ト云ヒ亦一旦命ヲ扶リ樂ニホコランカ爲ニハ不義ノ行ヒシテ逆臣ノ名ヲ後代ニ殘ント
 ハエコソ申マシク候ヘハ敵ト戰フマテモ有マシキソ傍ノ手ニ懸テ正儀カ首ヲ取テ京都へ出シ跡
 ノ樂ミ榮ヘラルヘシト申ケレハ興サメテソ見ヘシト之暫ク有テ恩地伊勢守申ケルハ今當家ノ人々

ノ中ニ和田殿ヲ始トシテ誰カ殿ヘ不義ノ行シテ逆謀ノ殺^(欲カ)ノ中ニ家ヲ榮ント存ル者ヤ候ヘキ某ニ於テハ先^(我カ)存亡ヲ當家ト共ニセント存ルノ外ハ他ナシ誰々モ左様ニコソハ被存スレ但右馬頭カ申ス所愚案ヲ廻ラシ候ニ其所以アルカトコソ存候ヘ其故ハ建武ヨリ以來當家ノ面々上下志ヲ同ノ故判官公遺跡ヲ繼謀ヲ以テ數度ノ朝敵ヲ退ケ^(年カ)勝^(年カ)ヲ得タリキ然ハ云ヘ^(年カ)朝敵所領ヲ望テ味方ニ與セント申ス者アラハ諸卿欲深フメ招キ給ハス聖運開クヘキ圖ヲハ度々脱シ玉ヘリ欲ニ深フメ仁政ナル^(耳カ)ハナク皆己カ事ヲ^(耳カ)可重ムメ爲國爲君ヲ思ヒ給フ行ハ一ツトノ侍ラス今ノ分ノ御政ニテ豈天下治ンヤ然ラハ當家忠ヲ盡サセ玉ヒテモ何ノ賞アラシヤ覺申セハトテ全ク殿ヲ捨某シ等一人家ヲ富サント思フニテ候ハス存亡ヲ殿ニ任セ奉ルノ上ニ御計ヒタルヘシト申タリケレハ人々實モト存色ニナン見ヘケル所ニ正儀公申サセケルハ某ハサハ不存候當家ノ本領ヲ省候ニ誠ニ少シキ^(耳カ)ニテコソ候ヘ良勢州恩地殿ノ今ノ所領ホトモ有ナンヤ其時御邊祖父左近太郎殿モ少職ニテ候ヘ和田殿本領何程カ有ン然ハ父ノ正成公元弘ニ大忠有テヨリ以來先祖ニ斷テ久シキ諸國ノ守護職ヲ玉ヒテ所領亦百倍ヲナセリ是君ノ御恩ニ非スヤ懸ル大恩ヲ忘レテ大逆無道ノ尊氏カ子孫ニ仕ヘテ家ヲ榮ント存亡ヲ君ト共ニシテ義ヲ一家ノ名ニ殘シテ末代ニ傳ント是非得失何ニカアル凡ソ一生ヲ觀スルニ春ノ夜ノ夢ニ同シ不久モノユヘニ不義ノ行ヲナシテ先祖ノ名ヲケカシテハ何ニカハ仕候ヘキ某ハユメ^(覺カ)不義ノ富貴ヲ好ミ候ハス抑勢州ノ義^(覺カ)不^(覺カ)左様ノ不義ヲ

進玉ハンニハ向行トテモ頼ナシ各ニ對シテ某カ心ノ奥ヲ殘スヘキニ非スト泪ヲ袖ニカケナカラ被仰タリケレハ和田ヲ始トシテ宗徒ノ者共最理ニ伏シ亦恩地モ最恥カシクソ思ヒケリトソ正儀公頼^(覺カ)カ使者僧體ニ非レハ押テ討タレケレ^(覺カ)僧體ト云ヒサスカ右馬頭ハ道ヲ嗜ノ心深キ人ナレハ敵ナカラモ情ナキ沙汰ヲハ如何ハスヘキ但兎モ角モ返事ヲコソセメトテ使者ニ對面モナク思地ヲ以テ云ハセ玉ヒケルハ仰先以承リ候又誠ニ仰ノ趣モサル^(覺カ)ナレ^(覺カ)退テ愚案ヲ廻ス所全ク其所以ナク候カ故尊氏ヨリ以來天下久シク亂テ諸人安堵セサルノ^(覺カ)尊氏直義兄弟奸シク天下ヲ奪ヒ玉フニ依テ之全ク楠ニ禍ナク又君ニ僻ナシ今天下ニ味方少キ^(覺カ)末世ノ風流欲ニ心ヲ寄ル者ハ多ク義ヲ重フスル者ハ少キニ依テ之風カニ聞頼之義ヲ專トシテ政道私ナシト云々何ソ逆謀無双ノ武家ニ與シテ道理ノ君ニ對シ奉テ弓ヲ引玉フ^(覺カ)夏^(覺カ)コソ心得ネ自今以後此儀ユメ^(覺カ)不可被仰越當家ノ^(覺カ)夏^(覺カ)代々義ヲ先トノサラニ私ナシト云々實ニ義ヲ重フシテ私曲ナキ古今無双ノ弓取ナルヘシ

此儀者今世ニ異說^(正脱カ)凡紛々トシテ有之予儀公ノ汚名ヲカツケ參ラセン^(正脱カ)コソ愁テ後世爲子孫之者

記之畢莫令他見矣

寛正元年庚辰二月

橘正胤謹書

この文を一讀しますれば、少しこの時代の歴史をしらべたものは、いかにも不思議に思ふ筈なん
であります。と申すのは先づ楠木正儀の人物を申しませうならば、父の正成兄の正行とは違ひま
して、決して單純の武人ではありません、武人と申さうよりは、むしろ政治家でありまして、固より
武將として仕事の出来ること勿論ですけれども、又政治向きのことにも随分技倆のあつた人と見
られるのであります。例へば正平二十二年（貞治六年）に南方と北方との間に御和睦の話があ
りましたが、その時分に南方を代表して掛け合つて居りましたのは正儀でありまして北方を代表し
て談判致したのは佐々木道譽であつたのです。その證據として二三の記録を引いて見ませうな
らば、中原、師守記に、

今日○貞治六年四月二十七日自南方洞院前大納言實守進狀、外記補任出來付此使可被進云々彼使者語之、御合
體治定、仍自南方 勅使葉室中納言光資卿別當今朝上洛、宿ハ五條東洞院但馬入道々仙宿所云々
今日○四月廿九日申刻、南朝 勅使葉室中納言光資卿別當參向武家第、依和睦治定也、（略中）鎌倉前大納言

○義 於寢殿對面云々、（略下）

〔頭書〕後聞、南朝繪旨持向拜見之處、□降參□□降□□互□損氣、不及是非問答云々、大樹所
存以外參差、□□合體之儀破了、佐々○木大夫判官入道々譽突鼻云々、爲之如何、

傳聞、今日○六月八日楠木代官河邊對面鎌倉前大納言、南方和睦之故歎、引出追以安東被送遣云々、

今朝○七月廿九日攝津掃部頭能直爲武家使節參南朝若黨十餘騎着行騰云々、

傳聞、今日○八月九日攝津掃部頭能直自南方歸洛云々、於南朝料御馬一疋引賜之、楠木無對面、鎧一漿

束馬一疋引之、和田馬一疋腹卷一引之云々、

今日○九月十六日午刻、家君○師着衣冠出給、（略中）參向洞院前大納言實守北野在所給、亞相被對面申、

去月下旬之比自南朝出京、是家門事爲被申所存也云々、南方邊事被語申云々、合體之儀也云々、

この一段の記事の骨髓は四月二十九日條の頭書にあること一讀して明白であります。然る處が不幸
にもこの頭書の處は著者自筆本の紙が何かの原因で痛く傷みほ、けて丸で綿のやうになつて居て、
精密に文字を拾讀してみましても上に出しただけよりは讀めませぬ。押小路家の寫本にはこ
の貴重なる頭書が頭からありませぬ。昔から讀めぬものになつて居るのでせう、誠に残念な事であ
りまするが致方がない。

佐々木高氏入道道譽は當時極めて評判のよかつた武人でした、又政治家としても中々やりてであ

つたと見えます。後愚昧記に道譽の死んだときに

當時於武家聊敬佛神知道理者也、可惜々々天下衰微之第一也、

と惜んで書いてあるのである。尤もそれもその筈で、道譽の歌は新續古今集に載つて居ますし、嗣子なる高秀が父の肖像を畫かせまして、父の贊を覓めましたときに、

高秀寫陋質覓贊、乃敢書其上、參評不悞、遺德於陰、風生叱咤、月出哦噓、雖乏才望、堅持貞心、

時或汗隆、斯文不沈、立身戎馬、掃清零蠶、小子圖我、孝義效參、齋心克祭、予神必歆、前廷尉

導譽自題、時貞治五年六月一日、

と臆面もなく自賛しましたのは學識器量に於て自分で恃む所が確にあつたからでありませう。楠木正儀の學識器量に就きましては直接の證據を一向存しません、要するに相應に出來たと思はれます。何にさま道譽と對等の任務を仰付けられました位ですから、然るべき技倆があつた筈であります。

然るところが、この時南方より御仰越になりました條件は頗る重大でありまして、不幸にも唯一の史料が上に述べました通り、傷んで居りまして完全に讀むことが出來ませんから、はつきり申上げる譯には參り兼ねますが、兎に角「降參」など申す言葉が明白に讀めまするし「互□損氣」など申す語も同様明であります。或は降參の儀式を備へて南方の天皇を迎へ奉れなど申す葉室光

資の談判であつたかと思はれます。又楠木正儀の從來の懸合方針は、まさかこれ程まで切込む積でなかつたらうかと存じられます。兎に角談判は不調に終りまして、楠木正儀が困り切つた有様は「楠木無對面」の一句で善く描いてあります。

やがて十二月七日將軍足利義詮薨じまして、嗣子義滿が同じ月の晦已に將軍職に就きましたが年齢は僅に十歳で、萬事は細川頼之が後見致したことであります。續いて翌年三月十一日に後村上帝崩御になりました、長慶帝御立ちになりましたが、和睦談判の衝に當りまして、遂に失敗致しました正儀は、この際に一身を處するにつきました非常に困つたことは明瞭なことであります。細川頼之が正儀の立ち場に困つて居る所に附け込みまして、首尾よく之を説き伏せまして、北方へ參らしめたのであります、正儀が北方へ入朝しました有様は一二の記録に據り、よくわかります、左に之を申し上げます。

三條公忠の後愚昧記 應安二年三月廿二日條に、

傳聞、南方楠木判官正儀與南方向背、隨而一族又離畔之間及合戰、正儀被退出館引退天王寺邊云々、彼正儀自去年、降參當方之間、執事相催軍勢等欲救正儀云々、

又花營三代記に、

二日○應安二年正月 楠木左兵衛督依可參御方之由申之、被成御教書畢、

七日^{〇二} 楠木參御方之由令相觸和泉河内兩國云々、

十六日^{〇三} 爲楠木合力赤松大夫判官入道等差向南方、

十八日 細川右馬助以下爲同合力差向南方、

廿日 子時 楠木引退天王寺之由申之、

廿三日 酉時 同引退榎並之由申之、赤松大夫判官入道自天王寺同引退云々、

二日^{〇四} 楠木左兵衛督正儀上洛同夜管領對面

三日 夜楠木御所對面、

同日^{〇廿} 楠木下向河州十七箇所云々、

一日^{〇應安三} 和田以下寄楠木要害合戰、後日頸九上洛云々、

當時の確實なる日記に據りますれば正儀が北方へ參りましたことは、かくの通り明白なる次第であります。正儀が北方へ參りましたして何事を致して居ったか、その邊のことは委しくわかりませんが、つまり北方の爲めに河内和泉の兩國を鎮撫しやうと試みたことに相違ありません。現にこの頃の楠木家の文書は大分傳はつて居るですが、和泉國に居りました一族のものは、建徳二年以後は正儀のために和泉國を治めて居る姿に見えます。即ち橋本民部大輔正高と楠木伊豫守正顯が主として代官をつとめて居つたやうであります。河内國におきましてはいかゞであつたか、よく事情は

知りませんが、多分和田が押張つてやつて居つたことであらうと思ひます。一族が離畔しまして合戦に及んだなど申すのも、畢竟和田が一方のかしらに立つて反對致したのでありませう。

この間に細川頼之は頻りに正儀の後押を致しまして、河内の經營を心掛けて居るやうであります。不幸にして執事を辭職しなければならんせ、ばにつまつて來ました。近衛道嗣の愚管記に左の如き記事があるです。

曉更人告參云、大樹并管領相共俄赴西芳寺、人不知其故云々、驚聞之處、無程皆歸洛云々、天明之後相尋子細處、南方連發軍士等不隨命不渡河之間憤怒之餘管領爲遁世赴西芳寺之由風聞、仍大樹馳

向制止相伴歸洛云々、^{〇應安四年五月二十日條}

凡渡河事、爲沙汰置楠木正儀於河内國、軍士去比發向、然而正儀更非可安住河南之勢云々、仍渡川無要之由軍士等皆存之云々、頼之一身骨張、仍及如此之儀云々、此事諸人頗奇云々、^{〇同日條裏書}

傳聞、相模守頼之朝臣有違所存之子細歟之間、辭重職可令下向四國之由申暇之間、將軍再三止之、猶固辭之間、行向相誘之間、可罷止之由令領納云々、或云、是春屋味尙歸住嵯峨事、人々有籌策之旨之由、頼之聞之令鬱結云々、^{〇應安五年九月二十六日條裏書}

かやうな次第で、頼之は一旦辭職を思ひ止まり、相變らず河内國の經營をやつて居りましたが、遂に永和五年閏四月に至りまして、到頭京都を没落することとなりました。その没落の状況を參考の

ために御話をするならば、かやうな次第である。愚管記に

今朝大樹向花亭、未刻世間鼓騷、武將召集勇士於花亭云々、人不知子細云々、武藏守賴之朝臣下國之由、内々有武命、是諸大名存異議之故歟、酉刻賴之朝臣兄弟親類等悉沒落、不及向打手、然而兄弟郎從等宿所四五ヶ處放火了、自去春之比諸大名存異議之由風聞、大樹一人最負剩連署異議之輩及嚴寧之沙汰了、而今又如此、定有子細乎、

傳聞、賴之朝臣昨日出家於京都、請等持寺長老遂其節以與下國云々、

或人云、雖爲出家儀實無其儀云々、○永和五年閏四月十四日條

後愚昧記に

未刻武士等多上邊へ馳上之由路人稱之、仍開富小路西門見之、白河等方軍兵數萬騎一條西行万里小路北行大樹上亭今出川邊號花御所事出來之間馳參之由稱之云々、分明無其說、大樹兄弟時在彼所云々、武士等圍繞之聊不入人云々、在京大名等無殘者云々、酉刻許南方有炎上、武藏守賴之朝臣宅以下放火皆以沒落了云々、賴之朝臣勢三百餘騎云々、大樹以使者可退出京中之由仰遣之云々、佐々木大膳太夫高秀并土岐伊與入道等以下一揆衆所行也、大樹同意之由或稱之、或又大名等圍大樹宅強而不可令追討賴之朝臣之由稱之、兩樣說不一決之、但多分說大樹沙汰之趣也、後聞今夜着西宮攝州云々、爲赴四國歟云々、賴之朝臣親類雖一人不相殘者也、後聞賴之朝臣宅不放火、人多群集壞取云々、○永和五年閏四月十四日條

事情かくの通りでありますから、かの人生五十愧無功の詩の意味がよくわかりませう。然るところ永和四年より五年にかけての冬に、已に和泉の國におきまして、軍が初まつて居りまして和泉國の南方の主將は、さきに申上げました橋本であります。この邊より考へますれば、已にこの頃正儀は南方の古巢へ立歸つたものと思はれるのであります。正儀が南方へ返つたのを通常天授六年、即ち北朝の康暦二年であるとしてありますが、私は恐らく左様でなからうと思ふ。細川賴之が到底自分の地位が持ち切れぬやうになつて、義滿と雖もはや同人を後押ししりぞききれなくなりかゝりましたのが永和五年の春のことでありますので、恐らくこの頃北朝を立去つたのでなくてはなりません。これは賴之と正儀との關係よりして考へまして、かやうに見ませんければ辻褄が合はぬのであります。まして從來和泉國に於て正儀の代官をして居りました橋本家が南軍の總督となつて和泉國で戦つて居るのであります。是非正儀の命令によつてかやうであると見なければなりません。すまい。

されば楠木正儀が北方へ參つて居つたのは全くの事實でありまして、その何故にこゝに至りしめたかと申すにつきましては、いろいろ込み入つた政治上の理由があることと考へられます。例として引きました正儀公事實書などに書いてある様なことは當時事實として實際無かつたのでありますし、又正儀の人物からして見ましても、所謂事實書などに申すやうな道學者風の人などではな

かつたのであります。この邊のことは史家は大抵知つて居るのでございませうけれども、とかくに史家の申すことを信じませんで、自分一人の臆説を喜んで居る人々が世間にないではありませんから、かやうなる記録の贋物があるといふ一例として出したのであります。

四、傳説雜説。

次に傳説雜説の類に至りまするといふと、實に、^せ物の多いものでありまして、故意に製造致しました雜説は、いづくの國へ参りましても山のやうにあります。普通に言ひ傳へて居ると申すもので傳説とか雜説とかの部類に入るべきものは、故意の製造物でありまして、真正の昔より傳はりました話と申すものは實に僅より無いものであるのです。

本邦におきましてこの類の話が到る處にございませうのは、少しも珍しくございませぬので、世界いづくの國へ参りましても左様なんです。これも一つの人情でありまして、何か面白をかしい昔のはなしを傳へておきたいものでありますので、何か話を拵へると意を迎へて之を信じまして、更に知らず識らずの間に之に尾緒を附けまして、口から口へと傳へて参るのであります。その手近い一例を挙げまするといふと源義經が本邦を脱走致しまして、更に外國へ参りまして更に大事業を致したといふ話などがありまして、これなどは一向御話にもならん馬鹿馬鹿しい話なのであります。

信じて居る人があるのです。

義經が衣川を脱走して更に北へ逃げたと申すことは、衣川の土地のものが少しも存じませぬ説であります、ひとり存せんばかりでない、現に平泉には義經の記念堂があります。これは伊達綱村の命によつて建てましたもので、もと義經が腰を掛けて腹を切られたと申傳へた石があつたさうでして、その石の上に堂を建てたんださうであります、今も堂を毀つて見たらこの石は出づべき筈である。又最上街道の岩ヶ崎の山奥には、義經の胴を葬つたと稱へる墳墓がありまして、記念の爲に八幡の宮か何かと立つて居ります。そして義經松前落の話は、奥羽觀迹聞老志に常陸房海尊が仙人となつて平泉の山中に現れ清悦といふ土地の老人に申し聞けたと云ふ物語に初めて見えるので、その年代は、彼の廣大なる多賀城趾の南隅今の多賀城村大字市川のある地點に於いて古い碑石を發見し當時専ら壺^{つば}と^{いし}呼んでました碑文を拓つて來たのを寛文八年九月十七日林鶴峰が一見した記事があるが、この物語も恐らく壺碑の出現と同時代の製作であらうと存じます。又津輕家が昔大浦と申して、まだ微々たる田舎侍でありました時分に、義經が没落して参りました時分に之をかくまひまして到頭首尾よく松前へ落した、その時郎等の一人が死んで、その首を鎌倉へ送つたといふ記録があるさうですが、これも我等は實物を見たことはないが、疑もなく贋物か、さもなくば荒唐不稽の雜説を書き卸したものであります、即ち製造した記録であります。

又北海道の十勝でありましたか、その邊に義經の宮がありまして、古くよりアイヌどもが記念のために建て、置くものとか云ひますが、これはあたまから無いことで、アイヌはあたまから源といふ家のことも義經のことも、知らないであります。他に北海道にある義經の記念堂などは、皆明治以後のもので、ものすきの手合が作ったのであります。況して滿洲邊あたりへゆきまして、義經の遺物などがあらう筈なく、又實際會て發見したことがないのであります。蒙古地方に至りましても同然で、義經の遺蹟はおろか、日本人の遺蹟を發見したことがありません。されば實際の土地しらべをして見ますると、譚はなしに義經が驅けずりまわつたと申す處には何等の遺蹟も證據物件もないのでありまして、却つて義經の終焉地たる平泉には本人が死にました遺蹟が残つて居るのであります。又世間の人がいろ／＼申すに拘はらず、平泉の土地のものが今日に至りますまで會て義經脱走のことを存じませんのは殆んど不思議なやうである。そこで義經が方々へ參つていろ／＼の事業をしたとか、あるひは有名の帝室の元祖となつて居るといふやうな類の話があたまから滑稽なることは申すまでもないことであるに、とかく人々が云ひふらしたがります。

すべて雜説とはかういふもので、面白いから云ひふらすので信じていひふらすのではありません。いはゆる一席の茶話で、座興のためにしゃべるので、眞理を研究するために述べるのではありません、言葉を換へて申すならば、かういふ風な雜説を眞まことに受ける奴やつが馬鹿なので、又世間に眞まことに受けるも

のがあるからとてや、きとなつて反對する史家は尙ほ更馬鹿でありませう。我等なども、それですから平常は、かういふ雜説などを駁撃いたしません、今は研究法の講義ゆる、已むを得ず申すのである。

左にあげまするのは、この類の甚しい一例であります。

(前略) 推古天皇御宇三韓襲來戎人八千人鉄人爲大將來然者伐ニモ射ニモ更ニ不叶以人糧食ス筑紫九ヶ國之者禦ニ手ナシ向者被殺或山林逃隱搥打向者少中西國マテ攻上ル爰益躬夷敵退治之事家之先例承勅命殊益躬者弩藝達人武略ノ名譽有之異國改名 造貢五年戊午歲巳ニ九州發向ノ見方味方一人モナシ詮方盡テ俄ニ知謀ヲ設テ先降乞申様、我生ナカラニシテ得武藝ト云へ共日本武將劣識ニノ不知之去レハ日本ノ住居懶候御手ノ奴ト成テ忠ヲモ致恩顧ヲ蒙ハヤト存候殊更日本ハ山嶮シク水深、無案内ノ人輒可透地ニ非ス我等案内ヲ知り先引可申云ケレハケニモ相好恰利ニノ諸藝ヲモ可將器量也トテ即降ヲ赦ス彼鉄人之馬ノ先ニ立テ打上ル程益躬如何ニモ近付伺ヒ見ニ鉄人ト云凡肉身ナクテハ働ク事ハ不可有見出程成ハ討取テ達本意色ニハ不見心中祈誓佛神行程播磨明石浦着ス此處ヨリ陸地ニテ風景面白處ナリト云ケレハ實モトテ舟ヲハ室津高砂留テ馬共追下打登ル程ニ蟹坂ヲ越彼坂ハ上レハ下坂ナレハ須磨明石浦傳風景餘リニ勝タル處ナレハ鉄人乘興足舉ケ馬ヨリ遠見ノ彼(下敷)ハ何レ云處ソ是イカニト問ケルヲ答体ニテ願レハ足ノ裏ニ眼有誠神明御告ヨト思ヒ袖下ニ

隱持タル矢也名掃鬼以今度亦舉處ヲ抛矢被投ケレハ不誤(ニカ敷)ヲ頸迄徹ケレハナシハコロウヘキ馬
 ヨリ眞倒落タリケル此時迄出江橋立云益躬ノ被官ノ有ケルヲ課頸ヲ刎是ヲ指上レハ夷國ノ習ニテ
 大將打タルレハ士卒皆自殺スト云々八千の戎人悉ク自害シケリ少々殘黨共ハ只忙然逃方モ不知迷
 ヒケルヲ日本者共須磨垂水ツアタリ迄逃延タルヲ招寄夷賊悉切捨ラル餘多切程打物モホトヲリ返
 テ切レネハ少々降ヲ赦シヨウロ筋ヲ斷テ海邊ニ放チタリケル其子孫適々存スル者西海ノ大濱ノ成
 海十垂釣漁捕ヲ專トシ命ヲツナキケル号宿海自上古當家河野ノ家人ニ被定四國ノ地ノ殘徒共
 濫妨シケルヲ益躬下向有テ被追伐其被切捨タル和介郡三津ノ北ニ鬼ノ谷ト云ヘリ又播磨大藏谷
 ノ西ニ三嶋大明神御坐ス躬此時御勸請ト云リ其時矢此社ニ于今ニ在之伊豫國ニテハ鴨部大神ト
 號ス伊與皇子ヨリ十七代也異說大三嶋社巽角若宮也トアリ益躬ノ子ヲ武男ト云其子ヲ玉男ト云其
 子諸飽其子万射其子守與ト云フ天智天皇ノ御宇ニ勅命ヲ承テ新羅國趣給堺目迄三ヶ年逗留有ケル
 抑茶碗爲定器一夏何時ヨリノ夏ソト人問ハ此守與御代ヨリト答フヘシ先ハ權化ノ体ニテ朝夕木
 具十器ヲ用其ヲモ二度トハ不用然此時遙遙異國ニ滯留有シカハ從本國用意分ハ船中ニテ盡海上
 ニテ作夏不叶仍唐土茶碗土器也トテ用之自爾以來處々用來也併漆器嫌ニアラス烏帽子武具等
 何漆器ニアラサルヤ只當家ハ近來迄權化体ニテ住着忌ケル也只潔齊(齋)ヲ爲專サレハ贊殿御飯ヲ盛者
 モ覆面ヲ垂テ水火ヲ淨ケルト申傳タリサレハ近比迄モ御食殘ヲ戴忽病除奇特不思議有申傳ケリ今

人ハ依不信御威光衰ヘ口惜ケレ不淨ナラバ失錯可多能々可慎夏也此守與迄ハ朝敵ヲ退治スルコ
 三ケ度也守與子玉興(與脫カ)散位伊大夫人王四十二代文武天皇ノ御宇大化五年己亥役優婆塞葛城山ニ久米岩
 橋懸トテ諸神ヲ呪寄一夜中ニ可渡約束有ケルニ不渡得夜明ケレハ行者怒ラレケル夏有哥ニ云岩橋
ノ契リモ斷ヘシ明ルヲヒシキ葛城ノ神ト云モ此心也諸神腹立メ行者ヲ讒奏申ケレハ御逆鱗有テ行者ヲ流刑ニ被處玉興行
 者過無由陳申サレケレハ同罪ニ被成ケル去程玉興行者同途有テ攝州ヘ下給難波邊ニ流浪シ玉昔
 ハ王命重故ニ勅勘之人ナトニハ舟借ス人モ無リケレハ徒ニ徘徊セラレタリ依其此處ヲ三島江ト云
 サテ行者ハ何方ヘ行玉フヘキヤト問玉ヘハ伊豫國ニ見島有彼處ヘ便船ヲ可尋ト宣フ伊豫見島ハ加
 茂領也行者加茂ノ再誕也其儀カト覺ユ其時迄ハ攝州中島ハナシ此邊迄海岸ナレハ常ニ唐船ナトモ
 着ケル故唐崎ト云ヘリ此ニ于時唐船二艘ハ此岸ニ着テ見ヘケル玉興立寄給使船乞給ヘハ一艘ハ安
 程ノ御事ナレモ國ニ入テハ國ニ隨フナレハ勅勘人ニハ如何ントテ不借今一艘ニ御佗言有ケレハサ
 テモ御頼アルコソ承ハレ甲斐ナク飯申哉ト領掌シ廳而纜解兩人ヲ乗セ漫々タル西海ヲ指テ漕出
 玉フ津々浦々ニモ勅命ヲ恐レテ寄サリケレハ水渴苦シム間備中ノ沖ニテ玉興御弓ノ弭以テ海潮ヲ
 廻シ此内水成ヘシ吞テ見ヨト宣ケレハ船舉テ是ヲ吞ケル即清水也各渴止蘇生ノ心地シケル其ヨリ
 此沖ヲ水島ノ渡ト云此時玉興船主ニ向テ云是程難義極タルニ思ハサル便船ニ依テ今存命セリ希代
 ノ縁也サテ御身ハ何ノ國ノ何ナル人ソト問ヒ玉ヘハ船主畏テ承リ候我ハ唐土越ノ國ノ者也我母ハ

遊女成カ一年(衍カ)トセ日本ヨリ蒙古退治ノタメニ御渡リ候大將軍伊豫大領守與ト申ス人我母ヲ御妻愛有テ程ナク懷妊候シニ守與御敵ヲ退治シ御飯國ニテ母ハ越國ニテ二子ヲ儲候(一本以下冊字マナシ)「日本ヲ戀忍ヘ共甲斐ナク年月ヲ送也母サヘ逝去スル間」孤子ト罷成越國ノ住居モ懶様々思立此地ニ着候得共案内不知可尋寄人モナク唯徒ニ日ヲ送ル處ニ便船之儀承候間進ラセ候辭退申ツル今一艘ハ我カ兄ニテ候父御前ニモ奉逢諸共ニトコソ契リ候シカハ今我ヲコソ被待居候ハントテ跡ヲ返リ見テ涙ヲ流シケル玉與ハツク(以下下冊マナシ蓋脱文ナラン)ト聞玉ヒテ扱ハ我弟也何驗有ト宣ヘハ御重代ノ物トテ御劔等其外御手跡ナト有トテ「取出シ懸御目ケレハ無疑守與御手跡也誠ニ宿縁潤熟」相逢夏モ併テ曩祖ノ御引合ナリ我年老ス無可讓子所詮一跡ヲ令相續トテ讓國家堅御契約アリテ小千ト云ヘハ元祖ノ御諱也非無憚是モ亦越之人ニ縁有テ令繼故越智ト云ヘシトテ音ヲハ前義ニテ字ヲ改テ越智ト申ケル亦名字無テモ叶マシ只今探得ツル水伊豫國高繩山ヨリ流出シタル水ノ末ナリ彼高繩山觀音薩埵之靈驗之地也當初十六人ノ天童彼所ニ來遊シ玉フ即三嶋大明神十六王子ノ靈跡有也新宮ト號ス其窟下ヨリ流來水也我奇瑞有テ是ヲ知レリサテハ彼水上ニ可住然者水ヲ可予里ト云フニ文字ニ成河野ト名クヘシ依之其所ヲモ河野ト云也(下)〇得能本略豫章記

この他之に類似しました面白い雑説は澤山ございませうが、中には我等の間では遊歴雜説と稱へて居りますものがございます。それは一つの地方、又は一つの民族に限りませんが、一般人類

の面白いがるやうなことを述べましたもので、縁もゆかりもない諸國民の間やら、連絡も何もつかぬらしい場所にも往々にして同一の話を傳へてあるのです。例へばシベリアのツンドラ(昔類の生えた原)の中に住つて居るサモヤ人や、デンマルク人や、スコットランド人や、スウイス人やらが同一の話を申傳へて居ります。これらは何れも皆鳥渡連絡もない地方でありまして、又國民としましては縁もゆかりもないのであるが、それにも拘はらず同じ性質の話を傳へて居るといふのは、即ち一般人類が興味を感じる話をいづくに於ても考へ出すものであるといふことを證明致すのです。かやうに方々にありますゆるに、我等は之を遊歴雜説と申すのです。言葉はあるひは當りませんが知りませんが、名稱としてはかく申すのであります。スウイスの愛國者として有名なるウイレルム・テルの話は即ちこれでありませう。

五、逸話。

尙この類の材料に逸話と申すものがあります、纏まつた長い話ではありませんで、手短であつて、それで興味のある説のことでもあります、何様手短かなことではあり、面白くはあり、聞くものは大に愉快にも感じ又たためになるとも心得るから、とかくに世間の人に歓迎さるゝ性質のものであります。逸話が世間の人に歓迎せらるゝのは、決して日本ばかりでない、世界の各國いづくに參つても皆さやうであるが、しかし殊に本邦やシナに於てはいたく賞美さるゝので、それも教育家が子供

を教育するのに、教訓のよき材料であると心得まして、唯原則のみを申述べましたのでは、とても子供のあたまにはいりませんから、歴史上のたしかな話であるかの如く申述べまして、永く子供のあたまに止まらしむるやうにとて申すのならばよいが、まじめな史家が實際眞實の話であると心得まして、喋々とこれを書きたてます。そこで話は甚だ面白くなりませうが、困ったことには、出来ました歴史は甚だねうちがなくなるのであります。

逸話はその性質としましていづれも皆ありうべきことであるが、實際あつたかどうか、その邊の證據を擧げるのは甚だ困難なことであるのです。このありうべきことであつて之を打ち消すことがむづかしいと申すた、ちの話は、史家がまことに取扱ひに困りまするものでありますので、まじめな史家は何れもかやうな類の話をば眼中に置きませんで、研究を致して置きます。史家が材料として用ひまするものは、實際の證據の上ることではなくてはなりませんこと、ありうべきことであるとして参考する譯では更々ないのであります、それ故にかやうな話を眼中に置かぬのであります。固より史家は自分の研究した事が教育家の材料となるか否かなど申す事を頭に持つて居ない、それゆゑにかうなるので、世の史家が教育家が大切に於て居る逸話を一向平氣で看過するのを甚だ教育に冷淡であると世間の人々より怒られては甚だ迷惑である、畢竟するところ御門違ひの非難でありませう。

逸話といへばよくわかつて居つて、別に實例をあげて説明を致すほどのねうちのものでもありませんが、まづ念のため、こゝに一例をあげますれば、先づかやうな話である。

神聖ローマ帝のカロロ五世と申すのは即ちイスパニア王のドン・カルロス一世のことでありまして十六世紀の有名なる君であります。この方は非常の政治家でありまして、一生腕限り天下を切りまわした方でありましたが、晩年にその位を太子にゆづられまして、御隠居なされました。それで御隠居のことゝて別にきまつた御用がありませんので、恰かも日課の様にして時計をいぢりまわして居られたのであります、と申すのは何遍直されても、とかくに時計が狂つて仕方がないので、そこで日毎に御居間の時計の修繕に苦心して居られました。かくの通り何程あせられてもどうしても時計が思ふやうにならぬので、遂に嘆息していはれたのは、おれが一生天下を切りまわしてまたの國民を己れの思ふ通りにはたらかせやうと思つて居たのは今思へばひどい間違ひであつた、この無心の時計でさへ、かくの通り自由にはならぬのであると嘆息せられたと申す話がある。

これはいかにも面白い逸話でありまして、世の帝王がたに對しまして實に結構なる教訓でございませう、しかし甚だ信じがたいのである。無論ありうべきことには違ひありませんが、證明することも出来ませんければ打ちこわすことも出来ぬのであるですけれども、大體よりして考へて見まするに、頗る覺束ない。時計はいかによい時計でも狂ふにきまつて居りまする、狂へば直すのみのこ

とである、丁寧に修繕をしてゆけば、いかに狂ひやすい時計でも直らぬ筈はございません、これは面々経験で以て知つて居ることであります。生きて居る人間を自分の思ひ通りにしてゆかうと思ふよりは狂ひ易い時計を修繕する方が容易である、時計が狂ふ如く人民が狂ふといふ事實は普通の人でもよく知つて居ること、賢明なるカロロ五世が、これしきのことを御存じない筈はない、これは必らずつくり話でありませう、しかし鳥渡聞くと中々面白く聞えます。本邦の畸人傳やら、近古史談などに載つて居ります話は皆この類のものでありまして、晝寝の友に致すには甚だ面白いですけれども、とても畏まつて讀むだけのね、うちのある話ではないやうである。も、も、も、これは史學の眼からして申すので、教員が學校におきまして子供への教訓として話を致しますのならば、われらも決して異議は挟みませぬ。

又この逸話に次ぎまして、とかくに人をあやまりやすいものは覺書の類であります。

六、覺書。

覺書と申すのは、過ぎ去つた世の中のことを己れの記憶のまゝに書きつらねましたものでありまして、とかくに己惚やら駄法螺やらが交つてならんものである。又まじめになつて筆をとりましたところで、人間に免れませんかところの記憶のあやまりといふものが必ずはいつて參ります。人間のあたまといふものは少し考へて見れば誰にでも直ぐわかることですが、いかにも意氣地のないも

ので、世間の人にな、みに思つて居るやうに正確にはたらく器械ではございませぬ。すべて器械類は込み入つて居れば居るほど益々狂ひやすいもので、いかに精密なものでもやはり狂ひます。

人間のあたまもやはり狂ひやすいもので、しかも非常に複雑なるものであります、今日の學術の程度によりまして、人間の腦の研究は頓と出來て居りませぬ、極くの大ざっぱな分析さへも出來ませぬ、と申すのは、生きて居る人間の腦を取り出して、分析せむとすることに己に變質します、人間を生かしておいて腦の分析が出來ればいざ知らず、それが出來んでは腦の分析は出來ぬのです。かやうな込み入つたむつかしい器械でありますで、狂ひがちであります。それゆゑにものを見ましても聞きましても必らずあやまちがはいつて來ます。このことは理化の學を少しでもかぢつたものは誰にも知れることで、理科の觀測のあやまりは承認せねばならん、現に觀測したものを書き立てむとするとき已にさうである。まして、之を腦に數年又數十年も蓄へて居りまして、遙かに後になりまして、腦に残りましたる印象より之を復舊せむとします時には、どれだけの間違ひがあるか、殆んど測られぬのである。

ゆゑに誠心誠意を以て書いてもあやまりだらけのものであります、まして己惚は誰にでもありますし、人によつてはとかくに駄法螺を吹きたがる。さういふ弱點があるからして、筆をとる時分には何をかいたやら、殆んどわかりませぬ。そこで覺書の類は頗る危険な史料なのであります、

迂濶に採用の出来るわけではないのである、いかた豪傑が來やうが、いかな學者が來やうが、オイソレとては出せませぬ。かやうなる覺書を證據として採用しやうとするには必らず制御の道を考へて置かねばなりません、又わけもなく制御の出来るものであります。

わけもないと申すは、確實なる當時の日記がある、若しくは當時の古文書が歴々存して居る筈であるから、必らずしもかやうな覺書に依頼する必要はないのである。もし又萬已むを得ざる際に採用するとしても、古文書や日記のゆるすかぎり採用するのであります。

これも亦逸話の如く、本邦やら支那におきましては、とにかく史料として人が喜ぶた、ちのものではありません、それがためにひどいあやまりを傳播していきません。ヨーロッパにおきましては、本邦におけるやうに覺書の類を大切には致しませんが、採用することもないではない、しかし採用するにしても本邦の如く重くは見ませぬ、注意して採るのであります、危険な史料として居ります。

七、系圖。

いかなる史料でも贋作をすればいくらでも出来るですけれども、ことに贋作されやすいもの、中に似せ系圖を數へて宜しうございませう。似せ系圖をつくる意志は、似せ古蹟をつくるのと全く同一で、つまり己れの家に由緒をつけんがためであります。尙ほこまかく申さば、由緒をつけるのにいろ／＼の料見がございませう、あるひは財産を得むため、あるひは名譽をえんため、あるひは

學術を銜はんがため、尙その他いろ／＼ございませう。

本邦の似せ系圖の多くは、三百年この方できたもので、江戸幕府のかたまりました時代に、政府が人を用ひまするに門地を重んじまして、由緒のある家柄の人ならば拔擢しまするし、さもなければ社會に沈淪させて置くといふ有様であつたので、それが系圖を贋作することを間接に奨勵した姿となりました。江戸幕府の初の頃でありますると、まだ／＼戰國の人情で面々皆己の器量づくでた、いき上げたのであります、何れも己の技倆を誇つて、素生などといふことをあまり鼻にかけないことなのであります、世が泰平になつて來ますといふと段々何か金箔をつけんといけないことになりまして、こんなことが出來はじめたのである。言葉をかへていふならば、本來金無垢なら丸出しで少しも恥づるに及ばんが、泥づくねの人形だから仕方がありませんから、金箔でも附けねばならぬのでありませう。つまり人格が落ちましたから、かやうな弊害を生じたのであります。

この似せ系圖なるものはいつくの國へ參りましても極く古くよりございしますが、本邦におきましては随分古い時代にもあつたにちがひはありませんが、三百年このかた殊に甚しいと申すだけのことです。實例は別にあげる必要は認めませんから、唯これだけの御話をしてやめます。贋作につきましてバラ／＼のお話は、これくらゐにしておきまして、こゝに眞贋の鑑定につきま

して大體の心得かたを申上げませう。

一、まづ史料の外形を見まして、それが已に定説のあります同時代同場所の確實の品とよく合ひまするや否やを見ることでもあります。

二、次には史料の内容に立ち入りまして、同時代同場所のたしかなる品と合つて居りまするかかゞかしらべます。

三、内容に次ぎましては、史料の示して居ります大體の精神が、その時代の姿にはまゝるかいかゞか考へまする。

四、最後には取調べて居ります史料に何かつくりあげたらしく思はれる痕跡をあらはしては居ますまいか、穿鑿します。

眞實の鑑定の要點はこの四箇條に盡きて居るのであります。地理、建築物、器物より日記、古文書、系圖、傳説の類に至りますまで、皆この四箇條の標準によつて研究致すのです。

そこで第一の心得方は、外形大體の穿鑿でありまして、ものを一見しまして鑑定を附けるときのことでもあります。即ち形式を見るのでありまして、書籍でありますならば、紙はいかゞ、書風はいかゞ、言語文章はいかゞなどと大體に於て眼を注ぐのであります。本邦にありまする似せものは、十中の八九まで至つてまづいつくりものでありまするで、この第一條の心得かたのみで大抵

は馬脚をあらはします。

第二の心得かたを適用しませんければならんと申すのは、大分にむつかしい場合でありまして、これはたゞの鑑定家では、とても參らんことでもあります、史家でなくては實行することの出来ません心得かたであります。たとへばどういふことであるかといふに、もしたしかな品であるならば、せひともあらはして居なければならん精神を抜かして居るとか、あるひはもし作者が同時代の人であるならば、せひ參考して居るべき筈の他のことを度外に付して居るとかいふ類のことを見るのであります、よほど深い歴史事實の知識を豫定致して居るのであります。

第三の心得かたに至りましては、一層適用がむつかしいのであります、普通に申す時代の精神、即ち我等の申す當時の社會心理を豫^{あらか}じめ研究した人でありませなければ、用ふることの出来ぬ心得かたであるのです。然るところこの一つの時代の社會心理を呑み込んで居ると申すことは容易のことでないであります、唯深く研究をしたといふだけではいけませんのでその人のあ^たまが極めて冷靜で極めて機敏でありませなければ達せられぬ域であるのです。それゆゑに史學を學びさへすれば誰にでも到り得べき境遇とは申されません、一にその人によることでもあります。

第四の心得かたは、澤山に史料を審査した經驗がありますれば得られるものでありまして、これは存外樂であります。たとへばどういふ類のことであるかといふと、述べてありまするものにい

かにも不思議の點があるのである。通常には考へ及ばぬことが述べてあるとか、あるひは示してあるとかいふことが一つ、又編纂物でもありますならば、その編纂者の時代におきましてありうべからざる書籍を引用致して居りますとか、あるひはたしかにそれよりも後世の作でありますところの何か他の史料を参考致したとかいふ證據のあると申すことである。尙又往々ありますことは、時代を混淆致しまして、數十年乃至數百年も違つた世の中のことをごたませに書いてあるといふやうなことがあります。尙更に又益多く發見致しますことは贋作者の意志が明々白々に露出して居ることがござりまする、たとへばある人を傷つける爲めであるとか、あるひは自分の門地を誇るためであるとか、あるひはその他一種特別の意向を示して居るです。これらのことが何れも皆贋作の目標となるのであります御覽の通り存外わかりやすいことでありまして、少々馴れますれば誰にでも行へる心得かたであります。

第二 攙入、脱漏、模様變、錯簡

史料はすべて古く傳はり來つて居る品でありまするで、勢多少の模様がへが、この傳來し來つた時代の間に起りがちのことでありまして、數百年乃至二三千年も古い史料が何等の變更をも經ずして、その出來た當時の姿の通りに傳來して居ると申すことは殆んど想像のつかぬことでありまし

て、もしかやうなことが果してありうると致したならば、あるひは史料が出來ました當座に金屬を用ひまして之を記して置くとか、あるひは至極堅い質の石材を擇みまして彫り附けて置くとか致しまして、而してかくの如く致したものを深く土の中へ埋めて仕舞ひまして、又その土の質も水の至極通りにくい様なもので、土地の氣候からいひましても雨の極く少い場所であるといふやうなことでなければ、とてもそのまゝに存せらるべき筈のものでないのです。

たとへばエジプトの古墳より往々にしてかやつり紙にかきました古書が出来ます、これはもつともなことでエジプトは有名な雨の降らぬ國であるから水は通りませぬ、ゆるにかやつり紙の如き保ちにくいものにかゝはらず、二千年このかた保つて居たといふことがあり得るのです。ペルシア王のダリオスは、自分の功業を數千年の後に傳へむために、かの有名なるベヒスタンの山の半腹の、けを削りまして、そのがけの石の質は石灰岩でありまするが、何様大きな坪敷を切つて磨いたのでありまするからして、ところ／＼石質の宜しからぬところがある、かういふ所には已むを得ぬからして、よそから石灰岩の質の上等なのを採つて來て、宜くないところを削り取つて、同一の形にこの石灰岩を切り取つて極めて正確に箝めました、しかし、きが出るといけませんといふので箝めるときに鉛を箝めてよくとめてあります、かやうにして恰かも平等の石質と致したが、けの額形に非常に注意して深く文字を彫りまして石灰岩のことゆゑ雨水にさらされると溶解する患がありまするで、

その上へ珪酸を以て製しましたる一種の塗料^{ぬり}を塗り立てまして、雨水の作用を成るべく防禦致したのである。凡そ碑の類でこのベヒスタンの碑ほど綿密にこしらへましたものは、いづくの國にも古今例がないのであります。しかしこのダリオスの非常の注意にも拘はりませず、山の上に落つる雨が自然山の土を通して、^{さほ}がけの方に流れ出す、その作用で石灰岩がとける、遂に碑文の彫つてある所に一條の穴をつくつて水がしみ出す、遂に一部分はこれで讀めなくなつて、他の部分も雨に吹き附けられて、已に文字は大分腐蝕されて居るが、珪酸性の塗料あるため、な^なか^かみ^みは^はが^がら^らん^んど^どになつて居ても字形にく^くづ^づれ^れは^は生^生じ^じま^ませ^せぬ^ぬ。かやうにしてこの有名なダリオスの磨崖の碑が今日に傳はつて居るのである。何様二千五百年後の今日までたとへ一部分が讀めずなつても大部分が讀めるとは、一にこの非常なる注意のためであつたのです。

今一つ同じやうな例をあげますならば鴨綠江中流の右岸にありまする高麗の好太王談徳の碑である。これも有名なる碑で、國史にとりましてはこの上もない結構な史料で、應神天皇の時代をたしかにたしかめ得るのは、この碑のあるお蔭であります。これは極めて堅緻なる御影石の大柱に彫つてあるのである。文字は大きいし、彫刻は深いし、何様これも非常な注意をしたものと見えます。然るところ後の世になりまして谷水が往々に汎濫致してこの碑を洗ひましたものと見えてところへ石がひどく磨^{すり}洩^{やく}して居る。殊に惜むべきは、應神天皇の御事業に關する部分が殊にいた

んで居るのである、往々全く字形が残つて居ませんので所々讀めません、惜むべきの至りであるのです。

かやうな次第で、いかに堅牢に史料を遺さむと致しましても、ながの年月には變化を経るものである、況して普通の板に彫りましたものとか、あるひは尙それよりも弱い紙に書きましたものなどが満足に數百年残つて居るなどいふことは意外千萬なことであるのです。地理の上から見てもさうでありまして、雨水の作用空氣の作用の爲めに、がけはくづれるし、地面は流れるし、到底昔の姿は残りやうはない筈である。それゆゑに昔の姿を永く維持しやうとならば、是非とも度々の修繕をしなければなりません。そこで修繕するときに技師がよく十分研究して毫釐もたがはず原形にかへすといふやうにすればよいが、かういふ技師はいつの世にもあるといふわけでない、概して昔は無^むい^いと^とい^いふ^ふて^てよ^よい^い。大概自己の考で復舊するので、甚しきは自己の意匠を加へて之を號して復舊と申して居るが、これは復舊でなくて模様がへであるのです。建築物などには往々にしてこの弊があります。だから毫釐も昔の姿を變へず、今日に傳はつて居ります千年以上の建築物は世界にありますまい。先頃關野貞君あたりが大和國などで頻りにやつて居られた復舊工事は誠意で精密に研究してやられたからこれは安堵してよからうが、昔の技師などは中々かういふあた^あた^たま^まは^はな^なか^かつ^つた^たのであります。書籍などに至りますればこの模様がへを甚しく受けるので、殆んど原形のまゝに傳は

つて居る古書といふのは先づ無いと云つてよいでせう。それと申しますものは書籍といふものは先づ何代も経てうつし傳へるものでこれを轉寫といふが、その轉寫の間にうつりかはるので、讀めぬのはいゝ加減にして置き、又やゝともすれば原文をまづいと思ふて文をかへ、又書き入れなどがあれば、うかと原文と思ふて書き入れてしまふのである。又根本史料の性質として、往々後の世のものにはわかりにくいとなへかたや名前がはいつて居る、それを研究した人が傍へ書いて置く、さうすると寫す人が、わからんために原文を削つて、その注の方を本文とする。かういふことが澤山あつて所謂その轉寫本を研究するものは頗る難儀する例で、史家はそのために通りならぬ難儀をするので、史家のつくつたものをよむ人は、そんなことは知りませんが實のところ史家は非常な椽の下の力持ちをして居るのであります。かやうに史料に原形に違つたものゝもぐり込んで居るのを、史學におきましては攪入と申し其の反對にあるべき筈のものが落ちてゐるのを脱漏と申すのであります。

脱漏は古書にありがちのもので、蟲ばんだ本を謄寫いたすとき常に出来るのである。寫すものが精々氣を付けても兎角に見落します、殊に手間をおしむ職人根性より一行二行を落しても其儘して置きます、朝鮮寫本は其の最も甚しいものである。單純な脱漏はまだよいとして落丁の多いのに困ります。朝鮮寫本に落丁の多い原因は二種ありまして、其の一は板木の紛失したのを補填せず殘闕

のまゝ印刷した板本を寫したからである、其の二は藏書家が本を賣るとき決して一部を纏めて手ばなさず、數度に亘りばら／＼にして精々甘い汁を吸ひます。されば卷數や冊數だけを算へて完本だと思つたら大あて違である、一卷を機械的に剖いて往々二冊にしてある、一枚二枚の落丁など勿論眼中に置きません。

尙ほ錯簡と申すことがある。簡は狭い長方形の竹木製の小板で後世の紙一枚に相當するもの、先秦時代のは竹製、漢時代のは木製である。魏晉六朝隋唐の書籍は固より紙本であるが皆卷子であります、卷子は繼紙ですから糊氣がされると紙が一枚々々ばら／＼になる、バビロニア、アッシリアの磚本を別としてエジプト、ギリシア、ローマの書籍も皆卷子でありました。ばら／＼に崩れた卷子は貝多羅のインド本と同様で一枚々々の順序を正確に知らねばなりません、然るに元々卷子であるから一枚々々の番號は打つてありません、そこで混雜が起り入違が出來ます、丁度今日の折損をりそこに相當する誤が湧いて出る、之を錯簡と申します。されば錯簡は古書に限ること、或る本の文章が説述に續かず木に竹を接つだやうに斷層を示すときは錯簡のあるのを疑ふので、古事記や日本紀にも錯簡の箇處あることを學者は昔より疑ひます。

そこで一の史料のどこが原形で、どこが攪入などであるかを見分けるのは史學研究の重大なる仕事でありまして、眞贋を判別すると全く同等の技倆であります。別にくだ／＼しい例證は挙げま

せずとも、少し史學を學んだ人は皆知つて居ることであり、摺入などに就ての大體の御話はこれだけにして置いて、次にはどういふ風にして原形と摺入などの區別をつけるかといふことの心得、かたを聊か申述べませう、この手續を書類の場合に於ては校訂と申します。

最も明白なる場合より初めますれば、書籍であります。轉寫本であると、事實いろ／＼古寫本がなくてはならぬ、一本限りの筈がない、それゆゑに精々古寫本を搜して比較するのであります。これが先づ第一の手始めで異同をしらべ、その異同により何某本とか番號などを打ちます、それで一々それ／＼の本の異同をかき出します。左様致しまするといふと、段々その異同の中に、これはたしかに年代の餘程下つた時代の姿に見える、これは比較的早く見えるなどいふことがわかつて来る。極く都合のよい場合には著者の自筆本か、あるひは左なくもその時代を去ることあまり遠からぬ時代のうづしかと思はるゝものが出て來ることがあります、數々はないが往々かういふことがあります。若し著者の自筆本が出て來ればそれをまじめに讀めばよいので氣樂であります、自筆本にないことは削り去るのであります。しかし多くの場合の如く自筆本のないときは、割合に古い古寫本を標準として、その以下のものと較べるので、これは馴れねば出來ず、又實物研究でなくては出來ぬことで、唯今机の上のから理窟を申しあげたところで到底實用には立ちませんが、しかし理論を申せばかうなるのであります。

文體が質朴で、書いてあることがむだがなく、一口にいへばむだな言葉が一口もなくまづければ、まづいなりで徹つて居り、うまければうまいなりに徹つて居るといふのが原形に近いのであります。いづれにしても澤山な古書を読みました眼を持つて居ませんければ、この鑑識は附きませんから、理窟を申したばかりではとても應用はきかんです、それで差別をつけてゆくのです。又澤山に古寫本を集めると、本文の外に、あるひは、あた、まに書いてあつたり、行の外にかいてあつたり、あるひは釣をかけて目標が書いてあつたりして、往々にして墨色もちがひ、文意もちがふといふやうな甚しい異同を生じて來ることがある。又よく見ても本來どれが原形どれが摺入と鑑別の附かぬことがあつて往々困ることがあります。先年我等の窮したこの類の例は親元記であります、これは一部分の外原本が残つて居りませぬ、他は皆轉寫本であります、轉寫本にはよいのもわるいのもありますが、皆大同少異で、異同が非常にあるにかゝはらず、どれが原形か摺入か、殆んど鑑別が附かぬのである。成程記録局に親元の自筆本と號するものがあるが、我等の見るところでは自筆ではありません、全く轉寫本であります。今世間に公になつて居ります官版の親元記は、それゆゑに先づ我等が、この邊あたりが原形に近いものであらうかと想像致したところを出して置いたので、到底御受け合ひは出來ぬのであります、又恐らく誰もおうけあひは出來ません。昔より世に流布して居ります古書には、かういふ困難は往々有りがちのことです。

る。たとへば平家物語にしても太平記に致しましても、どれが原形か、鑑別することは甚だむづかしい、しかし平家物語や太平記につきましては多少の鑑別は附くのでありまして、たとへば平家物語ならば普通本が最も原形に近いのであります。太平記ならば南都本と神田男爵の所藏本とが一番原形に近いものであります。かの有名なる天正本などは最も摺入の甚しきもので、随つて最下等の悪本であるのです、そのかはり面白いことが書いてあるのです。かういふ手續で先づやつてゆくのであります。で、心得かたを先づ簡単に切り詰めて申上げませうならば、左の如くなつてしまふのであります。

一、極めて正確なる古寫本の存するときは、本文と書き入れの文體、書風、筆意、墨色などに異同がありはしまいか、この點を見ます。書き入れの文體、書風、筆意、墨色などが本文と著しく違つて居りますならば勿論摺入として斷然削り去ります。又この際には本文の所を削つて書き直したところがありはせんか、特に氣を附けます。偶然のあやまりで書き損なひをして、それを削つて書直したのなら宜しいが、何か都合があつてこれを削つて、これに違つた字をはめたとか、あるひは故意に更に濃い墨を以て上へ書いたなどの所があれば、特に氣を附けんらるのであります、これらは往々有り勝ちのことであるのです。

二、普通の傳本しかない場合ならば年代の最も古い、即ち著者の自筆本に最も近い年代のもの

思はれるものを捜しまして、これによつて審査を加へて參ります。しかしこの場合におきましては、もはや書風、筆意、墨色などいふことはございませんからして、已むことを得ず文體に注意するより外致しかたがございませぬ。

三、轉寫本が甚だわるうございまして原形が殆んどわからぬやうな場合には、文體しらべでは原形をつかむことは出来ぬから、述べてある内容をしらべるより外仕方ありません。内容が合ひませなければ、即ち摺入と見なければならぬ。尙進んでは前後の關係を篤と見て竹に木を繼いだやうな所があれば摺入と致します。

原形と摺入とを鑑別する心得かたは大凡上の三箇條で宜しいので、一に熟練を待つて得られるのであります。それゆゑに随分熟練の人であつても、人々によつて往々意見が違ひます、この心得かたを運用するために稽古をなさうとお考へになるならば、差し詰め最もよい標本は大鏡であります。幸に萩野博士の校合本がありますので、これを參考となされて普通本を精讀せられますれば、餘程研究の參考になりませう。

上に申上げました心得かたは書籍について申したのであつた、といふのは摺入の鑑定を致すのは書籍が一番簡單な場合ゆゑ、取敢へず書籍について心得かたをたてたのであるが、自餘の史料におきましても類似のことで、書籍に於て立てた原則を史料の性質にあふやうに姿をかへて適用すれ

ば、いかなる種類の史料に對しても用ひられるのである。例へば建築物で言へば、どの部分は木材が最も古いとか、あるひはどの部分は木材が著しく新しいとか、あるひはどの部分は手斧てうののみで仕事しごとがしてあるとか、どの部分は現に鉋かんながかゝつて居るとか、あるひは甲の部分と乙の部分と材木が違つて居るとか、あるひは丙の部分と丁の部分とは手法がかはつて居るとか、いろ／＼の着眼點がござりませう。地理でありますれば、どここの所は谷川のほとりであるから地面が崩くづれたのであらうとか、どここの所は傾斜が甚しいから度々雨水に洗はれたとか、それ／＼の着眼點がござりませう。かういふ類のことを史料の性質に適應して原則の姿を變へて適用すれば宜いのであります。

外部の批判はこれまで述べましたところで極くの大體だけはすんで居りますので、先づこれに止めて置きまして、次に内部の批判にうつります。

内部の批判

第一 可然程度

然しかるべき程度と申すのは、然しかあるべき程度のことでありまして、大凡一つの事につきましてこれ

ほどのくらゐ實際にありうべきことであらうかといふことの判定のことです。數學の上より申せば甚だむづかしい題目であります。こゝには左様なむづかしいことを申す必要はないので、極くの大體だけを心得て居れば濟むことであります。とにかく史學の取り扱ひまするところの事項は、國家社會の全般に涉りまして、範圍は非常に廣漠であるし、證據物件は割りに少うございしますし、よしありました所が、毎々申します通りに、とかくに殘缺しやすい所のものであつて完全であつて申分のない證據の備はつて居る事項といふものは先づ無いと云つてもよい位であるからして、いづれとも、どれくらゐまで實際あつたことと鑑定をつけて説を立て、ゆくより外仕方がないのである。左様の實際の有様であるですから言葉を換へて信すべき程度とおっしゃつても大體に於て意味の間違ひは出て參らんであります。しかし我等はこの信すべき程度といふ言葉を好みませんから。學術上の言葉としてこの可然程度といふ言葉を用ひるのであります。

これを數學の理論の上から申すならばある事項につきて、ある條件をとりましてこれだけの條件があればこれ／＼の事項が出ると正確に定めることが出来る、素より假定であるから實際に於てそれより條件が多いのであるか、あるひは尠いのであるか、その邊のことは構はぬのである。假りに何箇條か條件をおけばそのものにはたらくし、ごととは如何ほどであるかといふことは、數學に於ては精密に打算することが出来ます。しかし史學の研究します事項は何様非常に複雑なる條件のもの

とに成り立つものでありますから、決して何箇條と申して條件を數へあげまして、その條件の作用を互に比較して打算するといふことは出来ませんのであります。已むことを得ず全體を概括して大略を打算するより仕方がないのである、それゆゑにこの可然程度といふことの心得かたが大切になつて來るのである。

簡單なる例を申さうなら、醫學におきましては人間のからだの研究を基礎と致しまして、その變體、所謂病體を取扱ふのを以てその實地の應用と致します。然る所が一個人の身體は決して平等に出來て居ませんもので、面々皆多少の相違があるからして、醫學に於ては平均をとるより外仕方がありません。されば實地に醫學の學理を用ひるのもさうで、先づ以て平均の度合で治療法をきめるのでありまして、面々の身體の違ふ點は面々に就て特に研究して治療法に取捨を加へるのであります。この取捨を加へるのが實際の醫師としての技倆の存する所で、机の上の空理窟からりくつで病人を直すことの出來ぬといふは一にこゝにあるのであります。史學の事項におきましても左様で、國家社會に現はれて來る各種の現象は、何れも皆その時代の國家社會の事情のあらゆる條件のもとに現れ來るもので、精密にいへば先づ以てその時代に現れた各種の事情の各種の條件を研究してかゝらんならうが、それは中々出來ぬこと又出來ることでもないもので、まづ最も著しい重大の處だけが調査が附けば宜いとせねばならぬ。かくの如く最も著しい重大の條件のもとに一の事項が起つて來れ

ばその事項がいかなるはたらきをするかといふ概測は附きます。しかし概測は概測であつて必しも史家が概測した通り、その事情が實際にはたらくとは申されません。史家が考査したる一の事項は、既定の條件以外に尙條件が加はれば、その事項の作用は、無論かはつて來ます。それゆゑに史家の史論通りに史學の事項が必しも働いたに相違ないとは思はれぬので、史家も亦主張の出來ぬことなのであります。要するに史論は大勢を申述べるのみで、史家が精密の調査を遂げて一の事項毎に特別の研究調査をすれば、委しいことは随分出て參るが、その代りに一概に概括するといふことは頗る危い事なのであります。

かういふ姿の史學の性質ゆゑ、史學の事項は皆可然程度に基いて居るものと見なければなりません。史學を數學、星學、物理學、化學の如き、専ら演釋法によつて打算します所の學問と同一に見ることの出來ませんのは、このわけによるのである。この故に史學は到底一の科學として成り立つことは出來ぬといふ説を或は出す人が爲めにあるのであります。然しこれは別論で、數學や物理學の類の通りの研究結果をあらはさねば、科學でないといふことなら、凡ての自然科學例へば動物學の如き、植物學の如き、礦物學の如き、地質學の如き、いづれも皆やかましい意味におきましては、科學でないのであります。我等はかやうな風の説には賛成致し兼ねるのである。

これは先づ可然程度と申すことの説明に過ぎませんのであるが、研究法におきまして可然程度と

いふことを直ちに適用する必要があるのです。史學の學問として然るべき程度に基くといふことのみならず、實際考證致しまする場合には直ちにこの事を用ひねばなりません。外部の批判に於ては先づ以て可然程度といふ考は、まづいらぬと思ひます、いることもあらうが、通常はいりませんが、内部の批判に於ては悉くこの可然程度に基くのである。考證の際に適用すると申すのは大凡左に申上げるやうなことです。

こゝに一つの史學の事項を研究するとすれば、先づ以てその材料を集める。材料は即ち證據物件であります。この證據物件の集つた上で、外部の批判をしていつて、いけないものは悉く削りまして、間違ひのないものだけ採用します。次に來るのは内部の批判で、この證據物件が、どれだけの程度まで證據物件となることが出来るかどうかといふことが問題となつて來ます。これが即ち可然程度といふことを基として立つといふことであります。いかなる事項の審査でも、必らずこの方針の審査を要します。それで可然程度には五等の階級があります。

イ、確實。

こゝに假りに、得ました所の證據物件が、この事項に關しましての總ての證據物件を盡して居るものと見まして申すならば、もしこの網羅致しましたる所の證據物件が、悉く同一の證據を與へまして研究致して居りまする所の事項をいかやうにしましても疑ふことの出來ぬやうに致しましたる

場合におきましては、史學の眼から見ますれば先づ以て完全の史料を得た者であつて、研究致して居りまする事項は全くたしかになります。かういふ場合を稱して「確實」と申します。即ち最高の可然程度の事項となるのであります。絶対に確實なる事實と申すことは、人間の智識に及ばぬことであるのであります。このことは、^{あらかじ}豫め御記憶を願つて置きます。

この確實の程度に達して居りまする史學事項の一例をあげて見ますならば、徳川家康の父は誰であるかといふ問題であります。嘗て世間には妙な異説が出て居りまして、家康は非人の子であるとか申すさうです。然るところが我等が家康の生れにつきまして、あらゆる限りの現存の證據物件をしらべて見まするに、贖物や何かならばいざ知らず、かりにも證據物件らしいものである以上は一つとして家康の父が非人であるといふ證據を與へるものはありません。やはり昔から申す通り父は贈權大納言徳川廣忠でありまして、母は水野右衛門大夫忠政の娘であるに違ひない。この點におきましては、甲を唱へるもののみであつて、乙をとるものも一つもないからして、斷然確實と申すより外致し方がない。この類の例ならば澤山にございます。所謂事實と申すのは、この程度のものといふのであります。

ロ、半確實。

次に證據物件が與へて呉れまする證據が、上に申しました如く、皆必しも同一の證據を與へてく

れませんで、多少の相違がある。たとへば同等のある證據物件は甲といひ、他のある證據物件は乙といふ、この場合におきまして、甲と乙とがどういふ比例になつて居るかの比例を見ます。もし甲と申すものが過半数でありましたる時には、史學におきましても、やはり過半数を多數と認めまして、甲の方を主張しまする證據物件を先づ以て採用致すべきものと致します。勿論證據物件が皆同等の値打のものであると假定しての上であります。

この場合を「半確實」と申します、即ち普通の然るべき程度であるのです。この場合に於ては史家は御うけあひは出来ませんが、多分このあたりで宜しからうといふだけのおすゝめをすることは出来きます、それを信用なさらうとなさるまいと面々の勝手であつて、史家は敢て之を強うる權能を持つて居りませんのである。しかし人間の智識の姿よりして申しますならば、此の如き場合は信用されて然るべきことである、尠くとも信用せんよりは信用致した方がたしかであります。この半確實の場合の上乗なるものを史家は先づ事實の内に編入致します。さまでに參らぬ場合には所謂學說として置きます。

この場合の實例も随分澤山ございます、否澤山あるばかりでない、大抵の歴史事項はこの部類に屬するのであります、先づ以て十中の八九までは、この場合に相當致しませう、所謂學說と申すのは、この程度の中等なるものを申すのであつて、それまでに至らぬものは假説と申します、あまり普通でありますので、實例を掲げませぬ。

ハ、未詳。

もし又證據物件が與へてくれます證據が申出でまする所は、丁度半々にわかれて居まして、甲と申すものと乙と申すものが、どちらも同數でありましたときには、判事たる所の史家はいかやうとも處置が附かぬので、已むことを得ずわからぬとして棄て置くより仕様がありません。この場合を未詳と申します。何か新しい材料がออกมาして、どちらかの方へ應援を致しますれば、そちらの方へ團扇が擧がるわけになるのであります。この未詳と申す言葉を俗には随分濫りに用ひますが、史學におきましては、かくの如き場合にのみ用ひたいことであるのです。實際におきましては、この未詳の場合は至つて少いことで、はつきりこの場合にはまる實例を鳥渡考へ出しにくい位であります。

この場合に相當する實例をあげますることは、史學事項の性質としまして甚だ困難のことであつて、先づ殆んどないに近いが、強いて近いものを求めまするならば、楠木正成の戰術のことです。正成は古來奇計を出したことからして人口に膾炙致して居ります、もっともこれは太平記あたりがよりどころでその餘のものにはあまり出て居りません。實際に正成の戰術を見まするに、奇計を出したことは多く發見致しません。正成が模範を垂れ置きまして、その家の戰術となつて居り

ましたものを見まするに、最も著しい點は時機を見計らつて、突貫突撃するのであります。この突貫突撃と申すことは明治二十七八年役あたりでは一向珍らしくない常例でありましたが、南北朝の頃におきましては殆んど他の諸將の採りません戰術であつたので、殆んど正成の發明しました戰術であるかの如くに見えまする。

しかしこのことは、またたしかに申上げるわけには参りませんから、御うけあひは出来ませんが、今日のところ先づ左様でないかと思ふて居るのであります。然るに太平記あたりの話では正成の軍とさへいへば、いつでも、何か妙なことをやります、或は炬火行列をやらせたり、或は泣男を出したり、殆んど狂言じみたことがよく書いてあります。が實際にどうあつたか、甚だ覺束ないのである。後世になりますれば、織田信長でも豊臣秀吉でも度々奇計を出される、時と場合によつては、正成もあるひは奇計を出されたことは無いとは、うけあはれんのである。

正成が當時智謀があるといふ評判がありましたに就きましては、梅松論に唯一箇處鳥渡そのはなしが出て居ります。即ち尊氏が九州より攻め上るときに正成の智謀を慮つて偵察に注意した一件が載つて居るのです。この以外には正成は智謀を出すのを以て人に知られて居つたと申す證據物件を未だ存じませんのであります。されば太平記の炬火行列や泣男は、記録によつて消滅すると致しましても全く智謀が無かつたと申す證據はないのである。又たとへ一箇處だけなりとも、梅松論に正

成の智謀を憚かつたことが擧がつて居りますれば多少當時その聞えがあつたと申す證據になります。

強いて求むればこの場合などが、丁度證據物件半々の即ち未詳の實例となりませう。

ニ、不審。

更に又證據物件が與へてくれます證據がいろいろのことを申立てる中に、甲と申すものよりも乙と申すものが過半数である。この場合におきましては第二の場合と恰かも反對になつて参りました、史家は乙の方を採用すべき義務を持つて居るので、已むことを得ずその方に決定致しまするが、この場合を不審と申します。

この場合に相當する實例は澤山あります。こゝには極めて有名なる例を擧げませうが、かの兒島高德のことである。兒島高德といふ人が曾て存在して居つたか如何といふことは今日では殆んど史家の間には最早議論が絶えて居ると思ひますが、それと申すも畢竟この場合に相當するからであります。

兒島高德に關する證據物件は、實に非常に乏しいので、南北朝の諸將の古文書は大抵皆ありますが、高德の古文書は、たゞの一通もございません。又他の諸將の文書中にも、高德の名前は曾てあらはれて参りません。これが已に非常に不思議なことなのである。次ぎましては當時の記録には隨

分精密なものがあるのであるが、高德の名前は曾て記録にあらはれません。然らば高德は何に出て居るのであるかと申すと、誰も知つて居る太平記に出て居るのである。太平記以外に何か證據物がないかと捜しましても、贋物や摺入などやらならばいざ知らず、確實なる證據物は一品もございません。即ち兒島高德を證明しまする證據物は、太平記唯一つであるといふことになるのです。

もつとも太平記の記事は悉くつくりばなしではありません、宜しいことも、随分ございます。要するに物語の性質と致しまして、あるひは實際の事實に基き、あるひは架空に筆を走らして面白おかしく書いたのであります。その中に眞實の記事のありますことは固より知れ切つたことである。で、太平記の兒島高德の記事は事實に基くのであるか、あるひは全くのつくりばなしか、その邊の處は他の確實なる證據物を以て批判しませんければ分らんのである、太平記にあるからといふだけで、直ぐ採用するわけには參らるのであります。

とにかくに太平記の記事は證據物の一つにはちがひない。さうしまするといふと、他の各種類の證據物よりは一つも證據が擧がらんで、太平記だけから證據が出るといふ場合でありまして、所謂唯一史料の實例ともなるもので、少し毛色が違つて居りますから、追て尙くわしく申述べますが、こゝでは假りに不審の實例として擧げておきます。

この程度の場合には、萬一のために疑を存して置くのが無事であります。

ホ、不確實。

もし又證據物件の與へまする證據が、悉く一方に走つて皆乙と申しまして、甲と申すものが、いろ／＼探りましても一つもないと申しまする場合には、これは致しかたがない、研究致して居りまするところの史學の事項は、證據皆無となりまするで、即ち自然の結果消滅であります。この場合を不確實と申すのです、即ち確實の正反對であります。

數學などの類の科學におきましては、かくの如き場合であればこれを有り得べからずと申します。しかし史學におきましては、このありうべからずと申すことは、普通によく使ふことはつかひます。が、聊か語弊がありました、誤解を生じまする基となりまするで成るべく用ひたくないのです。と申すのは有りうべからずと申すと數學などで申すありうべからずと同じ意味であると思ふ弊がある。例へばあたまの二つある人間はありうべからずと申すでせう、なせならば一個の人體として頭あたまの二つある理由はないのである。しかしながら實際より申しまするといふと畸形と申しまして双兒ふたごが合體して一つのからだの様に見えるのがある、この場合におきましては、からだは一つ、手も足も各二本づゝで、あたまだけが二つあるといふことはあり得べきことであります。しかしこれは外形だけのはなしで、實は二人の人間が集つて居るのであります。それゆゑに、やはりあり得べからずで宜いのである。

又哲學などの研究方針から見ますと、ありうべからずと申すことは、宇宙の原理より推してありうべからずといふことに解釋することでありませう。史學の主張しますところは、宇宙の原理など申すことは少しもないので、この人間社會の實際の現象を研究するので、どういふことが、宇宙の原理かなどいふことは、哲學に御依頼して、史家は啄を容れぬことでもありますから、哲學上の解釋を史學上に用ゐられては甚だ迷惑であります。史學の申すところは、宇宙の原則としては、どうあるか知らんが、實際の社會に於て有るとか無いとかいふことを申すので、以上のことは申さぬであるから苟くも證據がなければ斷然無いと申すのであります。即ち不確實と申すのであります。不確實とは實際無いと申すことであるのです。理論の上では實際あり得ることも、史學上では致し方がないのであります。これが哲學と史學との根本の相違で、この邊の差別をよく心得ておかぬといふと、史學と哲學とを混同してならぬのである。

例へば仙人や聖人は、哲學の理屈から申すならば、何れの時代に於ても又何れの社會に於ても澤山にあり得る筈である。單にありうるのみでない、哲學の希望と致しましてはいかなる時代たるに拘はらず、社會の人を擧げて悉く仙人か聖人にしたいのでありませう。所謂黃金時代を造り出さうとする人は、この希望に外ならぬのであらう。然るところ實際の姿を申すと、仙人や聖人は千年に一人出るか二千年に一人出るか覺束ないのである、稀有の場合であるのです。この稀有の場合をあ

らゆる時代に押しひろげて行はんとするのが哲學の希望であります。希望は希望として別問題である。史學は希望など申すことを取扱はぬから、希望を採用するわけには参りません、事實のまゝを申すより仕方がないのでありますから、仙人は絶無、聖人は稀有としか申す外はありません。若し斯く申さば德育上困ると申しても、それは仕方がございません、史學は固より倫理學の従者でありませんから、倫理學の爲に提灯を持つわけには参らぬのである。しかしこゝらあたりは所謂教育學即ち小學校の教育と衝突する所なのであります。

この場合の實例は、史學に於ては先づ無いと申しても宜しいのである。と申すのは、證據物皆無で、あたまから削除の場合であるのですから史學の問題に上りませんのである。強いて求めるならば、通俗に信用せられて居ります捏造談を出すより外はありませんまい。例へば義經の北海道落、豊臣秀頼の薩摩落、西郷隆盛の洋行談などの類で、いかに通俗には信せられて居りましても、多少の學識あるものは、誰も之を信するものはありません、それは證據物皆無であるからのことである。可然程度と申すことを實地に適用するのは、大凡上に述べただけのことで宜しいので、これより内部の批判のことにつきまして段々申上げてゆく順であります。何れも皆この可然程度を基礎として説き立て、参るのである。中には随分むつかしい場合が起つて来るが、それは醫學が實際の場合にあつて、さてこの病人は變な身體を持つて居る普通の兆候が現はれぬとて、随分大家があ

たまを惱まされることが屢々あると同じで、それは歴史事項のそれ々々について出ること、一般の方針として一々それらまで述べて居るわけには参らるので、研究者が研究を積んで居れば自然その境に達するのであります。

第二 史料の系統

前の項で述べました可然程度のごとは、すべての史料を假りに同一程度の然るべき度にあるものと見ましてのことである。然るところ實際に於ては史料の然るべき程度は、その品によりまして千差萬別でありまして、一々篤と審査をしませんといふと、その度合がわからぬのであります。それゆゑに可然程度の原則を適用しまするには大に注意を要すること、極めて簡単な證據物件の多數決では参りません。證據物件がどんなに數多くとも、その與へますところの證據がつまりませんければ、たとへその數は何百ありとも効力は甚だ薄うございます。唯一史料の場合でありまして、その與へますところの證據が極めてたしかでありますれば、唯一品で定説が立ちます。かくの如き次第でありますから、是非史料即ち證據物件一つ一つ精密に取調べなければならぬのである。史料の系統と茲に題しましたのは、史料もやはり他の品物の様に、皆系統を具へて居ります。史料はいづれ天然物か人造物かの中にあつて、それも純粹の天然物はございません、多少人工を

加へたものである、まづ大體におきましては、人造物と申して宜しいのである。そこで人造物である以上は、これをつくりました時、つくりました處、つくりました人の三つのものが必らず入用である。

すべての動物が空に湧いて出ませんと同じやうに。史料にもやはり親が無くてはならぬのである。故に史料の系統しらは、取敢へず史料の親しらべ里探しでありまして、一々分析解剖して史料のお里を明白に露出せなければなりません、お里のわからぬ史料は史家に於て採用出来兼ねます。一つの事業に人を採用しやうとするには先づ以て里しらべが必要である。お里の曖昧なる人物は用ひることの出来ませんと同じことである。又史料としてお里のわからぬといふものは、十中の八九賈物であります。そこで先づ史料の出来た時、少しむつかしい言葉で申すならば史料の製作年代であります、先づこれより申上げて参りませう。

イ、史料の製作年代。

史料の大多數は書籍の姿になつて居りますので、説明を簡單にするために書籍に就いてお話しませう。他の史料につきましても原則は同じでありますので、書籍に對する原則をその他に適用すれば宜しいのである。

書籍は勿論人造物である、人造物であります故に、人間の心理作用より影響されます。殊に人

間の記憶力はいかやうなるものであるかといふことをよく心得て居らねばなりません。記憶力のことにつきましての心得かたは、いづれ心理學の方の書籍で一應御心得かたを願ひたいのである、とにかく人の記憶力と申すものは非常な薄弱なものであります。今朝耳に入りましたことを夕刻には已に忘れて居ることがある、昨日見ましたことを今朝にははつきり覚えて居らんことがある、よしや覚えて居つたに致したところが、覚えかたがおぼろげになつて居りまして、多少の變化を來しして居ります、決して見聞致したその時の印象そのまゝでは残つて居ないのである。又人間の情として居ります、すべてつらいことは自然忘れるものであります、よしや忘れてしまはずとも、つらかつた程度を軽減致しまして覚えて居ります。之に反しまして、嬉しかつたことはよく覚えて居りますし、仍又その程度を擴張致しまして覚えて居ります。簡単に之を申すならば、苦は之を忘れ^{たのしむ}樂は之を覺ゆるといふ様に覚えて居れば宜しいことである。

かやうでありませぬければ、人はこの苦しい社會に生存して參れる筈がないのである。社會にある人の經驗では、苦の方が常に多くて、樂は尠いものなのである、若しこれを正直にそのまゝ苦樂を覚えて居りますならば社會の面々が擧げて皆厭世主義になりました、社會の衰滅を來す基となる筈です。然るところが大多数の人が樂天主義でありまして、著しい不平連か何かだけが厭世主義であるといふのは、この人類生存の上におきまして、極めて重大なる原則であるのです。人間の感

覺も、人間の情の作用も此の如きものでありますからして、感覺の得ましたる印象、情がつくりましたる印象などを正確に傳へやうと思ひましたならば、必らず印象を得ました即時に書きとめて置かんければなりません。恰かも光線が種板^{たねいた}にはたらいて直ちに印象がうつる、成るべく早くこの印象を留める工夫を致しませんと寫眞がうまくゆかぬといふと同じ類例であらうと思はれます。

史學におきまして申すのは、この原則に基くことでありまして、大凡史料の製作年代は、その證明する史學事項の起りましたる時代、若くはその時代に最も近き時に製作せられたものでなくてはならんと申すのである。随つて製作年代が、その史料の證明する年代より遠ざかれば遠ざかるほど、可然程度が落ちて參るのである。故に他の點におきましては全く同等であるものと見まするならば、製作時代の古いものほど價値^{ねいじ}が高いのであります。

ロ、史料の製作場所。

次に製作場所であります。製作場所は勿論史料の證明致しまする一史學事項の起りましたるそのもの土地でなくてはなりません。これは改ためて申上げるまでもないことで、場所が遠ざかりますれば、同じ報告でも見聞でも到達しまするまでに日にちがかります、日にちがかりると申すのは取敢へず印象が變化して居るといふことを意味します。もつとも場所は懸け離れて居りましても何か特別の理由によりまして、現在の場所に於て見聞したことを、同一のことが傳はらねば

ならん場合があります。例へば鎌倉時代におきましては、京都と鎌倉との関係は非常に緻密でありまして、京都におきまして得ました印象は、そのまゝ鎌倉に傳はつた筈である。江戸時代におきましても同様で、江戸に於て得ました印象その通りが京都に於て得られた筈である。しかしこの場合といへども尠くとも一兩人のあたまを経た印象である、それゆゑにその現在の場所に於て自ら見聞致しましたることゝ多少かはつて居る筈である、やはり到底現の土地に於て得ましたる印象の價には及びません。東鑑あたりなどに書いてありまする京都の出來事をしらべまするには、この邊の注意が甚だ大切である。

上に申述べまする理由によりまして、史料の製作場所は其の證明しまする史學事項の起りました現の土地に限るのであります。距離が離れまするだけ可然程度が落ちて参ります。極めて僻遠で何等の關係もない場所に於て出來ました史料などは、これゆゑに史學の眼より見ますれば殆んど以て一顧の價もないので、先づ以て無下の雜説と異なるところはなないのであります。

ハ、史料製作の人物。

終りに史料製作の人物であります。すべての史學事項は、人間の仕事である、人間の仕事として人類一般の仕事でなし、又必らずしも全社會の人間總體の仕事でもありません。よしや全社會の人間がやつた仕事でありまして、その社會をつくつて居つた一個一個の人が悉く萬事の相談に

あづかり萬事を指揮してやつたことはありうべきことでなし、又實際ありもせぬことであります。必らずその間に指導者、あるひは指揮者、あるひは主任者があることである。この指導者指揮者又は主任者は一同を代表致しまして、一同の意志の貫徹する様にはたらいて居るのであります。それゆゑに全社會の人間がやつて居る事項でありまして、やはり其の代表者のつくりました史料ほど精密なるものはないのであります。況して事が全社會の人々の關係したことでなくて、ある一部分の人々だけの仕事でありました場合に於ては直接に事に當りました人の提出致しまする證據が最も確實なのである。

極く簡單な例をあげまするならば、こゝに一つの戦があると思つて見ます。敵味方兩方面におきまして主將があり、參謀長があり、それ以下將校士卒があります。この主將以下の人物、何れも皆實際戦つて居るものであります。全體に通じて眼のとゞきまするのは主將と參謀長とだけで、その餘の人々は一部分のことより外は見聞出來ぬのであります。まして戦に、あづかりません傍觀者、一般の人民などが、この戦の實況を精密に知り得やう筈がないのである。それゆゑにこの場合には主將か參謀長のうちで自からつくりました史料が、最も正確なのである。勿論敵味方各の方面でつくつてくれねばなりません。さうすれば史家は双方の證據物件をしらべます。例へば千八百六十六年のドイツとオーストリアとの役の如きは、双方の陸軍におきまして、主任者を定めまして

戦史を編まして居ります。史家は唯この兩國におきまして出来ましたる戦史を對照しますれば直ぐに判決が出来るのであります。

然るところが古代の事蹟になりますると、たとへ戦の如き比較的に簡単な事項でありまして、かやうに精密にしらべるわけには参りません。例へば延元元年の湊川の戦は如何であるかといふに足利軍の方ではその参謀官がつくりました梅松論にその戦況が載つて居る、又この戦に関する古文書もありません、されば足利軍の方面に於てつくりましたる證據物は具はつて居るものと見て宜しいのである。然るに今一方の官軍の方はどうかといふと、甚だ遺憾の次第であつて、然るべき證據物がないのである、曾てまじめにこの戦の戦史を編んだことがないのである。纔かにありまするのは誰も知つて居る太平記であるが、これは三十餘年後に叡山關係の人々が編纂したものと思はれる。もつとも所謂太平記流の文章をつくつたのは小島法師でありませうが、材料を掘り集めしたのは小島法師以外に幾人もその人があつたのであらうと思はれる。何れにしても民間の普通の編者でありまして、南北兩方の朝廷に更に關係がありません、將軍の方にも一向關係のなかつた人々のやうに見えますから、湊川の戦の記事が正確であらう筈がないのである。多少骨を折りましてしらすたのであると假定しましたが、到底梅松論の正確なるには及ぶ筈がありません。それは時代も下り、場所もちがひおまけに編者が戦史を書くのに資格のない人間であつたらしいからなの

です。史家は已むを得ませんから、この場合におきましては梅松論と古文書とにより説を立てます、太平記は纔かに参考するに過ぎぬのであります、別に太平記を輕蔑してさうするのでないの、採用したくとも史學の原則よりして左様参らんからの次第である。

これより込み入りました場合であるならば、尙更面倒な注意をしなければならんことで、とりわけ政治外交などの方面に至りますといふと、史料をつくりました人が何者であるかといふこと、しらすべが最も大切な次第である。政治に致せ外交に致せ、それに對する史料をつくりました人は、必らず當局者でなくてはならんのである、たとへ當局者であつたにしても主任者でなくてはならんのである、又主任者がつくりましたものにしらすても、世間に發表したり、主權者へ差出したりするためにつくりましたものにはよほど斟酌が用ひてある筈でありますから、この邊の處に注意を要するので、史家の希望しまする品は、當局の主任者が自分の覺えの爲めに、いかなる隱微のことでも、いかに失態にわたることでも、いかなる耻辱でも、赤裸に證明致したものであるのです。勿論かやうな史料は甚だ得難いことは申すまでもないことである、畢竟これが爲めであります、ヨーロッパにおきましては最近五十年の歴史は到底精確にわかりません、それは茲に申上げるやうな確實の證據物件が世に出て居らんからであります。

史料の製作年代、製作場所、製作人物の、この三つのものを上に一通り辯明致しましたが、要する

にこの三つのものは相合して考へねばならんことであるのです。若し茲に幾品か史料が出ましても、何れも皆堂々たるものであるが、唯製作年代の一點に於て相違がある、甲は史學事項の起りましたその日のものである、乙は數年の後のものである、丙は數十年後のものであると、かういふことでありまするならば、この三つの史料の可然程度は申す迄もなく甲乙丙の順となります。又他の點におきましては少しも等差がないものと致しましても、場所だけが違ふといふことでありまして、甲は史學事項の起つた土地乙は二三十里を隔つて居る、丙は數百里を隔つて居ると申すことでありますれば、この場合におきましても、前同様、可然程度の順は甲乙丙の順の通りになります。製作の人物につきましても、同様のことでありまして、たとへ製作の年代と場所とは申分がないと致しましても、甲は當局の主任者、乙は主任者の屬官、丙は民間の學者であるといふやうなことでありますならば、やはり可然程度は甲乙丙の順となります。

年代、場所、人物の三つの中で、一箇條だけ申分がないとして、他の二つのものに異同が附いて参りますと、大分混雜して参りました、調査の仕事は少し面倒でありまするが、やはり原則は上に申しましたと同じ原則によるのである。

若しこの三つとも何れも皆等差があるものとなりますれば、これは仲々厄介で、可然程度が餘程むづかしくなつて参ります。しかし原則に於ては、異なるところはございませぬ。

第三 史料の等級

以上申上げる通りの次第であるですからして史料の等級を左の如くに分けます。

一等史料——まづ第一に來ますのは史學事項の起りましたる當時、當地におきましてその擔當主任者が自からつくりましたる史料、たとへば擔當主任者の古文書日記の類、參謀官の覺書などの類であります。この類のものを、一等史料と致します。

二等史料——次には史學事項の起りましたる當時當地に最も近い時代場所、あるひは當地ではあるが時代だけがやゝ隔つて居ると申すやうなる場合に、擔當主任者が自からつくりましたる史料、即ち追記の精密のものである、記憶より證明致す場合である。普通の覺書記録の類は、その上乘なるものでこの類のものであります。古文書といへども、過ぎ去つた事を往々に述べることもあり、かやうな場合におきましては、古文書といへどもやはりこの部類にはいるのである。この類のものを、二等といたします。

三等史料——次にはこの一等と二等の部類のものをつなぎ合はせまして、それに連絡をつけた種類のもの、先づ最も上乘の出來の家譜、傳記、又は覺書などがこの部類に入ります。たとへ年代、場所又人物もまるで變つて居りましても、編纂の仕方さへ正確でありますならば、この部類の

史料は、つくることの出来るものであるのです。この部類のものを第三等といたします。

四等史料——次にはたしかにはわかり兼ねますが、大體より推しますれば、年代といひ場所といひ人物といひ、先づ差支へないやうに思はれるが、とにかくこの三つのものが餘り明白でないか、あるひはよしやこの三つのものが、よくわかるにいたしましたし、何様古いもので轉々轉寫致しまして攙入は澤山にはいつて居るし、無論脱漏もあらうしたし、かと思ふ部分にも、あるひは轉寫中にどんな異同を來したかもわからんといふ様なむづかしい品物があるのである。建築物地理などは多くこの類でありまして、書籍におきましても多くこの類の品があります。確實の記事がその中にあることは疑ふことは出来ないのであります。さて攙入の文と原形の文とをはっきり區別することが困難であるために、どれを採用してどれを棄てやうか、取捨に非常に困るのである。この部類のものを、第四等といたします。

以上第一等より第四等に至りますまでの分を總稱致しまして根本史料と申すのである。我等が用ひまする根本史料と申す言葉は、以上の四等の中に限ると御心得を願ひたい。これより以下のものは可然程度の甚しく落ちるものでありまして、嚴密なる史學の上より申すならば、先づ以て参考に過ぎぬものである。この部類の第一に來するものを五等史料と致します。

五等史料——五等史料と致しますのは編纂物の上乗なるものである。編纂物を審査するのは餘程む

つかしいので編者がどういふ史料を手許に持つて居て、どういふ方針によつて審査したのであるか、何か政治上とかあるひは教育上とか、あるひはその他のある特別の事情に掣肘せられてある一派の意見を強いてあらはさうと致しはせなんだか、そこいらあたりのことを篤と考へねばならぬのである。こゝに上乘と申した編纂物は、我等の解釋するところでは、かういふことであるのです。採用して居る史料は根本史料に限る、審査の方針は科學的である編纂者の眼中には毫末も偏頗の考がないと申すことなのである。かやうにして出來た編纂物でありますならば、我等はこれを第五等と致します。しかし實際はこの部類の編纂物は極めて尠うございます。

等外——この外に尙ありますのは可然程度の更に落ちまする編纂物、傳説、美文、歴史畫その他であります。單に史學におきましては、参考のために備へ置くに申すだけのものではありません。もつとも研究の題目によりましては、こゝに申す等外の品でさへ、随分重く見なければならんことがあり得るのであります。殊に當時の社會を實寫致しました芝居、狂言、流行歌、川柳、小説の類は一時代の社會をしらべまするには、缺くべからざる證據物となります。かやうに社會を實寫いたして居ります品は、芝居狂言その他のもといへども、もとより必らずしも美文ではありません、往々にして所謂俗文學で、至つて野卑のものもございませう、所謂士君子の眼を汚すに近いものもございませう、とにかく社會の寫眞でありますので、甚だ必要を感ずることが

ございます。この類の上乗なるものは、一時代の社會の姿を調査致しまする際には、一等史料としてあらはれて参ります。唯困るのは上乗なるものを撰み出しまするのに甚だ困難致します、即ち尋常一様の史學の研究には、この種類の史料は先づ以て御入用のない方であります。

以上申述べましたところは、史料の等級の大體でありますが、已に申す如くに證據物件の可然程度は品によりまして千差萬別でありますので、何れの證據物件も、以上の等級のどれかの中へは、きりは、まると申す次第では必らずしもありません。往々にして一等と二等との間、あるひは三等と四等との間、あるひは五等と等外の間などのものが出て参ります。此の如き曖昧程度のものゝ起つて來るのは、すべての類別に於て免れぬ所で、致しかたがないのであります。次には史料の分析についてお話しいたします。

第四 史料の分析

史料の分析と申すのは、大凡次に申す様なことであります。茲に一つの歴史事項につきまして史料即ち證據物件が幾品かありまする、もつとも場合によりましては何にも彼にも唯一品よりないこともありまます、所謂唯一史料の場合でありますが、それは追て申すこととして差詰何程か證據物件のありまます場合から説明いたします。

かやうに幾品かありますれば、一々その品につきまして充分なる審査を遂げなければなりません。製作の年代、場所、人物などのことは勿論すべてわかつて居ること致しましてその上の審査でありまするが、一品毎に歴史事項につきまして、どれだけの證據を與へるであらうかのしらべでありまして、これは仲々面倒なことであります。又證據物の數が多うございますれば、その證據物の與へまする證據を比較して、程度の高下をよく見ねばなりません。この邊あたりには於てかの可然程度の考へが大にいつて参るのであります。かやうなる證據物の性質、しらべを致しまするのを史料の分析と申すので、恰かも化學におきまして定質定量の分析法があるのと甚だ類似したことであります、分析という言葉も、畢竟この邊に學んでつけたことであります。

これは要しまするに、實例を以て示しませんければ到底おわかりになることでありませぬ、又一二の實例を説明致しました處で、直ちにその例によつて他の場合を分析なさるといふことが出来るかどうか覺束ないでありまして、これも、やはり御熟練ものでありませう。申さばやはり一種の技術でありませう。

イ、二個以上の史料の場合。

第一例。

羽柴秀吉が天正十年に高松の城を圍みまして、首尾よく城を降しました、随つて毛利家と織田

家の代理たる秀吉との間に和議が成立つて居ります。この和議の書面の日附は、同年の六月四日である、よつて和議の本書の日附によりまして、この兩家の和議の成りましたのは、六月四日であると断定しますから、その方は宜しいが、さて和議が成つて後に、毛利家の軍隊も織田家の軍隊即ち秀吉の軍隊も、各その陣地を引き拂つて歸國の途に上りましたのである、毛利軍の方は差詰國へかへるだけでありましたが、織田軍の方はさうではありませんので、惟任光秀を誅伐しやうとする眼前の大目的を持つて居るのである、そこで歸路を非常に急いだ筈なんである、然るところがこの寸時をも惜むべき際に當りまして、秀吉が何日に高松を引拂つたのであるかといふことは疑問であるのです、説が二つあるのです。但し我等が茲に申すのは、主將の羽柴秀吉が引拂つたことを申すので、織田軍全體を申すものではありません、織田軍の引拂は別問題として主將は何時高松を引拂つたかと申すことではありません。この事につきまして證據物件が大分ございます、その重なるものは左の通りであるのです。

- 一、梅林寺文書。
- 二、松井家譜所載文書。
- 三、古今消息集。
- 四、毛利家日記。

- 五、秀吉事記。
- 六、豊鑑。
- 七、備前軍記。
- 八、浦上宇喜多記。
- 九、大閤記。

以上九種であります、第一の梅林寺文書と申したのは攝津國茨木に、中川家の菩提寺でありました梅林寺といふ寺がある、そこに天正十年六月五日附で、岡山市の直ぐ西に方ります野殿のどのと申すところより、羽柴秀吉が中川瀬平清秀に遣はしました清秀宛の返翰があります、この書を指して申すのである。即ち秀吉が高松を引拂ひまして岡山の直ぐ西にある野殿まで來ましたときに、清秀の手紙を受け取りまして、即刻返事を出したのであるのですから、行軍中馬上の執筆であるものと見なければなりません。勿論これはわれらの原則によつて第一等史料であります。

第二の松井家譜所載文書と申すのは、細川家の家臣に松井といふ家があります。この家は細川家の曩祖藤孝以來仕へて居ります譜代でありまして、大部の家譜を持つて居るのである。文化年間の編纂と見えますから、家譜そのものはかやうな古い時代の證據物とはなりません、幸に家譜の中にこの家に關係しました古文書が随分擧がつて居るのである。その古文書の中に、

天正十年六月八日附、即ち秀吉の馬上執筆の返翰より三日後の日附で、杉某といふ人が送り出した書状が載つて居ります、これをさしたのであります。これは我等の原則によりまして第二等史料である、と申すのは書状の執筆者杉と申すのは何者でありますか、未だ十分しらべて居りませんが、要するに秀吉の行軍の有様を實際見て居つた人に相違ないので、それを三日後に書いたのでありまして、記憶の程度もまだ餘程高い時分のものであります。何様行軍の事でありますので、深い意味の別にあることなし、いつ幾日^{いくか}どこそこを誰の軍隊が通つたといふことだけであるから、傍觀者にも明白にわかることである。勿論主將や參謀長などでなくては、わからんことではないのである。それゆゑに強いて申さば第一等ともなり兼ねまじきものではありまするが、しかし正しく申さば二等と申すべきものであります。

第三の古今消息集と申すのは、古來有名なる古文書を集めまして種々の種類の文書の文體を示したものでありまして、昔はこれを消息用文集としまして教科書につかつたものであります。一通も僞物は、はいつて居らんので、非常な有益の書でありまするが、この中に天正十年十月十八日附で、羽柴秀吉が織田信孝の家臣齋藤某と申すものへ宛てまして差出した書状がある。これは名宛は齋藤某でありまするが、信孝の御前へ披露してもらふつもりで書いたのである。この九月十月頃の日附の秀吉の書状で、己れの勳功を盛んに謳ひまして、申さば一種の宣言書、あるひ

は檄文と申しても宜しい姿のものが澤山あるのであります、現に羽後の國あたりにさへも參つて居ります。光秀誅伐以後は、秀吉より方々へ此の如き書状を盛に出しましたので、遠國の大名がたより秀吉のもとへ消息でも送りますれば秀吉は直ちにこの宣言書を返事として送つたのであります、申さば一種の菟菟版摺の宣言書又は檄文であつたのです。齋藤某宛の文もやはりこれであるのです、即ち一種の權略を具へて居る文書でありまして證據物件と致しましては餘程斟酌を要する類のものであるのです。勿論秀吉の抱負に對しては第一等史料となりまするが、光秀誅伐以前の事項につきましては、さう重くは見られんのである。よつて我等の原則によりまして、この文書を第四等と致します。

第四毛利家日記と申すのは、毛利家の祐筆が編纂致しました家の記録である。勿論公務と致して編纂致したものであるです、あるひは中に少しのあやまりがあるかも知れず、あるひは中に少しの斟酌がしてあるかも知れんけれども、憚るに及ばんこと、あるひは著しきことに對しましては正確に述べた筈でありまして、先づ以て編纂物の上乗でありませう。よつてこれを第五等といたします。

第五の秀吉事記は、有名な秀吉の祐筆大村由己の執筆で、勿論編纂ものである。又必らずしも事件の起つた當日に、筆を執つたものではないのである。しかし左右にあつて機密に與つて居ま

した祐筆が、やはり公務として編纂致したものであるのですから、第四の如く第五等と致します。第六の豊鑑は、著者がよくわかりませんが、普通には竹中重春の子重門の編纂であると申傳へるので、年代は寛永中でありませう。さすれば毛利家日記や秀吉事記にくらべましては、勿論資格が落ちます。それは製作の年代、製作の場所、製作の人物、何れも皆下つて居りますので、大分價値は落ちるが、しかしありふれた編纂物ではないのです。たとへ上乘とは参らずとも可なりの出来であるといはねばなりません、即ち精密に申すならば、五等と等外との間にあるものであります。茲には假りに五等の中へこめて置きます。と申すのは編纂物の性質と致しまして年代の高下にはあまり重きを置きません。固より年代が古ければ古いほどよいに相違ない様であるが、いつでも左様には参らるのである。要するに材料が根本史料であること、審査方針が科學的なること、編纂者の眼中に毫末も偏頗の考のないと申す、この三箇條の要件さへ満たせば宜いのでして、ことによるといふと、古い編纂物よりは、却つて新らしい編纂物の方が史料としてはよいことがある。豊鑑の場合に於ては少しあやまりもあり、聊か敷衍もあるししますんで五等と等外の間にあると申したのであります。大體よりして申しますならば、五等と認めても非常なあやまりはありませんまい、ゆるに假りに五等に編入致したのであつた。

第七第八第九の三つは普通の軍記でありますので、勿論一概に杜撰とは申しませんが、固より

重く見られる證據物ではありません、即ち等外であります。しかし等外の中では、まづ資格の高いものでせうで、六等と申しておきませう。

等級わけを致したところで、以上の九種は先づ右様である。随つて第一に着眼すべきは、梅林寺文書であるのです。この文書によりますると、羽柴秀吉は六月五日に高松を引拂ひまして、歸路野殿におきまして書いて居るのである。野殿は秀吉の歸路の路順みちじゆんでは高松より二里ばかりの處であります、随分歸りを急いだ行軍であるのですから、先づ二時間そこ／＼で着いた筈なのである。又五日の晩は秀吉が岡山の東の沼で泊つて居ります、沼は高松より六里ばかりのところであるのです、この邊より考へて見ますれば、秀吉は五日の午後に引拂つたに違ひないのである。かやう見ますれば、秀吉高松引拂の日は六月五日であるといふこと、梅林寺文書一品から出て参ります。

第二の杉某の書状は、秀吉の行軍を見ました僅か三日後でありまして、記憶もまだ極く新らしい時なのであるが、去ぬる六日に姫路に秀吉が入城されたといふ報告が出て居るのであります。これを梅林寺文書に對照致しますると、沼で一泊致しまして、翌日歸城といふことと相成ります。至極辻褄が合つて居るのです。

毛利家日記、豊鑑の二つも、やはり六月五日高松引拂といふ説である。然るところが、この月

日に就きまして異論の出まする根據は、古今消息集の秀吉の書翰である。これには六日まで高松で逗留し、七日になつて二十七里の道を一日一夜の間に姫路まで駆け抜けたといふことである、それゆゑに大に唯今申述べたところと話が違つて來るのである。又この六日高松引拂の説を秀吉事記と三つの六等史料が賛成致して居るのである。三つの六等史料は固よりあまり大口を利くことの出來ぬ品である、唯考へねばならぬのは、古今消息集の古文書と秀吉事記の異見とである。已に上に申上げたる通り、古今消息集に載つて居る齋藤某宛の秀吉の書翰は一種の宣言書であるのであつて、天下をとる大抱負を漏らして居るものであるです、事實を明白に申述べぬ方が利益なので、殊更に大言壯語致しまして他人の荒膽を取りひしぐ工夫をしたものと見なければなりません。それがために、現に我等は四等とまでも資格を落したのであつた。これが六日引拂と申すことを云つて居つたところで、あまり深く顧るにも足らぬことでもあります。又秀吉事記の申すところは侮り難いことであるですけれども、これも往々浮華の口調のある文體でありまして、やゝもすれば誇張がましい口調のところ、さう嚴密に悉く書いてあることを信するわけには參らるのである。まして我等が問題と致したのは、主將の秀吉が引拂つた日のことで全軍の引拂の日のことを申すのでありません。急場きふばでありますから、全軍は準備の整ひ次第後より踵ついて來て差支なかつたのである、又現に左様に致したことであつて、秀吉は馬廻り

のものの一部隊とをつれて急いで歸り、大部隊は後ちに残つて居りまして準備の出來次第順次に歸つて參つたのでありました。それゆゑに大部隊は、いかにも六日に出發致したのでありませう。されば高松攻の織田軍が引拂つたのは何日であるかといふ問題ならば、六月六日と申して宜しいのである、秀吉事記あたりはこの全軍の引拂つた日を、主將の立去つた日と差別をしませんで書いたものであると思はれるのである。又主將が先づ立去つたと申すことなどを、軍隊の者共が獨りも残らず皆知つて居つたかどうか覺束ないのである、恐らく知りますまい。部下の一將校などは、あるひは主將も自分等と一所に出發されたことと思つて居たかも知れません。

考證の結果かやうなることとなります。よつて我等は本題の答と致しまして、羽柴秀吉が高松城を去りましたのは天正十年の六月五日であると決定いたします。

尙このことにつきまして委しい考證を御承知ありたい方は史學雜誌第九編第十二號に、内藤馬藏君の梅林寺所藏秀吉書翰に就いてと題する論文がありますので、それを御參考下されたい。

第二例。

長慶天皇を御歴代に算へ奉ることは幕府の續本朝通鑑水戸藩の大日本史等の主張いたしましたところ、舊時より史家の定説と認められてきましたが、後に國文學者の側より異議が出まして天皇の御在位を否定いたしました。御在位説を取るものは室町幕府の日記たる花營三代記のするところの情

報に基づき、否定説を立つるものは後花園天皇の勅撰に成れる新續古今和歌集の作者名に據るの
で、いづれも論據に弱點があつて一般の學者を悉く心服せしむるに足らぬのであります。然る
處近頃に至り新しき史料續々と現れ、もはや敵方たる京都武家の報告や史學に縁故なき歌人の歴
史穿鑿に専ら信頼する必要がなくなりました。

長慶天皇御在位の實否に關する證據物件の重なるものは左の通りで、直接と間接との二種類に
分れますが、先づ直接の種類としては

- 一、新葉和歌集奥書。
- 二、畊雲千首奥書。
- 三、嘉喜門院集袖書。
- 四、花營三代記。
- 五、新續古今和歌集。
- 六、建内記。
- 七、康富記。
- 八、觀心寺文書。

の五種を擧ぐべく、次に間接の種類としては

九、印信秘抄奥書。

の四種を提出いたします。問題が重大であるだけに分析も最も慎重なる取扱を要します。

第一の新葉和歌集奥書は故富岡謙三氏の所藏に歸したる新葉和歌集の古寫本で流布本にはなき
奥書あり。奥書は四段に分れ、第一段は應永三十年三月原寫のとき書きたるもの、第二段は同三
十二年の追記にて共に原寫者なる釋竺源叟惠梵の筆に係り、第三段は永享十二年仲春桑門智明が
轉寫せるとき添へたる所、第四段は寛正四年十月隱士銘至が更に轉寫したるとき加へたるも
のにて、此本は寛正四年の謄寫であります。史料となるのは初の二段で其文は次の通り

奥書云

斯集南朝慶壽院法皇御在位之時詔於予叔父中務卿宗良親王而所被令撰也彼大王則宗匠民部卿爲

世卿之外孫也大王母贈從三位
爲子爲世卿女也依得付囑應此撰導作者皆以亡逝矣纔現存者唯兩三輩而已所謂上野太

守懷邦親王右近大將長親法名明魏
號耕雲老拙等也俗名兵部
卿師成親王到披卷而慷慨有餘嗚呼魄雖歸於泉下名孤存牋

上矣故者之骨未腐於土中名先滅世上適爲後世被知之者唯和哥人而已云々斯語誠宜哉莫斯詠哥者

爭知故人之風騷乎後生晚進之志尤可嗜者此道也道子豈不鞭於殿乎

應永卅貳年 月 日

釋竺源叟惠梵志之

本ノマ、應永卅年三月日書寫之于時勢州安藝郡栗真庄南陽寺泉昌庵行年六十三

同四月三日以耕雲自筆本校合了此集作者存者纔餘三四人而皆亡畢

梅隱祐常中務卿○新葉和歌集ニハ式部卿トアリ 惟成親王愚拙上野太守懷成○懷邦ノ誤 親王貞子内親王右近大將長親已上五人而已存但梅隱今年三月三日薨貞子内親王同十二月薨了 然らば弘和元年に上れる新葉和歌集は師成親王の御説により慶壽院天皇の勅撰でありました。 奥書の此二段は二等史料であります。

第二の畊雲千首奥書は佐々木信綱君所藏の古寫本に存するところ、其文は次の通り、

本奥書 長乘院殿 大覺寺殿 天授二曆仙洞并當今以此題令詠御于時愚身并故二條前關白教賴公左大將師兼卿于時春宮大夫別當

經高卿等可詠之由同有勅命於愚身者病中難治之間令故障畢故信州大王彼五千首合點之後又令詠(令カ)

給翌年春予病氣小減之間下賜六千首合一見處此餘風情更難出來之間難詠之由再往雖辭退之更無勅免之間兩旬之間如形終篇者也即大王又合點之時被示云於和歌者古來無長點而先年愚身大王自稱詠

千首遣故御子左大納言入道爲定卿之處此千首篇々鏤金玉古今傑出之佳篇也仍以別義加長點以示之畢依此例今度予此千首加長點之由有恩言等可謂眉目者也

元中六年正月最初大王合點本珍藏之間於旅店卒余寫之次思出記之 内大臣 判

此奥書本予所自寫也

余來三十季時移事變身前身後恍如一夢爰防州大守大夫居士有志于此道當世無比倫故與予有方外之交因磨老眼再寫此詠而寄座右苟能晨吟暮思(潛脱カ)沈反覆進學匪懈則一旦必須參透八雲出雲之先

赤人々磨定家々隆拱手倒退也必矣況如予碌々者至禱々々

于時應永廿二年孟秋廿九日也畊雲散人書

この古寫本も亦轉寫にて筆跡拙く草體の書を能く讀み得ませなんだ痕跡がありまするが、書風は應永を去ること遠からず思はれ二等史料であります。

畊雲散人は南朝名臣の一人花山院長親、元中六年内大臣のとき曾て宗良親王が合點したまひたる稿本を副寫して奥書の前半を添へ、應永二十二年更に復一部を自ら寫して歌道の門人に授けたるとき其の後半を書き加へたるものでありまするで、仙洞當今の傍註は應永二十二年に門人の爲に自ら打つたものと存じます、併し轉寫本で筆意が残りませぬから自註か他註か判明せず、依て傍註は四等史料であります。今この奥書の内容を宗良親王千首の跋に

天授二年の夏の末つかた、山風もしつかにふきて、しけき梢も枝をならさず、日くらしの聲ものとかに聞えて大宮人もいとまある頃なればにや、内春宮二御かた千首御歌あそはさるへしとて關白なとを初として面々おなし題にて歌奉るへきよし仰こと有しかとも云々

とあるに對照しますると恰も符節を合はしたるやうに能く合ひます。この跋は天授二年に、長親の奥書は元中六年に成りましたから、相距ること十三年に及び、跋の内春宮は奥書の仙洞當今に當らせられます。傍註の大覺寺殿は申し上げるまでもなく後龜山天皇をおさし申します、長乘院

殿は長慶天皇を申し上ぐるに相違なく、奥書の轉寫人は赤人の『赤』をさへ確に讀めぬと見えて胡亂な字を書いてるくらゐですから、能く似た草書の慶と乗とを判別する知識がなかつた爲に長慶院殿を謂れない長乘院殿と寫し誤つたのでありませう。

第三の嘉喜門院集は流布本には袖書がありませんが前田侯爵家所藏本は實爲集と題し袖書を存する室町時代の古寫本であります。袖書の全文は次の通り

天授三年七月十三日中務の宮より新葉集のために嘉喜門院へ御うたを申され侍ければきよかゝせられけるつゝみかみにかきてたてまつりける

藤大納言實爲

かすくゝにたまをみかけることの葉をわか水くきそかきもなかさぬ
見るまゝに袖こそぬるれなれしよのおもかけのこるきみかことは

御返し

水くきの露のひかりに色もなきことの葉さへやたまと見ゆらん
ふかく思ふ袖そぬるらんれし世をしのはたれもならひなれとも

此まき物のおくに宮のかゝせ給ける歌などを御らんせられて御ふみのついでに内の御かたよりしくなる袖にやかけのくもらんみしよの月をおもひいてつゝ

長慶院法皇

いかにふく松風なればよそにきく人の袖までうちしくれけむ

この袖書によれば嘉喜門院集は新葉和歌集を撰修せられしとき仰により其の資料として作進ありしものにて『内の御かた』の傍註に、長慶院法皇とあるは、誰の註するところか知れませぬが舊い註に相違ありませぬ。我等はこの袖書を三等史料といたします。

第四の花營三代記は室町幕府の日記で、京都武家の事項に就いては一等若は二等の史料であるが、南方の形勢を偵察せしめた情報などは固より四等であります。この日記應安六年^{文中二年}八月二日條に

南方奉讓位於御舍弟之間相副三種神器没落吉野云々

とあるは不審の報告であるが、強いていへば京都武家を惑はさむ爲に構へた噂かも知れず、或は又戰陣の間のこととて後醍醐天皇の先蹤を御踏襲あそはされ權宜の御沙汰を下されたりやも計られず、御讓位は兎に角誤聞として、天皇は御兄に渡らせられ、皇太子は御弟に在らせられしことは明白であります、而して天皇は慶壽院又は長慶院と申し奉りました御方であらせられました。

第五の新續古今和歌集は本問題に對する證據物件として等外無價値の品であります。元來撰集の撰者はある時期の最も秀逸なる詠歌を撰抜することを任務といたすもので、作者が誰なるかなどの問題は事務を取扱ふ屬官に委ねておいて宜しいのである、若し作者が確にわからねば、讀人

不知としても相濟むはず、勿論作者に取りては迷惑至極の沙汰であらうが、何様數萬の和歌の中より若干を選び抜くのであるから、作者を取り違へることもないとは限るまい。新續古今和歌集は南北合一の後四十餘年を経たる永享十年に成りました。當時の歌人には南朝の舊事を心得たもの恐らく一人も居ませなんだらう、後龜山天皇が大覺寺法皇として幕府が崇敬し奉りしを聞き知りましたくらゐの事でありましたらう。されば新葉集の御製に

春はまた我すむかたにかへるなり蘆屋のあまの衣かりかね

とあるを後龜山天皇の御製としたるは深く怪しむに足りませう。

以上申し陳べましたところで、長慶天皇は後龜山天皇の御兄に渡らせられ又慶壽院殿とも申し上げ奉りしこと分明となりましたが、尙ほこの點を一層明瞭に致しませう。

第六の建内記は伏見宮御所藏の日記であるが、其の嘉吉三年五月九日條に

後聞海門和尚常光院別師弟子後醍醐院曾孫後村上院孫慶壽院御子常徳院主南禪寺前住自去年住鹿苑院掌僧事圓寂云々○中今日向嵯峨慶壽院即入滅後云々

後聞南方小倉宮後醍醐院支孫後村上院曾孫後龜山院御孫故恒敦宮御子略○中近日所勞邪氣圓寂云々云々與海門和尚同日希代事也

と見えます。同日の記事に後醍醐天皇の曾孫慶壽院御子海門和尚と後醍醐天皇の玄孫後龜山院御孫小倉宮との圓寂を報しまするに、和尚の方を先に書き宮の方を後に書きましたのは、曾孫と玄孫と一世の距りあるに注意いたしたばかりでなく、和尚の父は御兄で宮の祖父は御弟なりしこと

とをよほめかすかと思はれます。この日記の記事は二等史料であります。

第七の康富記は原本で帝國圖書館の所藏である、其の嘉吉三年五月十四日條に

或語云相國寺鹿苑院主承朝和尚海門去十日曉入滅七十餘云々

とある。僧侶には法稱と法諱とがありますから、海門は法稱で承朝は法諱であらうと存じます。

この記事も二等史料であります。

第八の觀心寺文書に承朝の御狀がある。

觀心寺座主職事任長慶院御遺命申付於内山光賢僧正候了此由寺家可存知之由可有仰候恐々謹言

應永十四

四月十七日

承朝

觀心寺座主職は長慶天皇の御料でありましたので相傳の御遺命があり、御子承朝よりこの旨を御傳達ありましたことと存じます。第六、第七、第八の三史料によつて長慶院と慶壽院とは同一の天皇を申し上げ奉ること毫釐の疑もありません。承朝の御狀は勿論第一等史料であります。

第九の印信秘抄は金剛寺の所藏で次の奥書があります、應永頃の書風で傍註も同筆であります。
大覺寺仙洞御兄
依長慶院殿御尋光賢注進本也

この奥書に據れば、觀心寺の光賢僧正は長慶天皇の御下問を蒙り此の抄を撰述して注進いたしました。後に天皇よりお返へし下されたので、其の由緒を卷末に書き入れ鄭重に保存してたのを金剛寺か或は他の人より懇請して一部を謄寫したのがこの古寫本であると解釋せられます。光賢僧正は長慶天皇にも後龜山天皇にも昵近し御二方の御信任も淺からざりし由に傳へますので、傍註の説は確實にして動かすべからざるものと信じます。若し金剛寺本が光賢僧正の肉筆でありますならば奥書と其の傍註とは一等史料であるが、さもなき上は三等に落ちます。

長慶天皇の御事蹟に就いては故八代國治君は畢生の努力を致され、其の勞作長慶天皇御即位の研究は大正九年に公刊せられ後帝國學士院に於て恩賜賞を授けられました。天皇に關する事項は最大洩さず悉くこの書に網羅してありますので、此の例に就いて研究せらるゝ人々は同書を精讀せらるゝやう願ひます。

第三例。

ヨーロッパ人が始めて本邦に參りました年につきましていろいろ説があります。唯本邦に於て種々の説があるばかりでなく、ヨーロッパの方におきましていろいろの異説がございます。

その二三の例を申上げるならば、本邦の説の中には、文龜元年、と申すのがありますし、永正七年、と申すのがありますし、天文十二年と申すのがありますし、ヨーロッパの方の説の中

には千五百三十五年頃といふのがあり、千五百四十二年といふのがあり、又千五百四十五年、あるひは千五百四十八年など、いろいろの説があります。このことは國史の上におきまして、頗る重大の關係でありますことは、ひとりヨーロッパとの交通が始まりました端緒のことのみでありませず、又小銃の傳來致しました年にも關聯致して居ります。よつてどうか精確にこの年をきめたいことであるのでありましていろいろ研究致して見ますれば、幸にこのことを定めることが出来るのであります。

先づ本邦に傳はつて居りまする、このことに關する證據物件を擧げまするならば、大凡左の如きものであります。

- 一、鐵炮記。
- 二、種子島家譜。
- 三、重編應仁記。
- 四、北條五代記。
- 五、中古治亂記。
- 六、陰德太平記。

以上六種であります。ヨーロッパの方では、

- 一、アントニオ・ガルバンの世界発見記。
- 二、デオゴ・ド・コイトのインドに於けるポルトガル人の発見及び征服記。
- 三、メンデス・ピントの世界巡回記。
- 四、フランシスコ・サビエルの書翰。

重なるものは以上四種であります。これより分析して見ませうが、これは中々の難題であるのです。第一の鐵炮記と申すのは鹿兒島の大龍寺文之和尚の文集であります所の南浦文集に出て居りますので、この和尚は學問も出來まするし又政治向きのことにも委しかつたものと見えまして、島津家の外交文書などをば多く起草したやに承はります。和尚は慶長年間に鐵炮記と題する記録を漢文で書いておきましたが、鐵炮の傳來につきましては、最も確實の記事と傳へられて居るのであります。しかし何様、ヨーロッパ人が初めて参りまして鐵炮を傳へましたことを、當時より餘程年代の經つた慶長年間に、ま、精々史料を取調べまして書いたのではありまするが、とにかく一の編纂物たることは論はないのであつて、何様和尚の書きかたが甚だ緻密であるし、又然るべき史料を餘程搜されたものと見受けられるですから、先づ鐵炮記を第五等と致します。

第二の種子島家譜は、やはり普通の家譜でありまするで、等外でありまする。強いて等級をつけまするならば、第六等でありませう。

重編應仁記、北條五代記、中古治亂記、陰徳太平記などは、この問題に關しましては、無下の等外の品でありまする。六等とさへも参りません、一般の口碑傳説を傳へて居りますることと見ませんければなりませんから、強いて等級をつけまして七等でありませう。

ヨーロッパの方面の史料につきましては、第一のガルバンの世界発見記は、千五百四十一年より同五十七年の間に編纂しましたもので、侮り難き證據物でありまする。ガルバンと申すのは、有名なるポルトガルのモルカ知事でありましたので、ポルトガルの歴史におきまして異彩を放つて居る大人物の一人であるのです。この人が讒言のために免職されました、國へ歸つても用ひられませず、賞與さへもなく、遂に赤貧のために王立慈惠院へはいりまして、養育院ぐらしをして晩年の十七年を終りましたが、この養育院ぐらしの間に、手許にありまする材料やら、インド地方に居りまする朋友等が送りましたる書翰やら、あるひは知人の談話やら、いろいろなものを材料として書いたのであります。そこでガルバンは、假りにも僞を申すとか、己の勳功を自負するとかいふ性質の人物ではございませんから、自分の自から取扱ひましたことにつきましては、充分の信用をおかなければならぬのでありまするが、何に致せ自分は聞きませず、知人より書翰で云つておこしたなどにつきましては、本人は充分責任をとりきれることでありませぬ。それゆゑあるひは間違つたことが自然発見記にはいつたかも知れぬのであるからして、遺憾ながらこ

れを六等と致しませう。

第二のコイトの発見及び征服記は頗る重大の證據物件であるのです。この人は、千五百五十六年にインドに参りまして、ポルトガル領インドの記録局長となりまして、各種類の公文を取扱つた人でありまして自からその取扱ひましたる文書類を材料と致しまして、インドに於て著述を致しまして、十六世紀の終、即ち著者の生前に出版されて居りますので、その申述べますところは、容易ならぬ證據となるべき性質のものである、即ち全體を五等と致します。

第三のピントの巡回記は甚だ有名の書でありますが、惜しいことには昔からひどく評判がわるいのです。ピントは昔よりうそつき大將と申す綽名を得て居つた男で、その申すところは人々が一も二もなく笑つて了つて、まじめに讀んで呉れたものは一人もなかつたのでありましたが、近頃に至りまして我等が、内容を精々分析致して見まするに、いかにもピントは大法螺吹おほらふきでありまするし、又その事蹟の上からいひましても大ならずものであるに相違ないので、何をいふやら殆んど雲をつかむやうなことを云ひ勝ちであるのですけれども、中には全く事實に基いて居るかと思はれることも交つて居ります。種子島漂流のこと日本に於て鐵炮の傳播のことなど申すところは本邦に於て實話を聞いたと見えまして、餘程精密に書いてある、架空の空想では、いかなる大詩人大小説家といへども、到底書きうるまいと思ふことでもあります。それで巡回記全體の階

級を強いて申すならば七等以下にも下りませうが、この種子島漂流と鐵炮傳播との二つの事柄につきましては六等としてやらねばなるまいと考へます。

第四のフランシスコ・サビエルは、もとより潔白なる高僧でありまして、假りにもうそをつくやうな人ではありませんけれども、何様來朝以前即ち千五百四十七年に、ポルトガルの一人商より、新しく聞きたる發見談として日本の事情を知り得、千五百五十二年の一月末大同年の四月上旬にこの事をヨーロッパ方面へ通信した次第で、文中に今より八、九年以前に發見したりし國なる由を述べてますので、これより推せば發見は千五百四十三年乃至四十四年となります。何様内容が貧しいからサビエルの書翰は、本題に對しましては、無下の等外物となりまして、役に立ちません。

以上申上げるところによりますれば、本邦の證據物の中で先づ着眼すべきものは鐵炮記であります。但し五等ではありまするが、致し方がない。この記によりますれば、天文癸卯秋八月二十五丁酉の日に、種子島の西村の浦に、見馴れぬ船が参りまして、その人物の外形も、頗る變つて居るし、その言語もまるでわからなんだのである。幸に五峯といふ支那人が居りましたので、この人と西村の織部丞と申すものが、濱の砂の上に杖で筆談致しまして少しわかつたのである。そこで織部丞が、この浦は船を繋ぐ場所でないから、赤尾木へおいでなさいと申し傳へましたので、乃ち赤尾木へ参つたのである、これが二十七日己亥のことでありました。この赤尾木に往乘

院と申す坊様が居りまして、又五峰と筆談致しました。支那人等は聊かでした。支那人等は聊かでしたが貨物を持つて居りましたので、それを賣捌きました。ポルトガル人等は何も用がないので、獸獵に出かけたのである。そこで種子島のものどもが始めてこの鐵炮といふものを見ましたので、その驚いたこと一通りでなかつたのである。忽ちにこのことが島の領主種子島時堯に聞えましたので、早速ポルトガル人を喚び寄せまして、その品を聞き糺しまするといふと、よくわかりましたので、九月の九日に試験射的を行はせまして、その的中すること妙なるに驚いたのである。よつて莫大の高價にも拘はりませず、ポルトガル人等の持ちあはせの鐵炮を二挺買ひ上げましたのである。これが抑後に所謂種子島銃の標本となつたのであります。以上は文之和尙の記によつて我等が知るところである。尙委しいことは鐵炮記をお讀みになればわかります。

こゝに天文癸卯秋八月廿五丁酉とありますのは、千五百四十三年九月廿三日に當ります。さすればこのことに關しまする本邦史料の最もよいものが申すところでは、ヨーロッパ人の始めて來朝しまして、同時に小銃を傳へましたのは、千五百四十三年である。

次に種子島家譜によりますると、天文十二年八月廿五日に、南蠻人が參りまして時堯が鐵炮の面白い武器なることを始めて見まして、これを學びましたといふことが出て居ります。全く鐵炮記と同日と相成ります。即ち種子島家譜も鐵炮記も同一の材料によつて説を立つて居ると見

做して宜しうございます。

重編應仁記と北條五代記とは永正七年に始めて鐵炮傳來致したことに致してある。然るところが永正七年といふのは千五百年でありまして、ポルトガル人等は、當然未だシム邊までさへにも參つて居りません、況して本邦へ來た筈は萬々無いので、無論採用することは出来ません。これは後世の杜撰の傳説を書いたのでありませう。

中古治亂記と陰徳太平記とは文龜元年のことと致して居りますが、文龜元年は千五百一年でありまして、バスコ・ダ・ガマが始めてインドへ參りました年より僅かに三年後である、本邦へ參つたところぢやございません。これは永正七年の説よりも尙一層の杜撰であります。

左様致しますると、本邦の證據物より出ますところの唯一の説は、天文十二年即ち千五百四十三年と相成ります。

翻つてヨーロッパ方面の史料を見まするに、先づ以て第一のガルバンが比較的宜しい證據物であるが、しかしこれはガルバンが國へ歸りまして後に聞きました風聞でありまして、千五百四十二年に何某何某と申す三名のポルトガル人がシムよりニンポーへ向けての航海中に大しけにかゝりまして、數日の後東に方りまして北緯三十二度の處に島を見うけました。この島は即ちマルコポーロの所謂日本國であつたらうと思はれると書いてあるのです。ポルトガル人はニンポーの北

緯を三十度と致して居りまして、よく合つて居りまするのに種子島を三十二度と見ましたのは、種子島の南端（西村）を見た筈であるのですから、つと二度ほどの違ひがあつて、よほど観測がまづいのですが、何様大しけのまだ静まりきらん中であつたでせうし、観測が精密に行かなかつたのでありませう。

このガルバンの記事は傳聞でありまして、本人自分の見聞ではありませんからして、なうら價值は六等であります。

第二はコイトの説であるが、これも日本漂流の記事は、コイト自から聞き糺しました事項でないので、傳聞の儘を書きとめた書類か何かであつたのでせうで、そのまゝを書いたのであります。何某何某と申す三名が、千五百四十二年に暴風雨の爲めにシヤムよりシナへ參る途中で日本の地方へ吹き流されたといふことだけであるのです。

このコイトの申すことも、やはり唯傳聞に過ぎませんから、果して正しいかどうかは無論わからん、コイトの書全體は五等のなうら價值がありまして、この日本漂流一件は六等の價值よりありません、まことに困つたことである。

何れにしてもガルバンと申しコイトと申し、兩人とも傳聞しましたところは千五百四十二年のことであるのです、千五百四十二年と申せば天文十一年であります。但し因に申添へまする

ことは、コイトはマルチノ・アルフォンソ・ダ・ソイサと申すのが、ポルトガル領インドの總督であつた時代であると云つて居りますることである。この總督は千五百四十二年に赴任致しまして、四十五年まで在職でありましたから、何れともポルトガル人來朝のことは、四十五年以前のこととなるのであります。

第三のピントが、巡回記を著はしましたのは晩年閑居の際で、徹頭徹尾四十年前以前のことを記憶に任し、あるひはえゝ加減に筆を舞はして書き立てましたので、その申しまする年代などは實に甚だ覺束ないことなのであります。そこで本人が申しまする要領を搔きつまんでお話致しませうならば、大凡左の様なことである。

千五百四十五年一月十二日に、ピント等は交趾邊を出發致しまして、十三日にカントン沖の三竈嶼に到着致しました。こゝで然るべき便船を求め、つもりであつたところが、生憎乗り損ねまして、已むを得ずサミポセカと申す海賊に頼みまして、その船に乗り込まして貰つたのであります。

一行はもと八人であつたのであるが、海賊自身號令して居る船に乗つたのはピント等三人で、他の五人はこの海賊の指令して居る他の船に乗り込んだのであります。海賊はこれより福建省の海岸へ向けて進んだのでありますが、途中で他の海賊に遭ひまして、散り散りばら／＼に散

亂しましてピント等の乗つて居つた船は、やはり豫定の港にゆくてを急ぎましたのでしたが、三日目に大しけが出て参りまして、海岸は見えなくなり、遙かに沖へ押し流されまして、到頭二十三日の間漂流致しましたのであつた。遂に一つの島を前面に見つけたのであつたが、これが即ち種子島であつたので、島より二艘の小船に乗りました人々が船へ参りまして、何處より来たか問糺しました。さうすると船長は貿易のために支那より参つたと答へたので、土地の人は之に答へまして、規則通りの運上さへ納めれば、種子島の領主は快くゆるすであらうから、云々の港へおいでなさいといふことで、ミヤイ島といふ町のある岬のうしろに碇を下したのでありました。

こゝにピントが申しますことは、文之和尙の鐵炮記に書いてある所とよく合ひます、始めに二艘の小船に土地のものが乗つて問ひ糺しに來たと申すのは、西の村へ外國船がつかまつたので、村長の織部丞が濱の砂の上に筆談を致して、赤尾木の港を指定したことに相當致します。碇泊致しまして、まだ二時間にもなりませんのに、島の領主は數多の商人を引きつれて、船へ参りまして、商品の取引にかゝりました。ピント等三人の者は、その容貌が何様領主に目立つたものと見えまして、船長に尋ねたのでありました。そこで船長の答へましたには、ピント等はマラカと申す國のもので、そこへ數年以前ポルトガルと申す世界の一強國より参つたことであると答へました。さうしますると領主は更に尋ねますには、この外國人を何處で見附けて、又どうい

ふ見込でこゝまで連れて來たのであるかといふことでありましたが、船長は又、ピント等は正直な商人でありまして、しけを喰ひまして、いかにも氣の毒な有様でありましたから連れて参つたと答へました。よつて領主はピント等を側へ招きまして、明日邸へ來るやうに申述べたさうです。

船長の答の中に、數年以前マラカへポルトガルより参つたとありますのは、隨分年代が違つて居ります。かの有名なるアルフォンソ・ダブルケルケがマラカを占領致したのは、千五百十一年の夏のことでありましたから、三十幾年前と申さんければならん筈であります。こんなことはピントにはいつもあることなんです。

ピント等は何も取引する貨物を持つて居りませんので、銃獵に出かけたり、寺を見物致しました。すると寺の坊さんが頗ぶる親切に接待致してくれました。

三人の中にヂエゴ・ゼイモトと申すのが居りまして、これが上手の鐵炮うちで、獵に出ましたときに數多の鴨をうちとめました、すると日本人は、もと／＼鐵炮と申す武器をこれまで皆目見たことはなかつたのであります。效力の著しいのに、いかにも驚いたのでありました。よつて直ちに領主へこの旨を報告致しましたので、領主よりゼイモトを喚びに参つた、ゼイモト出頭致しまするといふと、大層鄭寧に取扱はれまして、この男のお蔭で他の二名のものも御相伴致した

ことでありました。それでゼイモトは御禮として、ある日持ち合はせの鐵炮を進上致しました。それで領主におきましても喜んでこれを受けられて、返禮として二千兩遣はされた。さて領主よりの御言葉に、鐵炮はあつても彈藥がなくては致しかたがないから、序に彈藥の拵へ方を教へて行く様にといふことでありましたから、所望通り彈藥の拵へ方を傳授致しました。すると忽ち日本人は鐵炮の鍛冶をはじめましたので、何程も經ずして島に六百挺餘の小銃が出来てしまひました。

ピントが申します種子島に於ての鐵炮傳授の話は、鐵炮記に書いてあります記事と、殆んど不思議の様によくあひます。鐵炮記に往乘院と申すお寺の住持忠首座と申す坊様が、筆談を致しましたこと、ポルトガル人二人が、妙なものを携へて居つたこと、即ち鐵炮記の文によりますれば、

手携一物、長二三尺、其爲體也、中通外直、而以重爲質、其中雖常通、其底要密塞、其傍有一穴、通火之路也、○下其爲用也、入妙藥於其中、添以小團鉛○中而自其一穴放火、則莫不立中矣、其發也、如掣電之光、其鳴也、如驚雷之轟、聞者莫不掩其耳矣、○下

とある如く、日本人が鐵炮を見て始めて驚いたこと、種子島時堯が所望致しまして大金を以て鐵炮二挺を買ひ入れたこと、それからして篠川小四郎をして彈藥の製法を學ばしめました

こと、又鍛冶屋數人を喚び寄せまして、新らしく鐵炮を鍛いたはせましたことなど、悉く鐵炮記の記事の通りであります。全く縁故のない二つの史料がこれほどまでよくあひますれば雙方とも確實であると認めますより致しかたがないのである。唯ピントに據りますれば、年代が千五百四十五年となりまして困るのでありますが、この年代が二三年違ふぐらゐることは巡回記におきまして、あたりまへの話で、固より著者の覺え違であるのでせう。

そこで本題にかへつて参りました、このポルトガル人三名種子島漂着のことを何年ときめて宜しからうか決定致したいものであるのです。

以上申上げるところによりまして、第一のガルバンは傳聞である、第二のコイトも傳聞である、第三のピントは覺ひ違ひ、第四のサビエルは、あやまりを傳へたのであるといふことになりまして氣をつけねばならんのは、つまりガルバンとコイトの兩人が傳聞ながら共に千五百四十二年と致して居ることである。そこで本邦の方の證據物件では、まじめに見なければならんものは、鐵炮記と種子島家譜であります。鐵炮記は、この史學事項が起りました後、大凡六十年も立ちまして後に編纂致しましたものである、種子島家譜は、例によつて六等である。さうしますると鐵炮記や種子島家譜と申すところもつまり傳聞であると申さんければならんのである。さうしますると、このことに關します證據物は、何れも皆左様申傳へまするといふだけで、自分等自からは

責任をとらるのであるのです、随つて證據と致しまして甚だ薄弱であります。

しかし鐵炮記の述べますところは、たとへ傳聞に致しましたところが、種子島家にとりまして最も重大なる出來事を傳へて居ります中の一つであります故に、随分注意せんければならぬ證據であるのです。まして何月何日まで明白に書いてあるのですからして、よほど重く見なければなりません。又考へて見ますれば、ガルバンやコイトが述べるところと鐵炮記の申すところと必らずしも符合せんとは申されないものである。即ちこの兩人の申すところが、漂流者三名がシム邊を通過致した年代である、鐵炮記の申します事は、種子島へ到着致しました年月日である。假りにこの間に半年餘のひまのとれたものと見ますならば、綜合が出来るのであります。三名のものがシムを通過致したのが千五百四十二年の暮であつて、シナ海岸へ參つたのが翌年の春であつて、種子島へ到着致したのが秋であると思ふならば、ガルバンもコイトも文之も皆満了いたすでありませう。

よつて我等はポルトガル人が始めて種子島へ參つた年代、即ちヨーロッパ人が始めて本邦へ參つた年代を千五百四十三年、即ち天文十二年であると決定いたします。

考證の眼目と致しました年代のことは上に決定致しましたが、序に始めて參りました三名のものは何といふ人であつたのか、その姓名のことを聊か申述べて見ませう。上には便宜のために唯

何某何某三名と、わざと姓名を省いておきましたが、三人の姓名のことは、實は年代を決定するよりも困難でありまして、先づはっきり決定することはむづかしい場合であります、未詳と申しておくのが穩やかかと思ふからである。その始末を簡単に申上げると左に申す様な次第であります。

ガルバンによりますると、三名の人々は、その姓名をアントニオ・ダ・モタ、フランシスコ・セイモト・アントニオ・ベント、以上三人であります。コイトによりますれば、アントニオ・ダ・モタ、フランシスコ・セイモト・アントニオ・ベイツタ、以上三名でありまして、第三の人の姓が聊かガルバンと違ふだけでありまして、他の兩人は全くガルバンの申すところと同じであります。文之は賈胡之長とありまして、二名だけ名をあげてあります、この二人の名をあげましたのは、兩人が鐵炮うちでありまして鐵炮傳來に關係があります故にあげたものと見えます、種子島へ漂流したものが唯二人きりであるといふ意味には書いてございません。即ち漂流者の總數は鐵炮記におきましては不明であります。その名と致しまして、

一曰牟良叔舎一曰喜利志多佗孟太

と書いてあります。この兩人の名は、いづれ五峯がマライ語か何かで聞きまして、兩人のものが極めて生かぢりのマライ語で答へたのを漢字で音譯致したものでありませうで、甚だ不完全に